

Fig.100 SD39 土層断面写真（上からFig.98のA、B、Cライン）

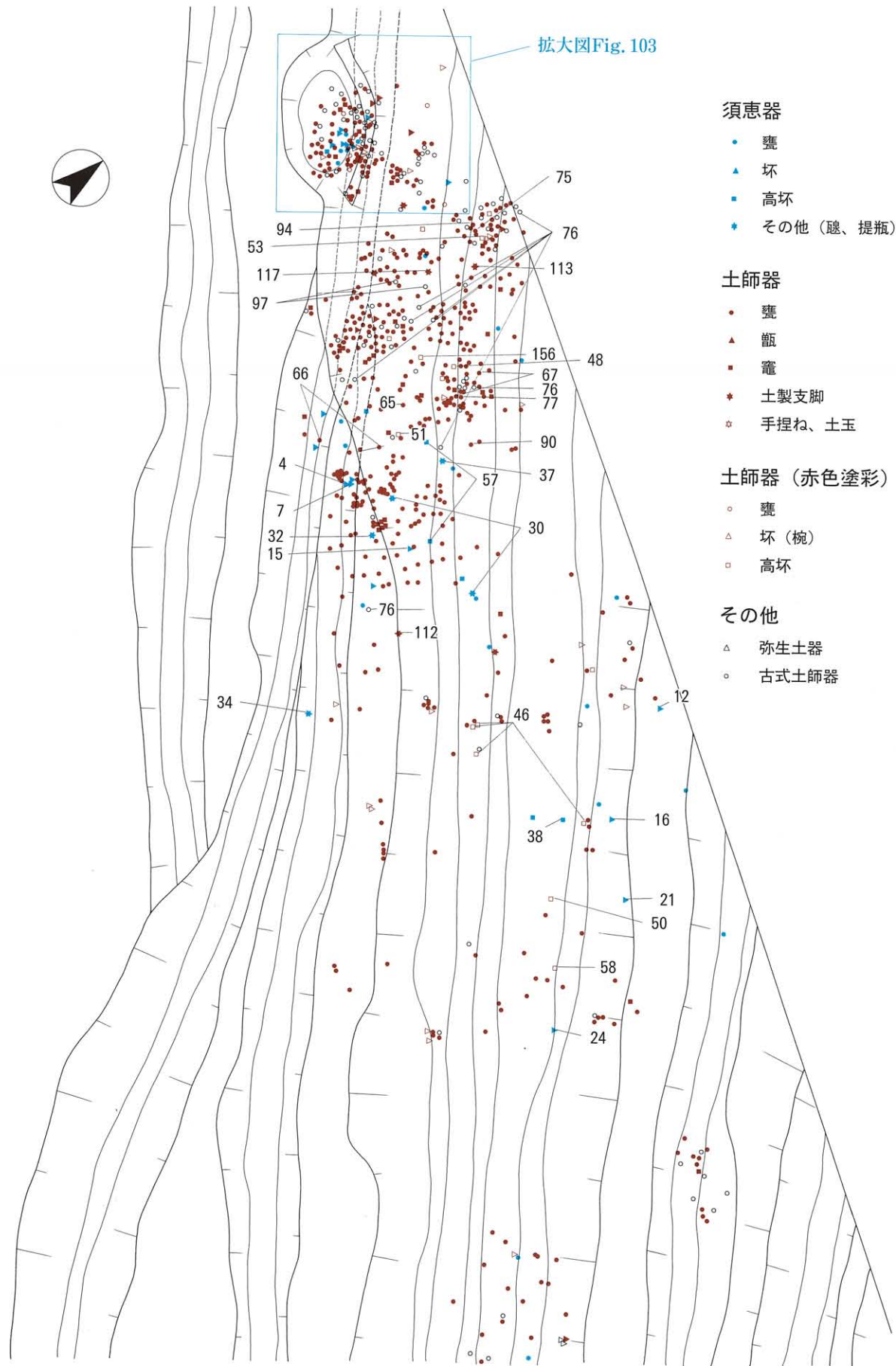


Fig.101 SD39上面 遺物分布図① (S=1/100)

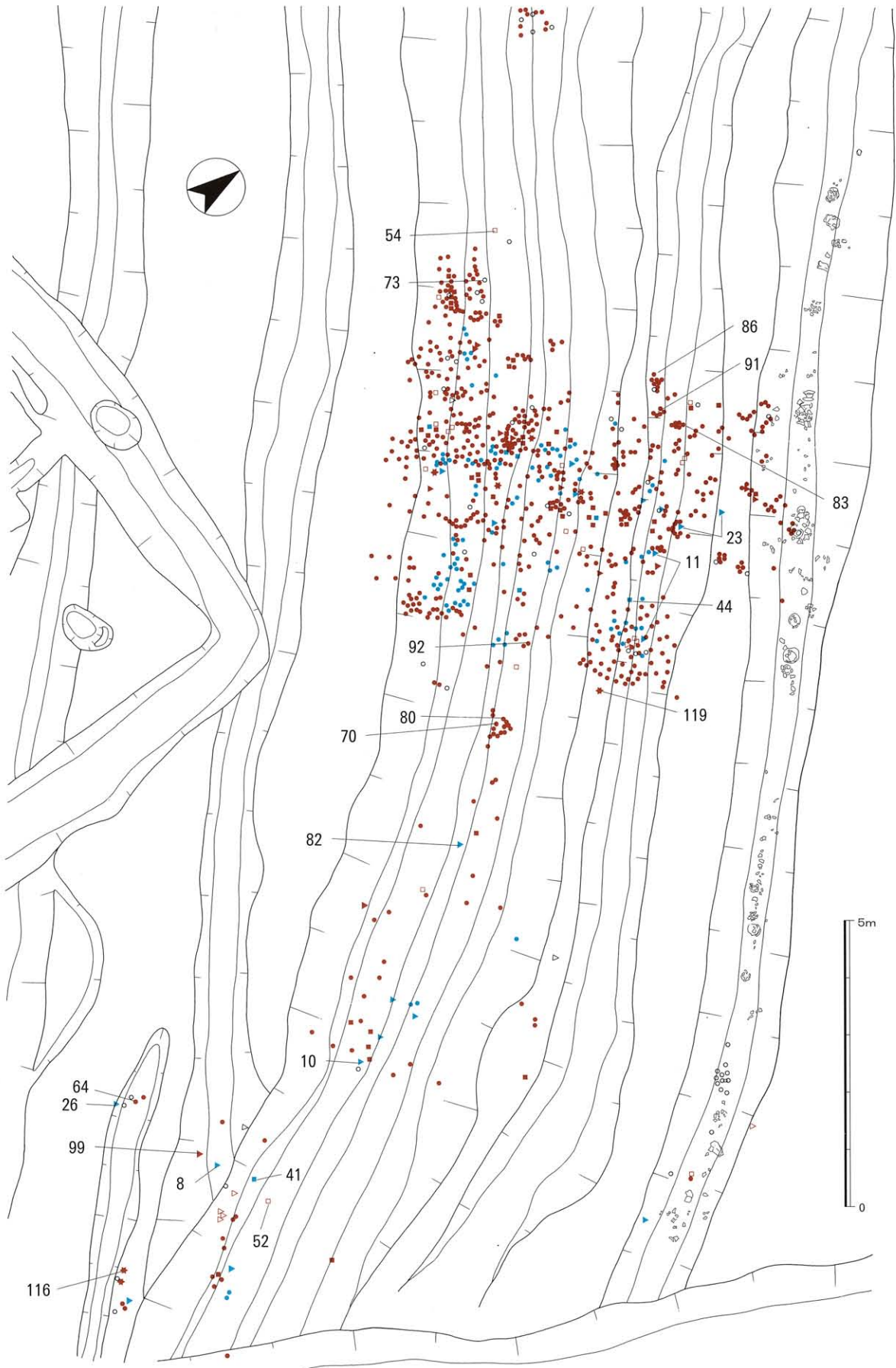


Fig.102 SD39上面 遺物分布図② (S=1/100)

6. 大刀と遺物集中部 (SX08)

SD39上面から出土した多数の遺物のうち、最も目をひくものが2振り的大刀である。これはSD39の西寄り、調査区の壁際から出土した。Fig. 101のなかで四角く囲んだ部分にあたり、詳細な出土状況をFig. 103に示している。

大刀は残存長109.5cmの大刀1と、やや短く残存長89.7cmの大刀2の2振りである。両者は切先方向を逆向きに、刃を向かい合わせにして置かれていた。ともに佩表面を上に行っている。出土位置の標高はともに7.3mで、SD39の(検出)最上面からは30cmほど低い。傾きは無く水平に寝かされている。柄木や鞘木などの有機質部分は完全に痕跡を失っており、鉄製の刀身だけが残存していた。大刀2の刀身ごく一部に木質が付着しており木製容器に納められていた可能性もあるが、矛盾も多く断定できない。その他の刀を梱包するような布なども、痕跡が全く無いため有無自体が不明である。

図示したように、大刀の周辺には多数の遺物が集中して出土した。集中の中心は大刀から1.5mほど離れており、垂直分布では大刀より20~30cm高い。個体数が把握できる主な内容を記すと、須恵器は坏蓋2、坏身3、甕、高坏1、土師器は大型高坏1以上、甕1以上、甌1以上、移動式竈1以上、土製品として土製支脚1以上、土玉5、手捏ね土器1である。

土師器高坏は正立した状態を保っており、その傍らの須恵器坏も、身に蓋がきちんと重なった状態で出土した。乱雑に投げ捨てられたというより、ある程度丁寧に置かれた状態を保っている。器種構成をみると、須恵器の供膳具と土師器の炊飯具の主要な器種がひと通り含まれており、単なる破損品・不要品の廃棄という印象ではなく、意図的に選別されたひとそろいの器種が目的をもって置かれているような感じを受ける。その印象を強めるのが、5個体出土した土製の玉と、手捏ね土器である。土玉は土器群の中に混じるようにして、さらに手捏ね土器は大刀の至近から出土している。これらは日常生活で使用されるものではなく、信仰・精神的な営みに用いら

れるもので、一言でくくるならば祭祀に関わる行為に伴うものである。

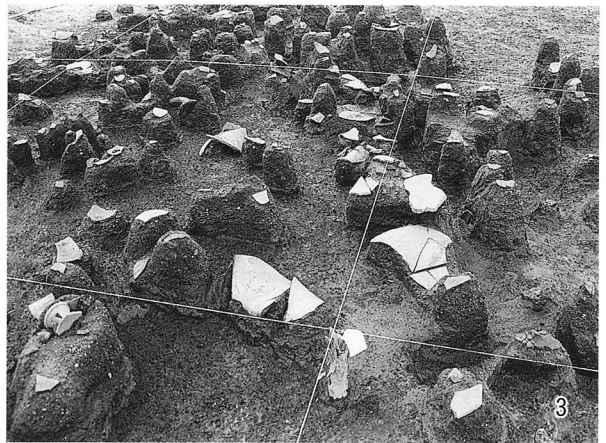
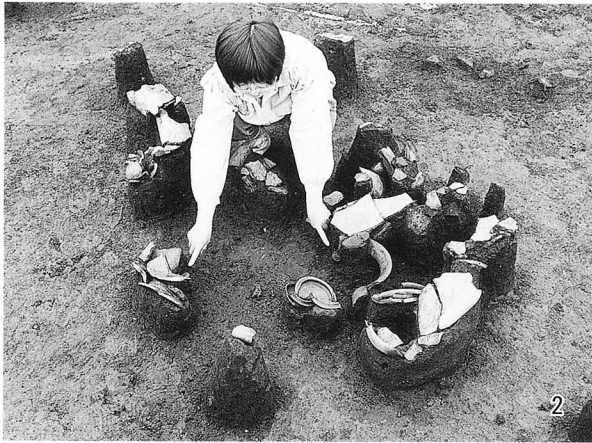
これらの土器・土製品群と大刀との関係は判然としない。大刀の出土地点の方が若干低いため両者が置かれた時期には時間差があるとみることもできるが、SD39は溝跡でもともと高低差があるはずだから、共に同時に置かれたと考えることも可能である。長さ50mにわたって検出したSD39のなかで、これほど特殊性のある遺物が集中しているのはこの一画が際だっており、大刀と土器・土製品群が無関係に至近距離から出土したとは考えにくい。同時に置かれたと見るのが自然ではないだろうか。同時であるならば、大刀はわずかに水流のある溝の深い部分に置かれ、土器・土製品は溝の縁あたりにまとめて置かれたと考えられる。土層の堆積状況を見ると、これらが置かれた後は特別に被覆土などがされることなく、露出したまま放置され、その後時間が経過して次第に埋没していったとみられる。この間に土器などは破損し一部は流失してしまったと思われるが、正立した高坏や坏の蓋と身の関係が乱されていないことから、それほど強い水流はなかったことが分かる。

鉄製大刀が意図的に放置された遺構の調査事例は、古墳や横穴墓のように埋葬に伴う副葬品として置かれる場合を除けば極めて稀少である。周囲の土製品には手捏ね土器や土玉など特殊な物も多く、祭祀的な行為に伴って置かれたものと判断される。しかし出土地点が祭祀行為のおこなわれた場所そのものであるか、あるいは集落内など別の場所でおこなわれる行為に使用された物が最終的に出土地点に置かれたものかは、出土状況からだけでは判断できない。出土地点は神戸川へ合流する流れのゆるやかな流路水際であるから、川あるいは水を対象とした行為であった可能性も指摘できるが、断定はできない。

なお上記の遺物を取り上げた後、土器・土製品が集中していた範囲の直下に、土坑状にSD39底面が窪む箇所を確認した。これを仮にSX08として、断面を残しながら掘り進めた。その際の写真がFig. 105-3である。この時にはSX08はSD39と別の土坑という先入

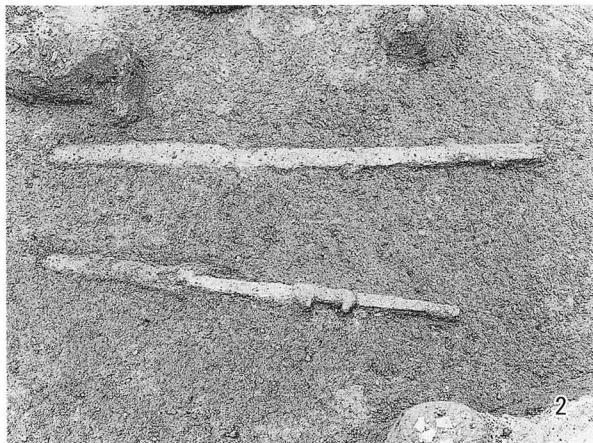


Fig.103 SD39上面 遺物出土状況図
 (S=1/20、範囲はFig.101に図示)
 (数字はFig.106以降の実測図に対応)



1. 北西から
2. Fig.103周辺、指さしているのは土玉の位置
3. 南東寄りの遺物集中部分
4. 同上

Fig.104 SD39上面 遺物出土状況写真①



1. Fig.103周辺、北東から
2. 大刀出土状況（Fig.106-1・2）
3. SX08（Fig.103遺物集中下の土坑、北東から）
4. SD39下層遺物の出土状況

Fig.105 SD39上面 遺物出土状況写真②

観があったため写真のような楕円形の土坑状に掘ってしまったが、その後断ち割って断面を確認したところ、写真で掘り残したような土坑の壁の立ち上がりは確認できず、SD39と一連の埋土が、切り合い無く堆積していた。従ってSX08は上から掘り込まれた土坑ではなく溝SD39の一部で、よどみのように底面がやや深くなった箇所と判断される。土器の集中と平面的に重なっている点が気になるが、土器が置かれた時点でこの深まり（SX08）は完全に埋まっており、直接の関係は無いとみられる。

7. SD39上面 遺物の時期

出土した遺物のうち主要なものはFig. 106以降に実測図を掲載した。掲載しなかったものは小片か甕の体部などの特徴が少ないもので、時期を検討する余地がある資料は掲載したもので網羅している。

以下では遺物の時期について検討を加える。結論として、SD39上層の遺物は出雲4～5期（陶邑TK209型式～飛鳥編年I期にほぼ併行）のものであることを導いている。なお、本項では全体を概観することとして、個々の資料詳細については次項で述べることにする。

古墳時代後期～奈良時代の土師器、特に煮炊具は変化する属性が基本的に乏しく、また生産される体制を反映して地域や遺跡、さらには製作者ごとのばらつきが大きい。こうした理由から、多量に出土している土師器は時期を検討するのに良好な資料とは言えない。結果、やはり端的に時期を示す資料として須恵器を重視することになる。

出雲地域の須恵器について編年をまとめた論考として大谷晃二氏の成果がある⁽¹⁾。大谷氏が扱った具体資料は出雲東部の横穴墓が中心で、出雲西部の集落遺跡である本例とは地域や遺跡の性格の面で異なるが、基本的に当

該期の出雲の須恵器は一極集中して生産されており、基本的に問題なく適用できる。

大谷氏の示した方法は各器種ごとに型式学的検討を加えて器種ごとの変遷（「型式組列」）を明らかにし、その結果と一括資料における供伴関係を組み合わせることで特定時期におけるいわば各器種の型式組成を示す、というものである。以下ではSD39上層出土の須恵器各器種について大谷氏の型式分類にあてはめて検討を加える。

まず時間差による変化を最も端的に反映していると認められる坏蓋についてみる。次項で詳細をのべるように、SD39上層出土の坏蓋は天井部の周辺部に1～2週の浅いケズリを施すものと、ケズリをおこなわずヘラ切りそのままナデで調整するものが中心である。両者は大谷分類の坏蓋A5型とA7型にそれぞれ該当する⁽²⁾。型式組列の設定に天井部調整（ケズリの省略化）を最重視する大谷氏の分類に拠れば、A5型→A6型→A7型と連続的に変化するものと捉えられているが、本例の場合はA5型とした個体のケズリも非常に浅く簡略化しており、しかも天井部調整以外の要素はいずれも新しい様相⁽³⁾を示している。つまり大谷氏が設定したA5型の基準には厳密には当たらないことになる。したがって、大谷氏分類の坏蓋型式としてはA5型～A7型であるが、実際には後出するA7型のバリエーションとみるべきだろう。

次に高坏をみってみる。低脚無蓋高坏Fig. 108-43と44が良好な資料である。43は坏部の沈線が完全に省略されておりA5型、44は一方の透かしが切れ目になり、かつ脚端部が外傾する面をもつ点からA6型に相当する。長脚無蓋高坏は資料の条件が良くないが、Fig. 108-38がA5型またはA6型、40がB2型またはB3型と判断される。

その他の器種は資料数が少ないながら、

(1) 大谷晃二1994「出雲地域の須恵器の編年と地域色」『島根考古学会誌』第11集 島根考古学会

(2) 実際には非常に浅いケズリを最外周のみに施すA6型が含まれる可能性があるが、ナデが丁寧な場合はケズリの痕跡が消えてA7型と判別できない。

(3) 具体的には口縁端部に段が無く単純な形状、肩部に沈線を持たない、という特徴を指す。

Fig. 107-30の提瓶がつまみの形状からB 2型に、31の臛がA 5型以前の型式に位置づけられる。

以上、やや煩雑になったが大谷氏の分類に拠って各器種の型式を検討した。これを一括資料による供伴関係を示した表（前頁註（1）文献第14図）にあてはめると、これらの型式の存続期間が出雲4～5期に限られていることが矛盾無く導かれる。大谷氏の認識する出雲編年4期と5期を画期づけるメルクマールとして、5期における坏蓋天井部のケズリ完全省略化と、新たな器種として平瓶の出現があげられているが、この区分に明確な境界を伴う時間差を認めることは難しそうである。少なくとも本例についてはA 5型とした坏蓋（出雲4期の指標）にも新しい要素があり、強いて時期幅を狭めるならば出雲4期新相～5期といえるだろう。

出雲の地域編年と畿内編年との併行関係は須恵器そのものから言及しにくいだが、古墳に副葬された馬具・装飾大刀を介在して、出雲4期の須恵器がTK209型式の須恵器とほぼ同時期に副葬されているとみれそうである。出雲5期については良好な比較資料に恵まれないが、TK209型式か飛鳥編年の飛鳥I期にほぼ併行すると現時点では考えられる。実年代については検討の余地があり軽々に断じがたいが、従来の年代観に沿えば6世紀末～7世紀第1四半期頃となろう。

本例は集落出土の投棄遺物群であり、一定の使用期間を考慮する必要がある。したがって、使用期間の長短を反映して遺物の中には幾分古い様相を示す資料が含まれる。具体的には坏蓋の肩部に沈線や稜が残るもの、臛の頸部に波状文が残るもの、などである。また、次項で個々にふれるように遺物の中には明らかに時期が下る資料が含まれる。具体的には須恵器蓋坏Fig. 107-16・17・28である。これらはSD39上面から掘り込まれた土坑などの遺構に含まれていたものを区別せずに掘ってしまった結果と考えざるを得ない。

8. SD39上面 遺物の詳細

以下ではFig. 106以降に実測図を掲載した遺物について、詳細を述べる。なお寸法や調整、色調、残存度などの基本的なデータはTab. 17～20の観察表に記しており、本項ではそれ以外の特記すべき点に限ってふれることとする。

1・2は鉄製の大刀である。（実測図Fig. 106、写真Fig. 117・118）出土状況はP. 108で述べている。出土後に保存処理を施した。実測図は処理前、写真は処理後のものである。

1は残存全長109.5cm、切先から関までの刀身残存長が90.6cm、茎の残存長18.9cmである。切先と茎尻の両端部をわずかに欠くほかは完形で出土した。欠損分を復元して推定すると推定全長110.1cmである。刃幅は切先近くで3.9cm、関近くの最大幅で4.5cmあり、幅広のがっしりした大刀である。出土後に樹脂含浸などの保存処理を施しておりあくまで参考値であるが、現在での重量は1,220gある。形状は古墳時代に通有の直線的な直刃で、刃背ともに反りは全くない。切先は先端をわずかに欠くが丸味が強くゆるやかにふくらがつく。背厚は切先付近の最も薄い部分で4.2mm前後、関に向けて直線的に厚くなり、関近くで9.9mmほどと非常に厚い⁽¹⁾。錆のため判然としないが、鎬筋らしいラインが両面にみられる。関は刃側に2段、背側に1段設ける両関で、茎へむけて直線的に続く。茎の目釘孔は2箇所設けられている。目釘は有機質であったらしく、孔内には残存していない。茎の先端形状は不明である。柄・鞘ともに痕跡を含め木質は全く残っていない。そのため出土地点に置かれた時、柄・鞘が装着されていたかどうか不明である。少なくとも鞘口・鞘尻や、鐔、柄頭、^{はばき} 鋸などには金属製の部品があった痕跡は無く、本来鞘・柄が装着されて置かれていたとすれば完全に素木の装具であったことになる。側面形はわずかに反っているが、出土するまでの土中における経年変化だと考えられる。

(1) 数値は錆の厚みを含む現状値である。

2は残存全長89.7cm、切先から関までの刀身残存長が77.7cm、茎の残存長12.0cmである。切先と茎尻の両端部をわずかに欠き、復元推定全長は90.2cmほどである。取り上げ時に茎基部で2つに折れたが、ほぼ完形で出土した。刃幅は切先近くで2.5cm、関近くの最大幅で2.6cmで、刃幅の変化がほとんどなく刃と背が平行する。1の大刀に比べて細身である。あくまで参考値ながら、現在での重量は530gで1の半分以下である。形状は1と同じ直線的な直刃だが、背側にごくわずかな外反する反りがある。切先はゆるやかにふくらがつく。背厚は切先付近で5.1mm前後、関近くで8.2mmほどである。関は刃側に大きく1段、背側には不明瞭ながら小さな段を1段ずつ設ける両関で、茎へむけてわずかに内湾していく。茎の目釘孔は2箇所設けられ、やはり目釘は残存していない。佩表面の刀身関近くに2×3cmの範囲で木質の付着が認められた。木質繊維方向は刃のラインに斜行しており、鞘木が原位置を保って残存したものとは考えられない。同じく刀身佩表面の中間位置にもわずかに木質付着が認めらるが、やはり繊維方向はランダムである。木製容器・箱に大刀が納められていたとも考えられるが、それにしても繊維方向が斜行するのは矛盾が生じ、いずれにしても木質の機能については不明である。1の大刀と同様に鞘口・鞘尻や、鏝、柄頭、鋤などの金属製の装具があった痕跡は全く無い。側面形は蛇行するように大きく反っているが、これも土中における経年変化だと考えられる。

3～17は須恵器坏蓋である。(実測図Fig. 107、写真Fig. 118・119) 3・4・8が遺存状態が良く、他は口縁を中心とした破片である。坏蓋の型式変化を端的に示すと考えられる天井部のケズリの範囲に着目すると、①中心部のへら切り痕を残してその周辺を2～3

周削り、さらに中心部を重点的にナデを施すもの⁽¹⁾(3・4・7・8)と、②ケズリが無く、へら切り後の中心部をナデ調整によってならすもの(6・9・11)⁽²⁾とに分かれる。両者ともに共通する特徴として、口縁形状がまるく端部内面に沈線・段など設けない単純なタイプであることと、肩部に沈線・稜をもたない点があげられる。口径は残りの良い3が12.6cm、4が12.8cm、8が12.3cmである。肩部の沈線がすでに省略されている点で若干型式差があるものの、大谷晃二氏の型式分類⁽³⁾にあてはめれば①がA5型、②がA7型に概ね該当する。両者の時期についてはP. 112に記した。これらと比べて古い要素を残すものがその他にいくつか認められる。まず口縁端部内面に着目すると、ナデによって段状に仕上げた5と、端部から少し上がったところに細い沈線を施す10・14が古相の特徴を備えるものである。さらに肩部についてみると、沈線とナデで稜を作り出している14・15、また稜は表現していないが、2条の沈線を施した5が古相の特徴をもつ。いずれも天井部が残っていないため断言できないが、上記の5・10・14・15の製作時期は他のものに比べてわずかに古い可能性がある。しかしその隔たりはわずかなもので、使用期間の長短を加味すれば一括投棄による供伴資料として扱って問題はない。ところが、16・17は低い宝珠形のつまみをもつ坏蓋で、明らかに時期の下るものである。こうした新しい時期の遺物はSD39上面から出土した全遺物のなかでこの2点と坏身28だけである。落ち込みや土坑など遺構が確認できなかったため一括して図示したが、実際にはSD39の上面から掘り込まれた後世の遺構に伴うものであると考えられる。

18～28は須恵器坏身である。(実測図Fig. 107、写真Fig. 119・120) 底部が残るのは18・

(1) 大谷晃二氏の分類による天井部調整Ⅱb類に相当する。(大谷晃二1994「出雲地域の須恵器の編年と地域色」『島根考古学会誌』第11集 島根考古学会)

(2) 前掲註(2)の天井部調整Ⅲa類に相当。

(3) 前頁脚注(2)文献と同じ。

19・23・24で、23のみ中心部から丁寧なケズリがある以外は、いずれも中心部にヘラ切り痕を残し粗くナデを施す。破片が大きく信頼度が高い個体に限定すると、口縁径は18が14.8cm、19が13.6cmであった。図示したほかに完形の坏身が1点あったが、出土してから取り上げをおこなうまでの間に現地で盗難に遭い紛失してしまった。28は高台付きの小型の坏身で、坏蓋16・17と同様に時期が下るものである。後世の遺構による混入と判断される。

29～34と37は種々の器種の須恵器である。33は提瓶口縁の可能性がある。須恵器の器種組成は蓋坏、甕、高坏が中心であり、それ以外の器種は非常に少ない。掲載したものについても、いずれも破片で遺存状態が悪い。図示したほかに完形の短頸壺1点があったが、出土してから取り上げるまでの間に盗難に遭い紛失してしまった。

35・36は須恵器甕である。（実測図Fig. 108、写真Fig. 120）甕の破片は総量で26,600gあり、SD39の東側に比較的多くまとまって出土した。図化できる程度まで復元できたのは35のみである。接合復元できたのは1個体の50%ほどだが、この他にも同一個体の可能性がある破片が周辺から出土しており、完形か、もしくはごく一部を欠いた甕を出土地点近くに持ちこんだものと考えられる。

38～45は須恵器高坏である。（実測図Fig. 108、写真Fig. 121・122）バリエーションに富み、個体差が大きい。有蓋高坏は42のみである。段の区別はなく1段で、2方に透かしを持つ。図示した面は方形透かしだが、反対面は三角形透かしである。低脚無蓋高坏は43と44で、不確実ながら39と45も該当するとみられる。39・43・45はいずれも2方方形透かし、44は一方が三角透かし、他方が切れ目である。残る38・40・41は長脚無蓋高坏とみられる。いずれも3方に透かしをもつ。38は坏部底面が平坦で側面が直立し、脚の短小化が進んだものである。上段の透かしは切れ目、下段はしっかりした方形で、両者間の沈線は省略されている。40は透かしの傾きから三角形透かしとして図示したが、実際には透かし

の片側しか残っていないため、方形透かしの可能性も残る。41は脚上部が細くしぼられているため、長脚と判断した。蓋の有無は実際には不明である。幅の細い方形透かしを3方に配している。

46～59は土師器高坏である。（実測図Fig. 109、写真Fig. 122～125）図示した以外にも大型の赤彩高坏が1点あったが（Fig. 103）、盗難に遭って紛失した。46～55は外面に赤色塗彩が施される。坏部の残りは悪いが、稜をつくらずゆるやかに内湾する器形である。口縁は大きく開いて立ち上がりは低い。調整は脚外面にハケ目の有無などの差異があるものの、基本的に脚内面がケズリと指ナデ、外面がナデとハケ目で共通し、ナデによって生じた稜を残すなど総じて粗雑である。成形方法は一様でなく、図示した10点のなかでも、坏部と脚の接合方法と脚の成形方法にいくつかのバリエーションが見て取れそうである。具体的に以下に示す。まず①坏部の基部に軸棒状の突起をつくりだし、これに脚部をまきつけるようにして成形するもの、である。Fig. 109-49・53が確実な例で、その他の47・52・54が該当する可能性がある。まきつけた脚部が接合面で剥離しやすいため、坏部から延びる軸棒が外観からも観察される（写真Fig. 123、124）。接合部の厚み（坏部内面底から脚部内面頂部までの距離）は軸棒の長さによって決まり、比較的薄い。脚部内面頂部には平坦な面があり、指押さえで調整される。脚の厚みが比較的均一で、上下の厚みの差が小さい点も特徴である。次に②太い円柱を接合して脚とするもの、である。Fig. 109-48が該当する。脚部のプロポーシオンは直線的で、脚端部で急に外へ開く。内面のケズリは浅く、したがって接合部の厚みは非常に厚い。③それ以外のものは接合方法ははっきりしないが、脚の厚みが上部が厚く下部が薄い点、脚内面のケズリが断面山形に頂部が尖る点などが特徴である。

以上のような接合方法と脚の成形方法の違いは、時間差を示すのか、系統差を示すのか現段階では不明としか言えない。当該期の土師器高坏は横穴墓副葬品としては一般的でな

く、これまで研究対象とならなかった。今後集落遺跡などで良好な一括資料が得られれば、編年や生産体制を考える手がかりになることが予察される。

なお56は脚部に稜をもつ高坏で、当遺跡の既往の調査でもA区・C区などから出土している。「脚部有段高坏」との名称が与えられている⁽¹⁾もので、赤色塗彩される高坏とは別系統として同時期に存在するものである。

60は手捏ね土器、61～63は土玉である。(実測図Fig. 109、写真Fig. 125) P. 108で述べたように、大刀付近の土器集中部から出土した。(出土状況Fig. 103、写真Fig. 104-2) 図示した以外にも手捏ね土器が1点と土玉が2点あったが、出土してから取り上げるまでの間に盗難に遭い紛失してしまった。60の手捏ね土器は粘土板を指頭で押さえて丸く成形したもので、表面には指頭痕やナデの痕跡がはっきりと残される。口縁端部は一部を欠くが、仕上げが雑で大きく波打っている。表面は風化・手擦れが全く無く、繰り返し使用されたような形跡は認められない。61～63の土玉は漁網に用いる実用的な土錘である可能性もあるが、出土状況が特殊で祭祀の様相が極めて強いことと、外観観察で使用痕が全く観察されないことから、玉として使用された土玉と考えた。使用痕とは、漁網に装着した際に生じる穿孔部外側の紐擦れや、土玉同士や漁網との摩擦による表面の摩耗などを指す。いずれも軸棒に粘土塊を巻き付けて成形される。軸棒を抜いた時に生じるカエリは残っている。外面調整は非常に丁寧で、ナデの繰り返しによってミガキのような光沢を生じている。手捏ね土器と同様に使用による表面の風化や摩耗は認められない。出土位置をFig. 103に示したように、5点の土玉は最大で250cm離れた範囲内に散らばった状態で出土した。一連に繋がれていたものが土中で移動したとは考えられず、意図的にばらばらに散布して置かれたものと考えられる。

64～96は土師器の甕である。(実測図Fig.

110～112、写真Fig. 126～128) 図示したのは33個体分であるが、土師器の甕はSD39上面出土遺物の中で最も多く、総重量35kgを超える。単純口縁である点や外面ハケ目で内面粗いケズリといった調整方法などの基本的要素に共通点が多いが、口縁形状や法量などに様々なバリエーションがある。須恵器に型式差が少ないことから比較的短期間の一括遺物のはずだが、それでもこれだけの個体差が存在していて限られた資料で時期差の有無などを把握することは到底無理な試みである。以下では掲載資料について各属性からみた大まかな分類を示し、予察としたい。まず①法量についてみると、大・中・小の3つにまとまりがありそうである。大は口縁端部の直径が25cmを超えるもので、頸部の最もくびれた部分の内径が20cm～25cm、中は口縁径20cm前後にまとまりがあり、頸部内径は15cm前後、最も資料数が多い。小は口縁径15cm前後のものである。この法量の格差は、用途の別などを製作者が意識して作り分けた結果と考えられる。次に②体部のプロポーションについてみる。基本的に2種あり、球形に胴が丸く張るものと、肩を張らずになだらかなカーブをもつものである。この差異はそのまま頸部の屈折の度合いに反映し、球形に胴が張るものは必然内面のケズリ境界がシャープな稜をなす。本例の資料は胴部下半を欠くものが多く、これ以上の分析はできない。なお一部に頸部から外傾してそのまますぼまるもの(Fig. 112-89など)があるが、これらは甕の可能性はある。上記の属性以外には、③ハケ目原体の細かさや、④胎土の精製度、⑤口縁内面の調整方法の違い(ナデのみ、横方向のハケ目、段をなすナデ)⑥焼成の良否を含む色調などの面でも差異が大きい。これは用途や時間差を反映するかどうか疑問である。作り手のクセや熟練度の影響がむしろ大きいと考えられ、有効な分類ではないだろう。また残存状態が良ければ煤の付着範囲から用途・使用方法を推し量る方法も有効かもしれないが、本例で

(1) 島根県教育委員会1999『古志本郷遺跡I』P. 303

は状態が悪くできなかつた。

97～100は土師器甕である。（実測図Fig. 113、写真Fig. 129）97は残存状態が比較的良い。側面最下部に2箇所穿孔がある。把手はつかない。外面に煤が付着するが、最下部から9cmの高さまでには煤がついていない。使用時に甕にはまっていた範囲を示すとみられる。100は牛角状の把手が2方につく甕で、頸部外面には押さえ調整の板状工具の角による圧痕が残る。

101～110は移動式竈の破片である。（実測図Fig. 113、写真Fig. 129～131）竈の破片は総重量12,220gと多量に出土している。出土位置はSD39全体に分布しているが、全面にまばらに点在するというよりはある程度のまとまりをもち、破片が集中する箇所がみられる。ちなみに土製支脚と近接して出土した個体は無い。移動式竈はいずれも破片になっており、実測図を掲載したのは底部分や焚口、基底部などを含む特徴的な破片だけである。調整は外面に縦方向のハケ目、内面に幅広でストロークが長く深いケズリを施す。深いケズリを施すものの器壁は全体にかなり厚く、基底部付近は自重で潰れて一層厚ぼったくなっている。Fig. 113～103、110のように接地面に植物繊維を編んだ葦簾状の圧痕を残すものがある。残存状態が悪く、被熱範囲や煤の付着範囲については言及できない。

111～120は土製支脚である。（実測図Fig. 115、写真Fig. 131～133）土製支脚は図示した10点がほぼ全てである。突起の数が分かる個体は6点あり、いずれも2股の突起で支持するタイプである。また背面の穿孔は有無が判別できる個体が5点あり、穿孔のないものが1個体（Fig. 115～116）、穿孔があり貫通しないものが3点（111、112、120）、穿孔があり前面まで貫通するものが1点（117）であった。煤の付着や被熱による変色などの、使用による痕跡はほとんどの個体に全く認められないが、唯一120のみは背面が黒色を呈している。割れ口の観察から、背面の黒色は焼成時の火廻りに由来する焼成不良の黒斑と判断される。前面だけが使用による二次焼成を受けて脱炭されたか、あるいはもともと焼成

が良く黒斑が無かった可能性もある。なお、土製支脚の出土位置についてみると、大刀が出土したSD39北西寄りを初め、遺物が集中する範囲にまとまって出土している。移動式竈とは出土位置において関連性は認められず、どちらかという排他的な在り方をしているようである。

以上がSD39上層から出土した一括性の高い遺物群である。以下は時期と出土状況が異なるもので、上記の遺物とは区別して扱うべき物である。

121～127はSD39上面から出土しているが、他の遺物より時期的に古く、周辺から混入したと判断される遺物である。（実測図Fig. 116、写真Fig. 133）121と122は弥生土器で、弥生前期の甕口縁部である。また123は弥生土器の壺・甕の底部である。G2区周辺には弥生時代の遺構は少ないが、わずかにSD29が前期の遺物を含む溝である。124～126は古墳時代前期の古式土師器である。周辺にはこの時代の遺物を多量に含むSD41があり、この埋土中であつたものが混入した可能性が考えられる。127はこれらと比較して複合口縁の退化形態や、厚みをもった口縁端部などからやや新しいもので、古墳時代中期に位置づけられる大東式のものである。

128～141はSD39の下層から出土したものである。（実測図Fig. 116、写真Fig. 134）本節3項で述べたように、SD39の埋土中層以下では遺物が非常に少ない。128のように弥生時代後期のものが最も古く、古墳時代前期のものも含まれるが、これらはいずれも混入と判断され、溝が埋まった時期は最も新相の須恵器が示している。蓋坏でみると坏身Fig. 116～139はヘラ切りのみでケズリが無い、坏蓋138は口縁端部内面の段・沈線が無い、などの特徴をもつ。これらはSD39の上面から出土したものと基本的に同時期のものである（本節7項「SD39上面 遺物の時期」P. 112参照）。したがって、SD39は比較的短時間、具体的には須恵器1型式分の時間内で堆積が進み、埋まりきつたものということになる。

以上がSD39から出土した遺物の詳細である。

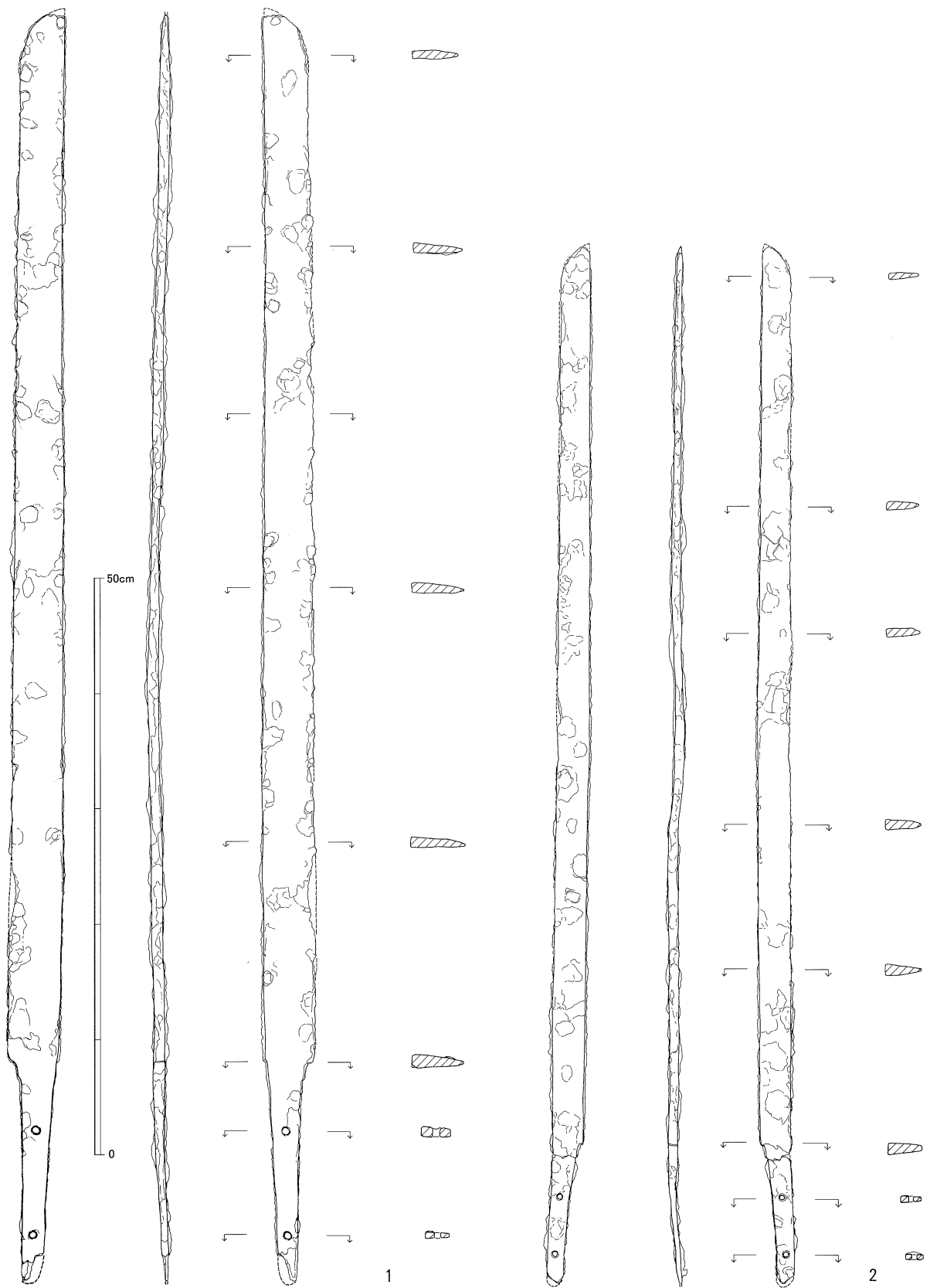


Fig.106 SD39上面 遺物実測図① (S=1/5)

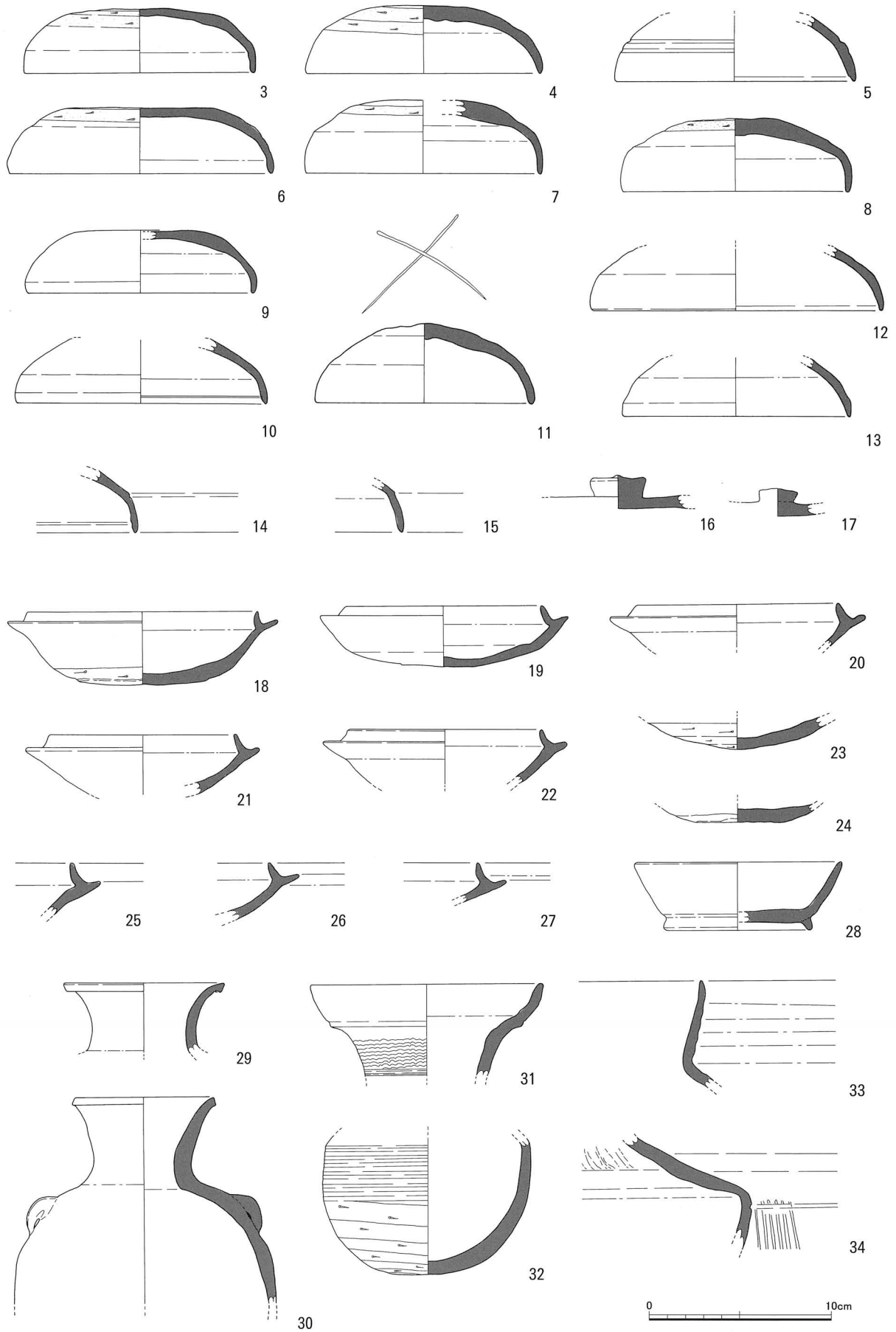


Fig.107 SD39上面 遺物実測図② (S = 1/3)

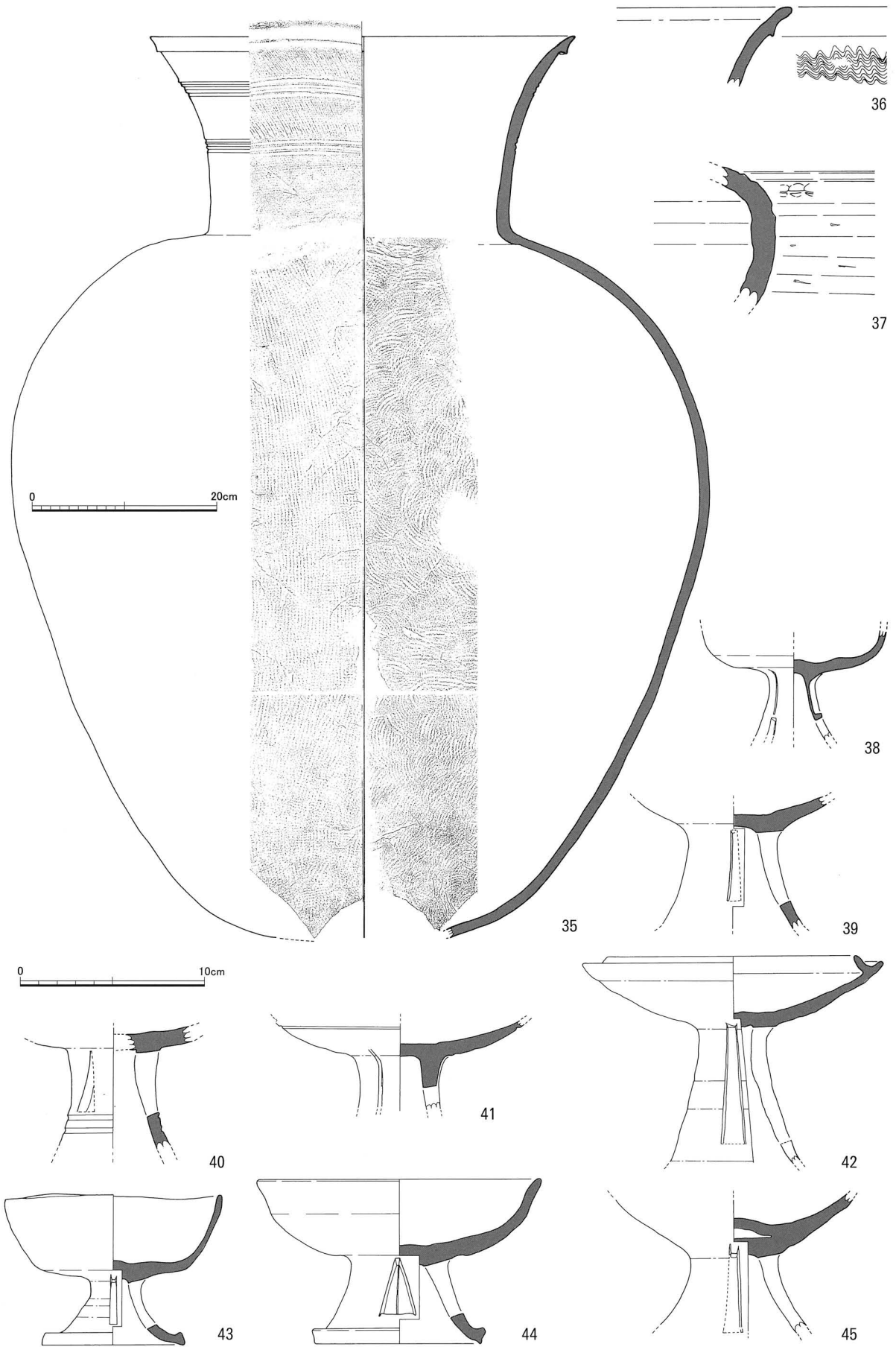


Fig.108 SD39上面 遺物実測図③ (S = 1/6、1/3)

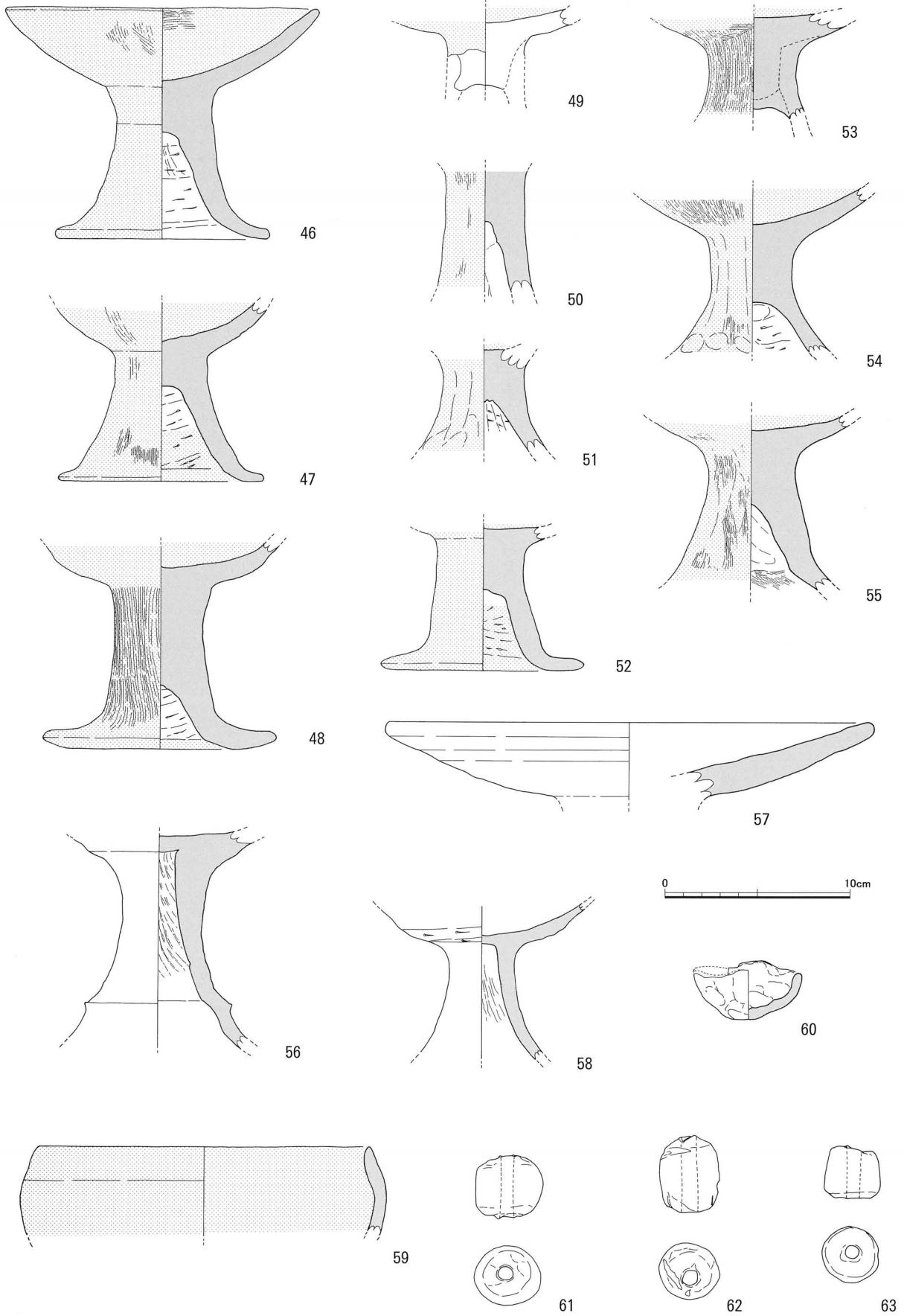


Fig.109 SD39上面 遺物実測図④ (S=1/3)

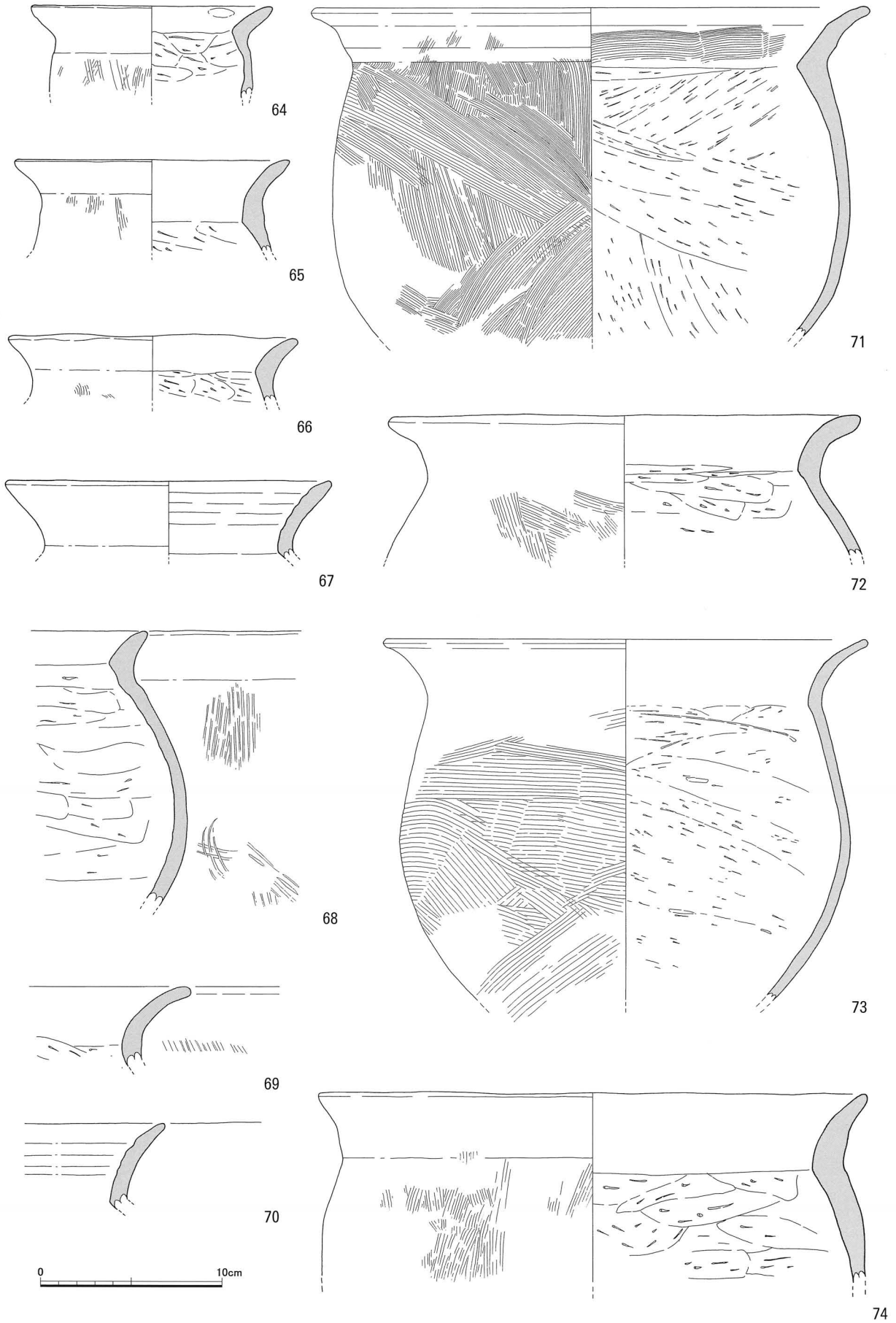


Fig.110 SD39上面 遺物実測図⑤ (S=1/3)

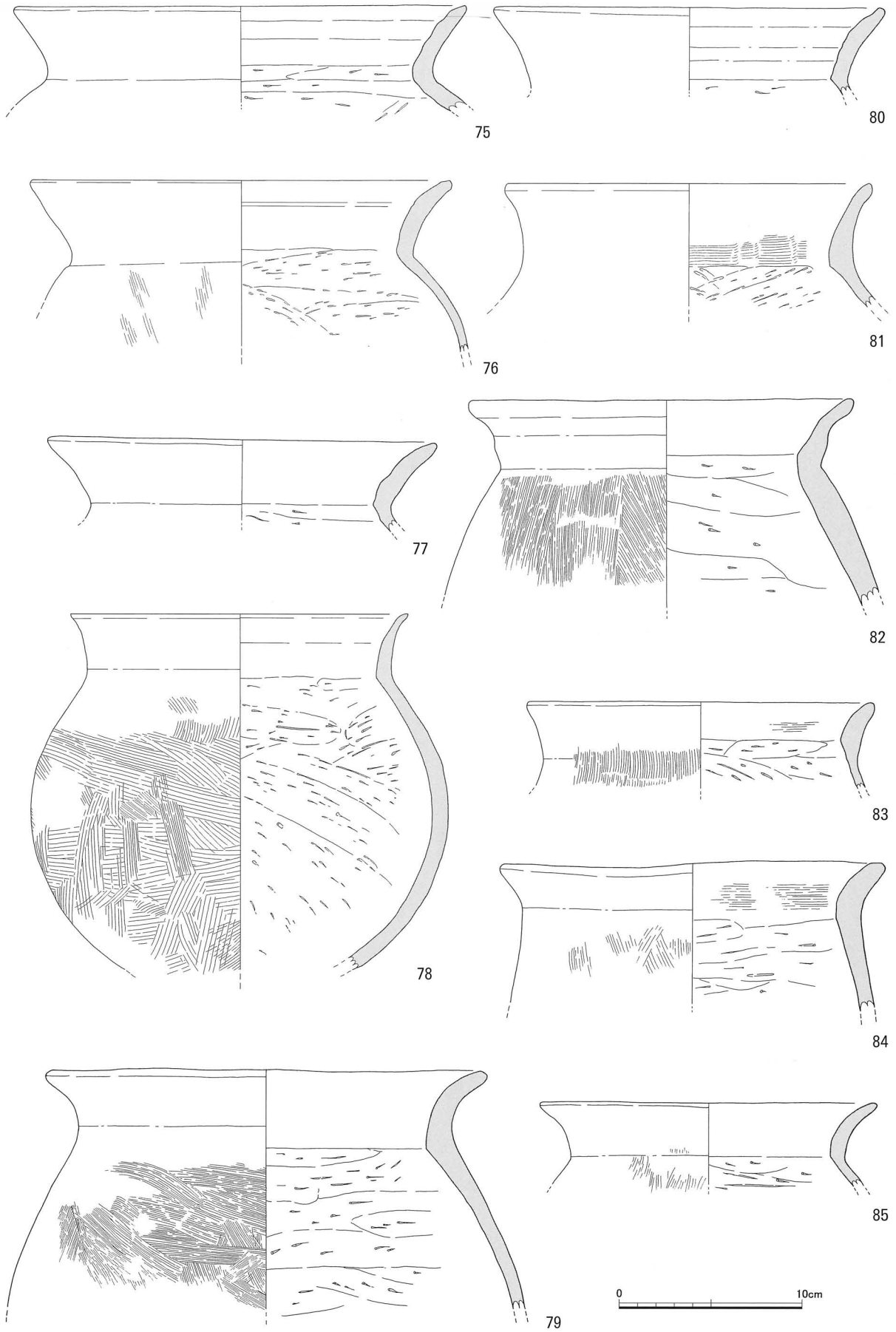


Fig.111 SD39上面 遺物実測図⑥ (S=1/3)

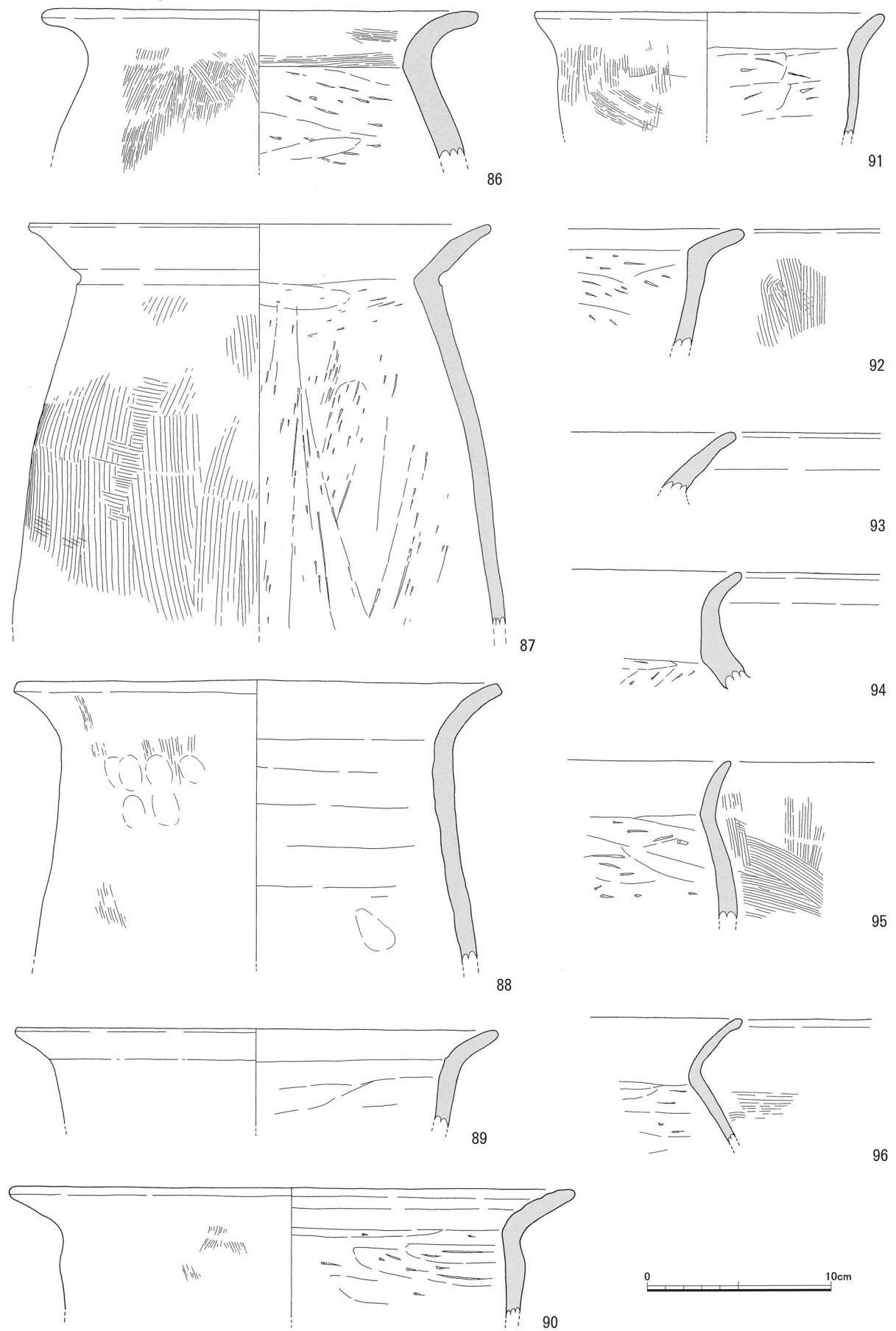


Fig.112 SD39上面 遺物実測図⑦ (S=1/3)

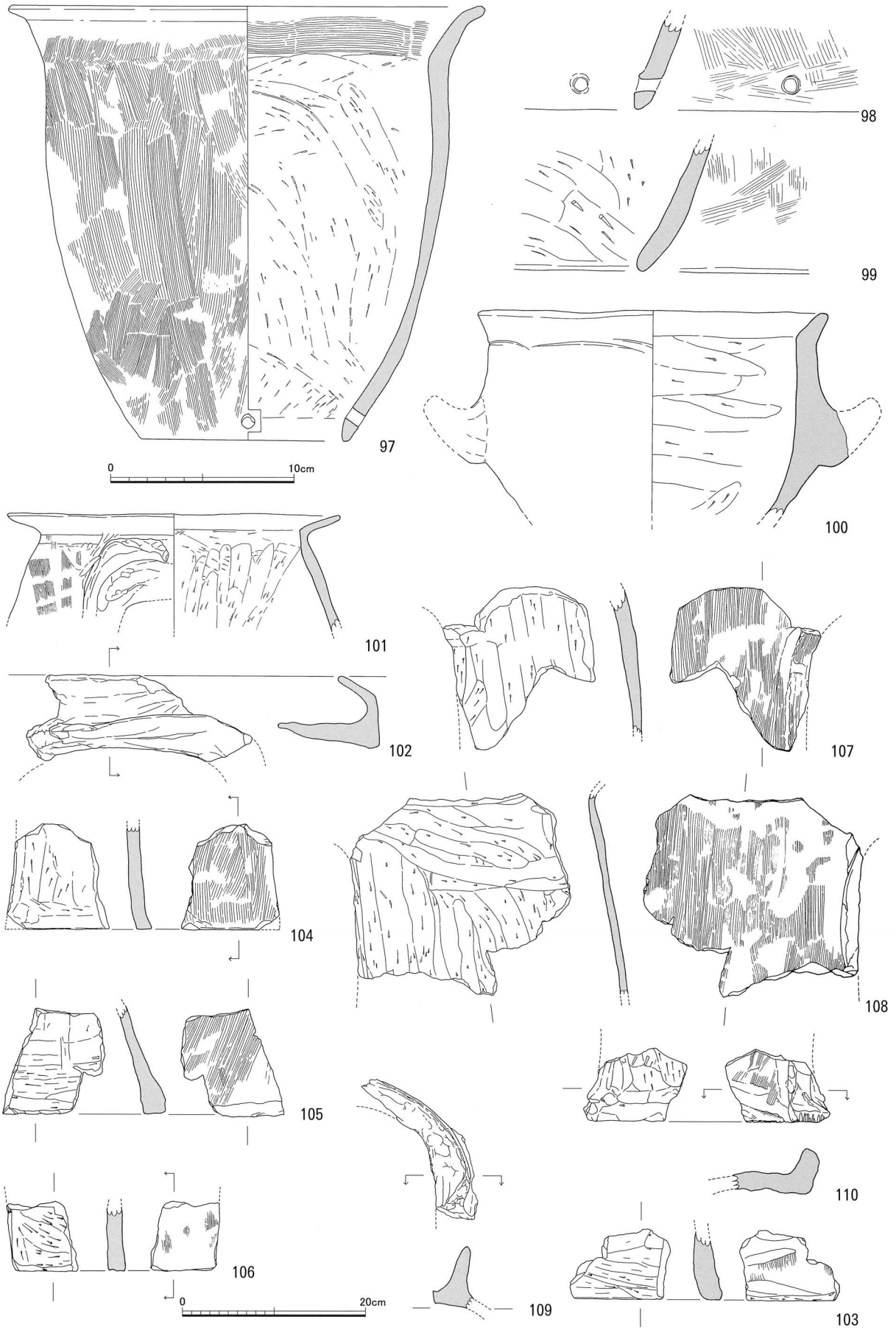


Fig.113 SD39上面 遺物実測図⑧ (S=1/3、1/6)

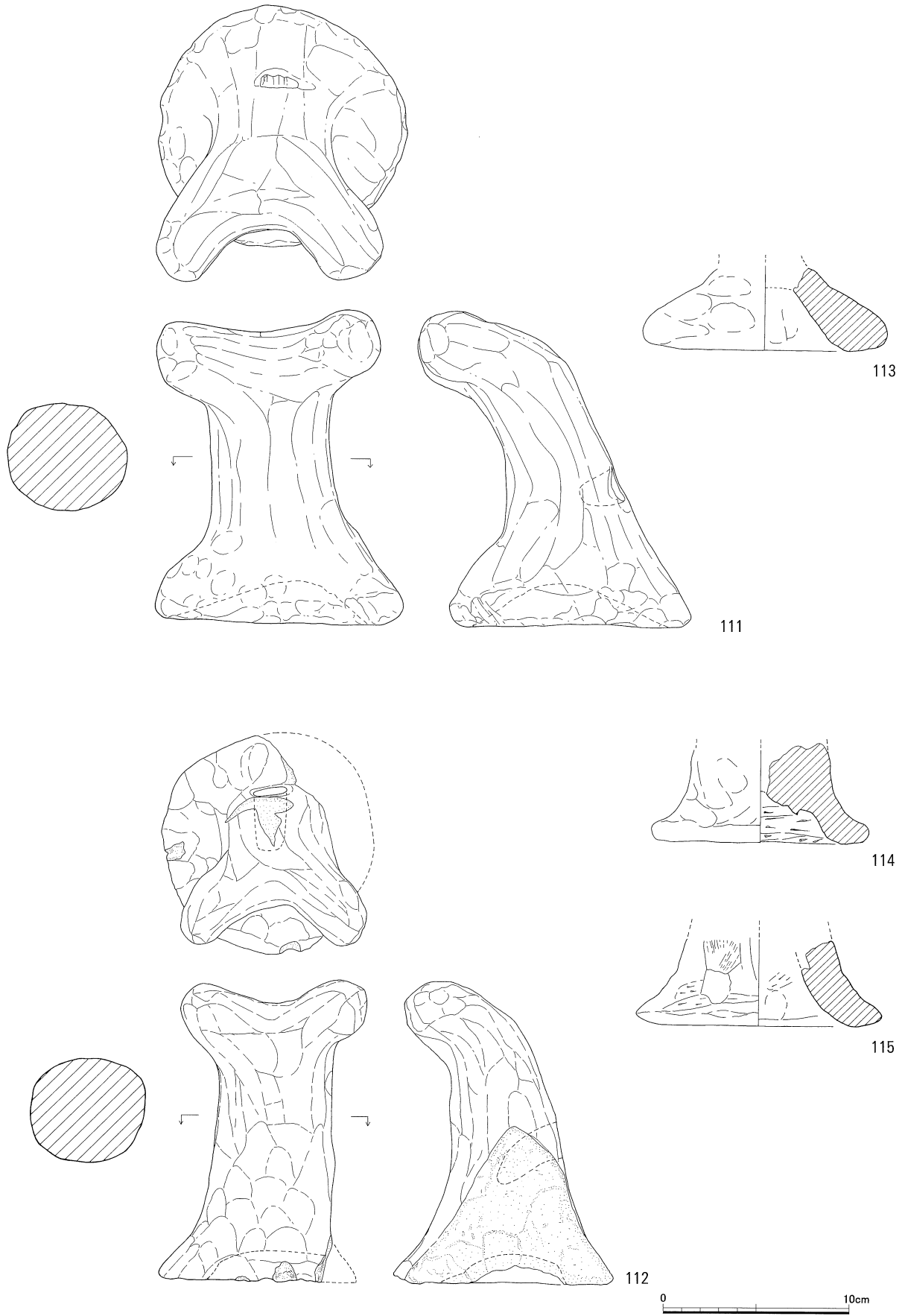


Fig.114 SD39上面 遺物実測図⑨ (S=1/3)

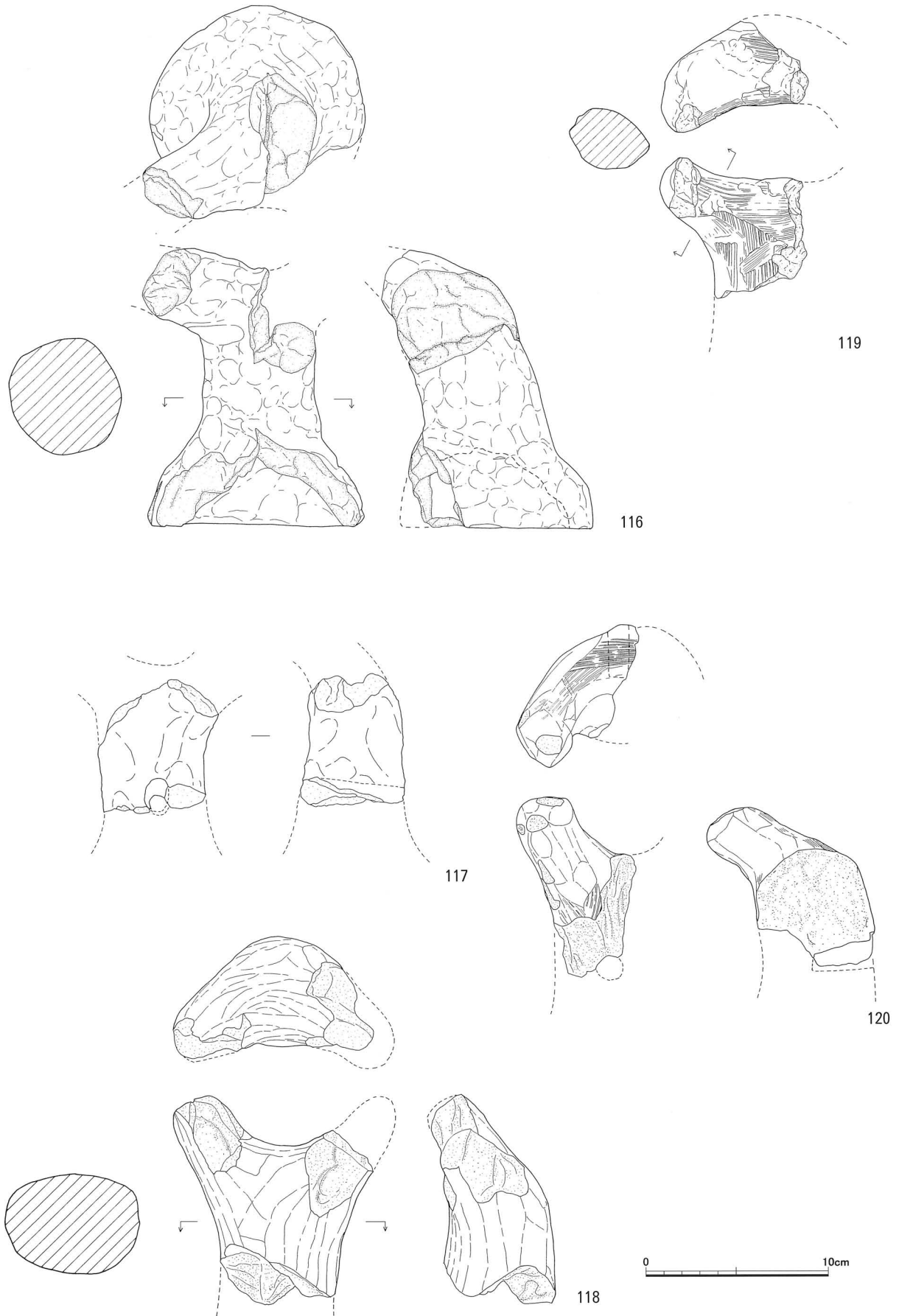


Fig.115 SD39上面 遺物実測図⑩ (S=1/3)

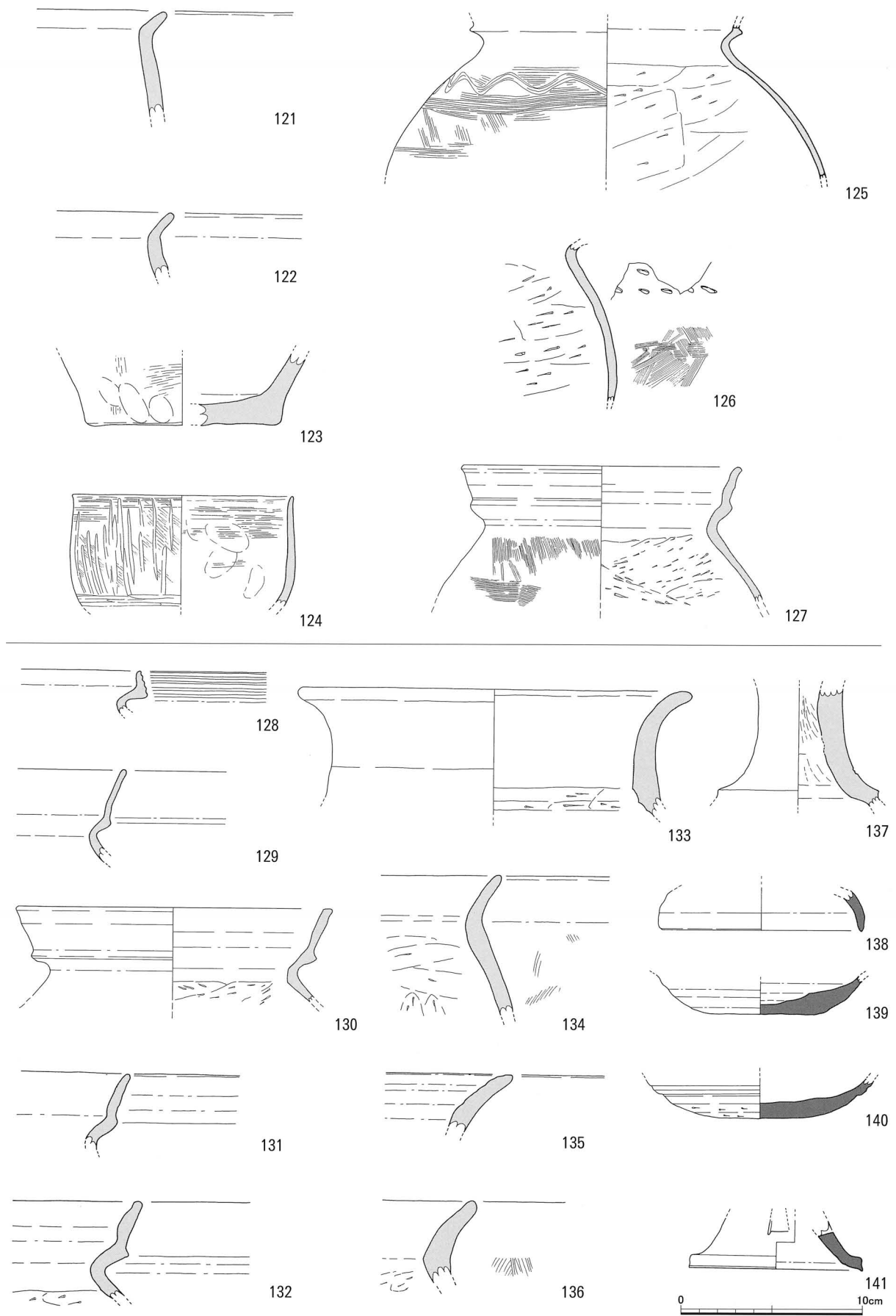


Fig.116 SD39上面 遺物実測図⑪ (S=1/3) (混入遺物121~127、下層出土128~141)

Tab. 17 SD39出土遺物観察表①

(SD39上面出土)		器種	法量 (cm)			色調	調整 (内面/外面/特記事項)	残存度
番号	種別		口径	器高	底径			
1	鉄製品	大刀	詳細は本文中P. 113に記載					
2	鉄製品	大刀	詳細は本文中P. 113に記載					
3	須恵器	坏蓋	12.6	3.5	-	内外面：青灰色 内面：口縁部回転ナデ、天井部不定方向のナデ・指押さえ/外面：口縁部回転ナデ、天井部へら切りの後ナデ周、辺部回転ヘラケズリ周辺部2周	全体の70%	
4	須恵器	坏蓋	12.8	-	-	内面：灰色 外面：青灰色 内面：回転ナデ、天井部指押さえ/外面：天井部へら切り・ナデ、周辺部回転ヘラケズリ粗く2周	全体の70%	
5	須恵器	坏蓋	13.0	-	-	内外面：灰色 内外面：回転ナデ/肩部に2条の沈線、口縁内面に段状の沈線	口縁部のみ、全周の10%	
6	須恵器	坏蓋	14.4	3.6	-	内外面：暗灰色 内面：口縁部回転ナデ、天井部不定方向のナデ/外面：口縁部回転ナデ、天井部へら切りの後粗いナデ、最外周回転ヘラケズリ	全体の15%	
7	須恵器	坏蓋	12.8	-	-	内外面：灰色 内面：回転ナデ、天井部ナデ/外面：回転ナデ、天井部へら切りの後ナデ、周辺部回転ヘラケズリの後回転ナデ	全体の25%	
8	須恵器	坏蓋	12.3	4.0	-	内外面：青灰色 内面：回転ナデ、天井部不定方向のナデ・指押さえ/外面：肩部以下回転ナデ、天井部へら切りの後ナデ、最外周ヘラケズリ	全体の80%	
9	須恵器	坏蓋	13.3	-	-	内外面：暗青灰色 内面：回転ナデ/外面：回転ナデ、天井部へら切りの後ナデ	全体の30%	
10	須恵器	坏蓋	13.6	-	-	内外面：青灰色 内外面：回転ナデ	口縁部のみ、全周の20%	
11	須恵器	坏蓋	10.8	4.3	-	内外面：暗灰色 内面：口縁部回転ナデ、天井部指押さえ/外面：口縁部回転ナデ、天井部へら切りの後回転ナデ/天井部へら記号「X」	全体の60%	
12	須恵器	坏蓋	15.8	-	-	内外面：灰色 内外面：回転ナデ	口縁部のみ、全周の15%	
13	須恵器	坏蓋	11.5	-	-	内外面：暗灰色 内面：回転ナデ/外面：回転ナデ、天井部へら切り後ナデ	口縁部のみ、全周の20%	
14	須恵器	坏蓋	-	-	-	内外面：灰色 内外面：回転ナデ	口縁部から天井部にかけて、全周の10%以下	
15	須恵器	坏蓋	12.4	-	-	内外面：灰色 内外面：回転ナデ	口縁部のみ、全周の10%	
16	須恵器	坏蓋	-	-	-	内外面：灰色 内外面：ナデ	つまみのみ	
17	須恵器	坏蓋	-	-	-	内面：褐灰色 外面：灰色 内外面：ナデ/外面に自然釉	つまみのみ	
18	須恵器	坏身	14.8	-	-	内面：暗灰色 外面：灰白色 内面：口縁部回転ナデ、底部不定方向のナデ/外面：口縁部回転ナデ、天井部へら切りの後粗いナデ、最外周のみ回転ヘラケズリ	全体の25%	
19	須恵器	坏身	13.6	3.3	-	内外面：暗青灰色 内面：回転ナデ/外面：口縁部回転ナデ、底部へら切りの後ナデ	ほぼ完形	
20	須恵器	坏身	14.0	-	-	内外面：灰色 内外面：回転ナデ	口縁部のみ、全周の15%	
21	須恵器	坏身	12.8	-	-	内外面：灰色 内外面：回転ナデ	口縁部のみ、全周の15%	
22	須恵器	坏身	13.4	-	-	内外面：灰色 内外面：回転ナデ	口縁部のみ、全周の20%	
23	須恵器	坏身	-	-	-	内外面：灰色 内面：回転ナデ/外面：回転ヘラケズリ	底部のみ、全体の20%	
24	須恵器	坏身	-	-	-	内外面：灰色 内面：回転ナデの後指押さえ/外面：へら切りの後未調整	底部のみ、全体の20%	
25	須恵器	坏身	(15.2)	-	-	内外面：灰色 内外面：回転ナデ	口縁部のみ10%	
26	須恵器	坏身	(17.0)	-	-	内外面：灰色 内外面：回転ナデ	口縁部のみ、全周の10%	
27	須恵器	坏身	(13.2)	-	-	内外面：灰白色 内外面：回転ナデ	口縁部のみ、全周の10%	
28	須恵器	坏身	11.4	4.1	8.0	内外面：暗灰色 内面：口縁部回転ナデ、底部不定方向のナデ/外面：口縁部回転ナデ、高台内回転ナデ	全体の25%	
29	須恵器	提瓶か	8.8	-	-	内外面：暗灰色 内外面：回転ナデ	口縁部のみ、全周の20%	
30	須恵器	提瓶	7.6	-	-	内外面：暗青灰色、頸部以上青黒色 内外面：回転ナデ/肩部につまみ/体部大半を欠損	上半部の30%	
31	須恵器	罎	12.8	-	-	内外面：青灰色 内面：回転ナデ/外面回転ナデ/口縁部に1条の沈線/頸部に8条の波状文	口縁部のみ15%	
32	須恵器	壺類	-	-	-	内外面：灰色 内面：回転ナデ、底部ナデ/外面：下半部回転ヘラケズリの後上半部12条のカキメ、肩部回転ナデ	下半部の50%	
33	須恵器	直口壺	-	-	-	内外面：オリーフ灰色 内面：回転ナデ/外面：回転ナデによる凹凸	口縁部から頸部にかけて、全周の10%以下	
34	須恵器	壺類	-	-	-	内面：灰色 外面：オリーフ灰 内面：回転ナデ/外面：頸部~肩部回転ナデ、以下縦方向にへら状工具による刺突文の後1条の沈線を描き、回転ナデ	体部のみ、全体の10%以下	
35	須恵器	甕	46.0	残存高97.3	胴最大径75.3	内面：灰色 外面：暗灰色 内面：体部円形のタタキ当て具痕、口縁部回転ナデ/外面：口縁部外面に3条ずつ2ヶ所の沈線。その間波状文。頸部回転ナデ、体部格子目タタキ		
36	須恵器	甕	(43.2)	-	-	内外面：灰色 外面：暗灰色 内外面：回転ナデ/外面：10条の波状文	口縁部のみ、全周の10%以下	
37	須恵器	壺類	-	-	-	内外面：暗灰色 内面：回転ナデ/外面：肩部回転ナデ、胴部回転ヘラケズリ、沈線間に爪印し施文	肩部から胴部にかけて、全体の10%以下	
38	須恵器	高坏(長脚)	-	-	-	内外面：暗青灰色 坏部内面：回転ナデ、ナデ/脚部内面：内面回転ナデ/外面：回転ナデ/3方2段透かし、上段は切り込み、下段は方形	全体の30%	
39	須恵器	高坏(低脚)	-	-	-	内外面：灰色 坏部内面：不定方向のナデ/脚部内面：回転ナデ/外面：回転ナデ/2方透かし、方形か	全体の20%	
40	須恵器	高坏(長脚)	-	-	-	内外面：灰色 内面：坏部ナデ、脚部回転ナデ/外面：回転ナデ/3方三角透かし	脚部の30%	
41	須恵器	高坏	-	-	-	内外面：灰色 内面：不定方向のナデ/外面回転ナデ/3方切り込み透かし	坏部の30%	
42	須恵器	高坏(長脚1段)	16.3	-	-	内外面：灰白色 外面：灰色 内面：坏部口縁部回転ナデ、坏部下半不定方向のナデ、脚部回転ナデ/外面回転ナデ/2方方形透かし	全体の60%	
43	須恵器	高坏(低脚)	-	-	-	内外面：灰色 内外面：回転ナデ/幅細の2方方形透かし、坏部は焼成時の変形著しい	全体の70%	
44	須恵器	高坏(低脚)	15.4	8.8	9.1	内外面：青灰色 坏部内面：回転ナデ、不定方向のナデ/坏部外面：口縁部ヨコナデ、下半へら切りの後ナデ/脚部内外面：回転ナデ/2方透かし(三角透かしと切れ目)	全体の60%	
45	須恵器	高坏(低脚)	-	-	-	内外面：暗青灰色 内面：坏部不定方向のナデ、回転ナデ、脚部回転ナデ/外面：回転ナデ/2方方形透かし、坏部気泡で膨らむ	全体の20%	
46	土師器	高坏	16.6	12.4	11.2	内外面：赤色塗彩胎土、浅黄褐色 坏部内外面・脚部外面：赤色塗彩胎土、浅黄褐色 内面：坏部口縁部ヨコハケ、以下ナデ、脚部ヘラケズリ、脚部ナデ/外面：坏部不定方向のハケ、脚部ナデ/脚内面にシボリ痕	全体の70%	

Tab. 18 SD39出土遺物観察表②

番号	種別	器種	法量 (cm)			色調	調整 (内面/外面/特記事項)	残存度
			口径	器高	底径			
47	土師器	高坏	-	-	11.0	内外面: 赤色塗彩胎土: 灰黄褐色	内面: 坏部不定方向のナデ、脚部ヘラケズリの後ナデ、脚端部ナデ/外面: 坏部~脚部上部ナデ、脚部下部タテハケの後ナデ/坏部内面が薄く剥離	全体の60%
48	土師器	高坏	-	-	12.6	内外面: 赤色塗彩胎土: 灰白色	内面: 坏部不定方向のナデ、脚部ヘラケズリ、脚端部ナデ/外面: 坏部ナデ、脚部タテハケ	全体の50%
49	土師器	高坏	-	-	-	内外面: 赤色塗彩胎土: 灰黄褐色	内外面: ナデ/脚は接合面で剥離	坏部と脚部の接合部、全体の10%
50	土師器	高坏	-	-	-	内外面: 赤色塗彩胎土: 灰黄褐色	内面: 縦方向の強い指ナデ/外面: タテハケ後丁寧なナデ/内面に接合時の軸痕跡	脚部のみ、全体の20%
51	土師器	高坏	-	-	-	内外面: 赤色塗彩胎土: にぶい橙色	内面: ヘラケズリ/外面: 縦方向の強いナデ	脚部のみ、全体の20%
52	土師器	高坏	-	-	10.0	内外面: 赤色塗彩胎土: 灰黄褐色	内面: 脚部横方向のラケズリ、端部ナデ/脚部ヨコナデ/坏部内面薄く剥離	全体の50%
53	土師器	高坏	-	-	-	外面・坏部内面: 赤色塗彩胎土: にぶい褐色	坏部内面: 不定方向の丁寧なナデ/坏部外面: 不定方向のハケメ/脚部外面: タテハケ/脚部内面: 粘土充填し指押さえ/坏部の軸に脚部を巻き付けて接合	全体の10%
54	土師器	高坏	-	-	-	坏部内外面・脚部外面: 赤色塗彩胎土: 浅黄褐色	内面: 坏部不定方向のナデ、脚部ヘラケズリの後ナデ・指押さえ/外面: 坏部タテハケの後ナデ、脚部ナデ	全体の60%
55	土師器	高坏	-	-	-	坏部内外面・脚部外面: 赤色塗彩胎土: 灰黄褐色	内面: 坏部不定方向のナデ、脚部ヘラケズリ、端部不定方向のハケの後ナデ	
56	土師器	高坏	-	-	-	内外面: 黄褐色	内面: 坏部不定方向のナデ、脚部上半部ナデ、下半部ヨコナデ/外面: ヨコナデ	全体の40%
57	土師器	高坏	26.0	-	-	内面: にぶい橙色 外面: 黄褐色	内面: ナデ/外面: 回転ナデ	坏部の20%
58	土師器	高坏	-	-	-	脚部内面: 灰黄褐色	内面: 坏部回転ナデ、接合部指押さえ、脚部回転ナデ/外面: 坏部下側回転ヘラケズリ、脚部回転ナデ	
59	土師器	坏	18.0	-	-	内外面: 赤色塗彩胎土: 明褐色	内面: 回転ナデ・ヨコナデ/外面: 回転ナデ	口縁部のみ、全周の40%
60	土師器	手捏ね土器	5.7	-	重量 32.3g	内外面: 暗褐色	内外面: 指による押さえ・ナデ	全体の90%
61	土製品	土玉	最大長 3.4	最大径 3.6	重量 39.5	全面: 黒褐色	全面: ナデ	完形品
62	土製品	土玉	最大長 4.1	最大径 3.3	重量 41.7	全面: 灰黄褐色	全面: ナデ	完形品
63	土製品	土玉	最大長 2.9	最大径 3.0	重量 30.7	全面: 黒褐色	全面: ナデ	完形品
64	土師器	甕	13.2	-	-	内外面: にぶい黄褐色	内面: 口縁部ヨコナデ、頸部以下横方向のヘラケズリ/外面: 口縁部~頸部ヨコナデ、以下タテハケ	上半部のみ、全周の30%
65	土師器	甕	15.2	-	-	内面: 黄褐色 外面: 灰黄褐色	内面: 口縁部ヨコナデ、頸部以下ヘラケズリ/外面: タテハケの後ヨコナデ/外面煤付着	口縁部から頸部にかけて、全周の15%
66	土師器	甕	16.0	-	-	内外面: 灰黄褐色	内面: 口縁部ヨコナデ、頸部横方向のヘラケズリ/外面: 口縁部ヨコナデ、頸部タテハケの後ナデ	口縁部から頸部にかけて、全周の20%
67	土師器	甕	17.6	-	-	内外面: 浅黄褐色	内面: 口縁部ヨコナデ、頸部ヘラケズリ/外面: ヨコナデ	口縁部のみ、全周の25%
68	土師器	甕	-	-	-	内面: 黄褐色 外面: 浅黄褐色	内面: 口縁部ヨコナデ、体部横方向のヘラケズリ/外面: 口縁部ヨコナデ、体部不定方向のハケメ	上半部のみ、全周の10%以下
69	土師器	甕	-	-	-	内面: 灰オリーブ色 外面: オリーブ灰色	内面: 口縁部~頸部ヨコナデ、以下ヘラケズリ/外面: 口縁部~頸部ヨコナデ、以下タテハケの後ヨコナデ	口縁部から頸部にかけて、全周の10%以下
70	土師器	甕	21.2	-	-	内外面: 黄褐色	内外面: 回転ナデ	口縁部のみ、全周の10%
71	土師器	甕	31.0	-	-	内面: 黄褐色 外面: にぶい橙色	内面: 口縁部ヨコナデ・ヨコハケ、頸部以下不定方向のヘラケズリ/外面: 口縁部ヨコナデ、頸部以下縦・斜ハケ	上半部の30%
72	土師器	甕	25.6	-	-	内外面: 浅黄褐色	内面: 口縁部ヨコナデ、体部横方向のヘラケズリ/外面: 口縁部ヨコナデ、体部不定方向のハケメ	上半部のみ、全周の20%
73	土師器	甕	26.8	-	-	内面: にぶい橙色 外面: 浅黄褐色	内面: 口縁部ヨコナデ、以下横方向のヘラケズリ/外面: 口縁部ヨコナデ、以下ヨコ・斜めハケ	全体の40%
74	土師器	甕	30.3	-	-	内外面: にぶい橙色	内面: 口縁部ヨコナデ、体部タテハケ/外面: 口縁部ヨコナデ、体部横方向のヘラケズリ	上半部のみ、全周の20%
75	土師器	甕	24.2	-	-	内外面: 浅黄褐色	内面: 口縁部ヨコナデ、以下ヘラケズリ/外面: ヨコナデ	口縁部のみ、全周の20%
76	土師器	甕	13.0	-	-	内外面: 浅黄褐色	内面: 口縁部~頸部ヨコナデ、以下横方向のヘラケズリ/外面: 口縁部~頸部ヨコナデ、以下タテハケ	口縁部のみ100%
77	土師器	甕	20.8	-	-	内外面: 浅黄褐色	内面: 口縁部ヨコナデ、頸部ヘラケズリ/外面: ヨコナデ	口縁部のみ、全周の20%
78	土師器	甕	18.4	-	-	内外面: 浅黄褐色	内面: 口縁部~頸部ヨコナデ、以下斜方向のヘラケズリ/外面: 口縁部~肩部ヨコナデ、以下不定方向のハケ	上半部の60%
79	土師器	甕	23.4	-	-	内外面: 浅黄褐色	内面: 口縁部ヨコナデ、体部横方向のヘラケズリ/外面: 口縁部ヨコナデ、肩部以下不定方向のハケメ	上半部のみ、全周の20%
80	土師器	甕	20.6	-	-	内外面: にぶい橙色	内面: ヨコナデ/外面: 口縁部ヨコナデ、以下ヘラケズリ	口縁部のみ、全周の25%
81	土師器	甕	20.0	-	-	内面: 浅黄褐色 外面: 灰黄褐色	内面: 口縁部ヨコナデ・ヨコハケ/外面: ヨコナデ	口縁部のみ50%
82	土師器	甕	11.2	-	-	内外面: 黄褐色	内面: 口縁部ヨコナデ、体部横方向のヘラケズリ/外面: 口縁部ヨコナデ、体部タテハケ	上半部のみ、全周の30%
83	土師器	甕	18.8	-	-	内外面: 浅黄褐色	内面: 口縁部ヨコハケの後ヨコナデ頸部以下横方向のヘラケズリ/外面: 口縁部ヨコナデ、頸部以下タテハケ	口縁部から頸部にかけて、全周の20%
84	土師器	甕	(21.0)	-	-	内外面: 浅黄褐色	内面: 口縁部ヨコハケの後ヨコナデ、体部横方向のヘラケズリ/外面: 口縁部ヨコナデ、体部タテハケ/一部に煤付着	上半部のみ、全周の40%
85	土師器	甕	18.0	-	-	内外面: 黄褐色	内面: 口縁部ヨコナデ、頸部横方向のヘラケズリ/外面: 口縁部ヨコナデ、頸部タテハケ	上半部のみ、全体の10%
86	土師器	甕	22.8	-	-	内外面: 浅黄褐色	内面: 口縁部ヨコナデ・一部ヨコハケ/外面: 口縁部ヨコナデ、体部タテハケ	上半部のみ、全周の10%
87	土師器	甕	25.4	-	-	内外面: 浅黄褐色	内面: 口縁部ヨコナデ、頸部以下縦方向のヘラケズリ/外面: 口縁部ヨコナデ、頸部以下タテハケ	上半部の40%

Tab. 19 SD39出土遺物観察表③

番号	種別	器種	法量 (cm)			色調	調整 (内面/外面/特記事項)	残存度
			口径	器高	底径			
88	土師器	甕	26.2	-	-	内外面:黄橙色	内面:口縁部ヨコナデ、体部粘土紐積み上げ後ナデによる整形/外面:タテハケの後口縁部ヨコナデ、肩部指押さえ/粘土積みの単位が内面に緩い段として残る	上半部のみ、全周の25%
89	土師器	甕	26.2	-	-	内外面:白灰色	内面:口縁部ヨコナデ、頸部以下ヘラケズリ/外面:口縁部ヨコナデ、肩部タテハケ	口縁部から頸部にかけて、全周の10%
90	土師器	甕	30.4	-	-	内外面:浅黄褐色	内面:口縁部ヨコナデ、体部横方向のヘラケズリ/外面:口縁部ヨコナデ、体部タテハケの後ナデ消し/外面口縁部の一部に煤付着	上半部のみ、全周の10%
91	土師器	甕	18.8	-	-	内面:にぶい黄褐色 外面:浅黄褐色	内面:口縁部ヨコナデ、頸部以下横方向のヘラケズリ/口縁部ヨコナデ、頸部以下縦・斜方向のハケ/ハケメ単位幅15mm	上半部のみ、全周の10%以下
92	土師器	甕	-	-	-	内面:灰黄褐色 外面:灰黄色	内面:口縁部ヨコナデ、頸部以下タテハケ/外面:口縁部ヨコナデ、頸部以下横方向のヘラケズリ	上半部のみ、全周の10%以下
93	土師器	甕	-	-	-	内外面:にぶい黄褐色	内外面:ヨコナデ	口縁部のみ、全周の10%
94	土師器	甕	-	-	-	内外面:にぶい黄褐色	内面:口縁部ヨコナデ、頸部以下ヘラケズリ/外面:口縁部ヨコナデ、頸部以下ナデ	口縁部から頸部にかけて、全周の10%
95	土師器	甕	-	-	-	内面:黄褐色 外面:浅黄褐色	内面:口縁部ヨコナデ、頸部以下横方向のヘラケズリ/外面:口縁部ヨコナデ、頸部以下不定方向のハケ	上半部のみ、全周の10%以下
96	土師器	甕	-	-	-	内外面:浅黄褐色	内面:口縁部ヨコナデ、頸部以下横方向のヘラケズリ/外面:口縁部ヨコナデ、頸部以下ヨコハケの後ナデ	口縁部から頸部にかけて、全周の10%
97	土師器	甕	26.0	23.7	11.0	内外面:浅黄褐色	内面:ヨコハケの後ヨコナデ、以下縦方向のヘラケズリ/外面:口縁部ヨコナデ、以下タテハケ/円孔2ヶ所	全体の80%
98	土師器	甕	-	-	-	内面:暗褐色 外面:灰黄褐色	内面:ナデ/外面:タテハケ/円孔1ヶ所残存	下半部のみ、全周の10%
99	土師器	甕	-	-	-	内外面:にぶい黄褐色	内面:ヘラケズリ、底部端部ナデ/外面:不定方向のハケメの後ナデ	下半部のみ、全周の10%
100	土師器	甕	18.6	-	-	内外面:黒褐色	内面:口縁部ヨコナデ、体部砂粒の動きの少ない横方向のヘラケズリ/外面:ナデ、口縁頸部に板状工具の押さえ痕/一部に煤付着	上半部のみ、全周の30%
101	土製品	移動式竈	-	-	-	内外面:灰黄褐色	内面:口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ、庇ケズリの後ナデ/外面:口縁部ヨコナデ、体部タテハケの後ナデ、庇ナデ/口縁と庇は図上で合成	上半部のみ、全体の20%
102	土製品	移動式竈	-	-	-	内面:にぶい褐色 外面:にぶい黄褐色	内面:ヨコナデ/外面:ヨコナデ、指押さえ	口縁~庇の上部のみ、全体の10%以下
103	土製品	移動式竈	-	-	-	内面:にぶい黄褐色 外面:灰黄褐色	内面:横方向のヘラケズリ、接地面ナデ/外面:タテハケの後横方向の強い指ナデ/接地面に繊維の圧痕	底部のみ、全体の10%以下
104	土製品	移動式竈	-	-	-	内面:黄褐色 外面:浅黄褐色	内面:接地面周辺横方向のヘラケズリ、上部縦方向のヘラケズリ/外面:タテハケ/焼き口付近の最下部	底部のみ、全体の10%以下
105	土製品	移動式竈	-	-	-	内面:灰黄褐色 外面:にぶい黄褐色	内面:上部縦方向のヘラケズリ、下部横方向のヘラケズリ、接地面ヘラ切り/外面:斜方向のハケメの後一部ナデ、最下部横方向の強いヨコナデ	体部下端部のみ、全体の10%以下
106	土製品	移動式竈	-	-	-	内外面:黄褐色	内面:横方向のヘラケズリ、端部ケズリ仕上げ/外面:タテハケ/焼き口付近の最下部	底部のみ、全体の10%以下
107	土製品	移動式竈	-	-	-	内面:浅黄褐色 外面:黄褐色	内面:ヘラケズリ/外面:タテハケ/焼き口部分、庇は剥離	体部のみ、全体の10%以下
108	土製品	移動式竈	-	-	-	内外面:にぶい黄褐色	内面:頸部横方向のヘラケズリ、以下縦方向のヘラケズリ/外面:タテハケの後一部ナデ/正面左上の焼き口~口縁頸部、庇は剥離	体部上半部のみ、全体の20%
109	土製品	移動式竈	-	-	-	内外面:黄褐色	内外面:ナデ、指押さえ/正面右上の焼き口、庇部分。内面煤	庇上部のみ、全体の10%以下
110	土製品	移動式竈	-	-	-	内外面:灰黄褐色	内面:縦方向のヘラケズリ、接地面周辺横方向の強い指ナデ/外面:タテハケの後ナデ/焼き口左最下部、接地面に繊維圧痕	体部下端部のみ、全体の10%以下
111	土製品	土製支脚	-	-	-	全面:オリブ褐色	全面:ヘラケズリの後ナデ	完形
112	土製品	土製支脚	-	-	-	全面:にぶい褐色	全面:ヘラケズリの後ナデ、指押さえ	全体の80%
113	土製品	土製支脚	-	-	-	内外面:黄褐色	内面:ヘラケズリの後ナデ/外面:ナデ、指押さえ	軸部のみ、全体の25%
114	土製品	土製支脚	-	-	-	内面:暗褐色 外面:灰黄褐色	内面:粗い回転ヘラケズリ/外面:ナデ、指押さえ	軸部のみ、全体の10%
115	土製品	土製支脚	-	-	-	内外面:灰黄褐色	内面:ヘラケズリの後ナデ/外面:ヘラケズリ	軸部のみ、全体の25%
116	土製品	土製支脚	-	-	-	全面:にぶい黄色	全面:ナデ、指押さえ、突起部のみヘラケズリ	全体の70%
117	土製品	土製支脚	-	-	-	全面:にぶい褐色	全面:ナデ/穿孔は貫通	軸部のみ、全体の20%
118	土製品	土製支脚	-	-	-	全面:にぶい褐色	全面:ヘラケズリの後ナデ、指押さえ	上半部のみ、全体の30%
119	土製品	土製支脚	-	-	-	全面:にぶい褐色	全面:ハケメの後ナデ	突起部のみ、全体の10%
120	土製品	土製支脚	-	-	-	全面:にぶい褐色	全面:ヘラケズリの後一部ハケメ、	突起部のみ、全体の10%

(上面に混入した遺物)

121	弥生土器	甕	-	-	-	内面:灰白色 外面:褐配色	内面:口縁部ナデ頸部以下ヨコハケ後ナデ/外面:ナデ	上半部のみ、全周の10%以下
122	弥生土器	甕	-	-	-	内外面:灰黄色	内外面:ナデ	口縁部から頸部にかけて、全周の10%以下
123	弥生土器	甕	-	-	-	内面:浅黄褐色 外面:にぶい褐色	内面:なで/外面:ナデ、指押さえ、ハケメ/風化進心	底部のみ、全周の30%
124	弥生土器	台付鉢 (ワイングラス型)	13.4	-	-	内面:黄褐色 外面:浅黄褐色	内面:ヨコハケの後指押さえ/外面:口縁部ヨコナデ、以下斜方向のハケの後縦方向のヘラミガキ	口縁~体部、全周の15%
125	古式土師器	甕	-	-	-	内面:灰黄褐色 外面:にぶい黄褐色	内面:頸部ヨコナデ、以下横方向のヘラケズリ/外面:頸部ヨコナデ、肩部以下タテ・ヨコハケ/外面胴部に煤	頸部から胴部にかけて、全周の20%
126	古式土師器	甕	-	-	-	内外面:灰黄褐色	内面:横方向のヘラケズリ/外面:頸部から肩部ヨコナデ、胴部不定方向のナデ/2列の刺突	頸部から胴部にかけて、全周の10%以下
127	土師器	甕	-	-	-	内外面:浅黄褐色	内面:口縁部~頸部ヨコナデ、以下斜め方向のヘラケズリ/外面:口縁部~頸部ヨコナデ、以下タテ・ヨコハケ	口縁部のみ30%

Tab. 20 SD39出土遺物観察表④

(SD39下層出土)

番号	種別	器種	法量 (cm)			色調	調整 (内面/外面/特記事項)	残存度
			口径	器高	底径			
128	弥生土器	甕	-	-	-	内外面：浅黄橙色	内外面：ヨコナデ、口縁外面凹線文	口縁部のみ、全周の10%以下
129	土師器	甕	-	-	-	内外面：浅黄橙色	内外面：ヨコナデ	口縁部から頸部にかけて、全周の10%以下
130	土師器	甕	17.4	-	-	内外面：橙色	内面：口縁部ヨコナデ、頸部ヘラケズリ/外面：ヨコナデ	口縁部のみ30%
131	土師器	甕	-	-	-	内外面：黄橙色	内外面：ヨコナデ	口縁部のみ、全周の10%以下
132	土師器	甕	-	-	-	内外面：浅黄橙色	内面：口縁部ヨコナデ、頸部ナデ、以下ヘラケズリ/外面：ヨコナデ	口縁部のみ、全周の10%以下
133	土師器	甕	21.6	-	-	内外面：明黄褐色	内面：口縁部ヨコハケの後不定方向のナデ、頸部以下横方向のヘラケズリ/外面：口縁部ヨコナデ、頸部不定方向のナデ	口縁部から頸部にかけて、全周の15%
134	土師器	甕	-	-	-	内外面：灰白色	内面：口縁部ヨコナデ、頸部以下ヘラケズリ/外面：口縁部ヨコナデ、頸部以下タテハケが摩滅	口縁部のみ、全周の10%以下
135	土師器	甕	-	-	-	内外面：浅黄橙色	内外面：ヨコナデ	口縁部のみ、全周の10%以下
136	土師器	甕	-	-	-	内外面：にぶい黄橙色	内面：口縁部ヨコナデ、頸部以下ヘラケズリ/外面：口縁部ヨコナデ、頸部タテハケの後ヨコナデ	口縁部から頸部にかけて、全周の10%以下
137	土師器	高坏	-	-	-	内外面：にぶい黄橙色	内面：ナデ/外面：回転ナデ	脚部上半のみ、全体の30%
138	須恵器	坏蓋	-	-	-	内外面：灰色	内外面：回転ナデ	口縁部から頸部にかけて、全周の25%
139	須恵器	坏身	-	-	-	内面：灰オリーブ色 外面：青灰色	内面：回転ナデ/外面：回転ナデ、底部ヘラ切りの後不定方向のナデ	体部下半から底部にかけて、全体の40%
140	須恵器	壺	-	-	-	内面：オリーブ灰 外面：青灰色	内面：回転ナデの後不定方向のナデ/外面：回転ナデ、底部のみ回転ヘラケズリ	底部のみ、全周の40%
141	須恵器	高坏	-	-	9.5	内外面：暗灰色	内外面：回転ナデ	口縁部のみ、全周の20%

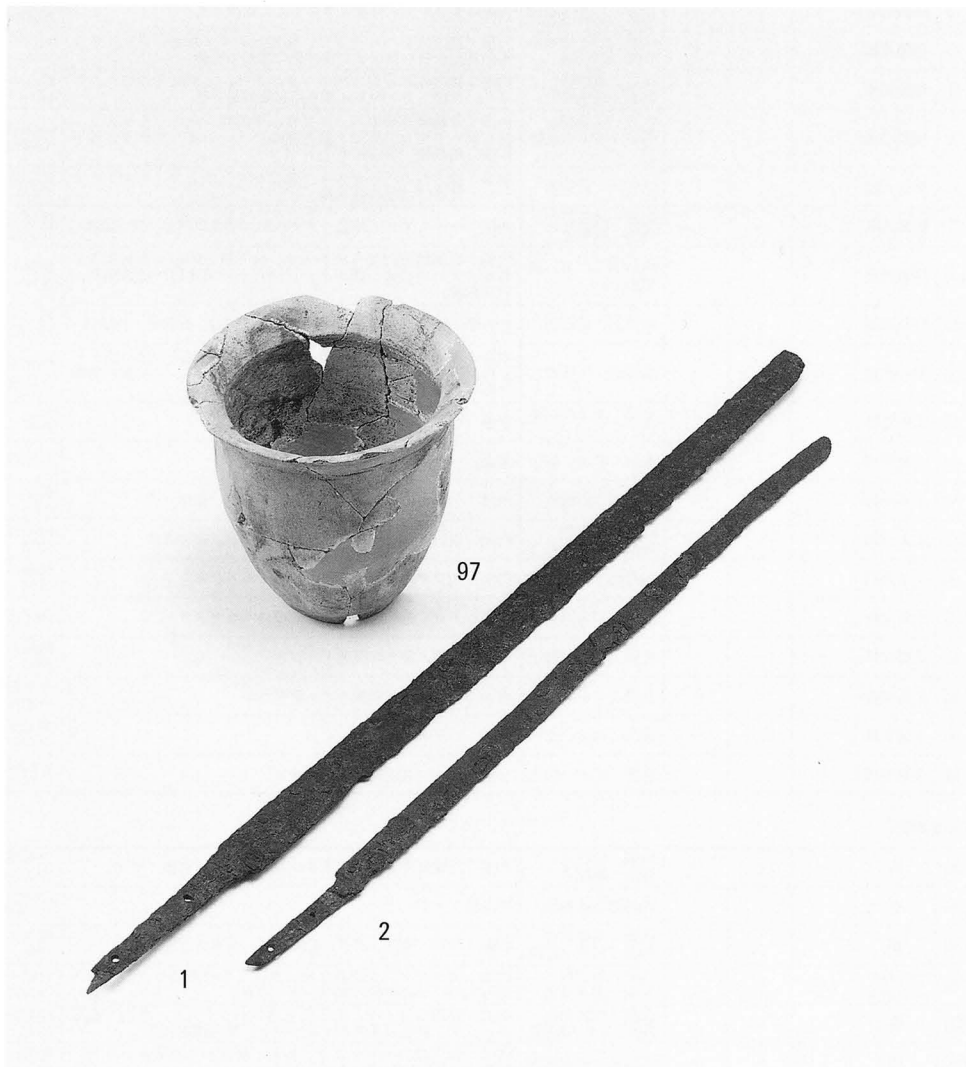


Fig.117 SD39上面 遺物写真① (大刀と甕)

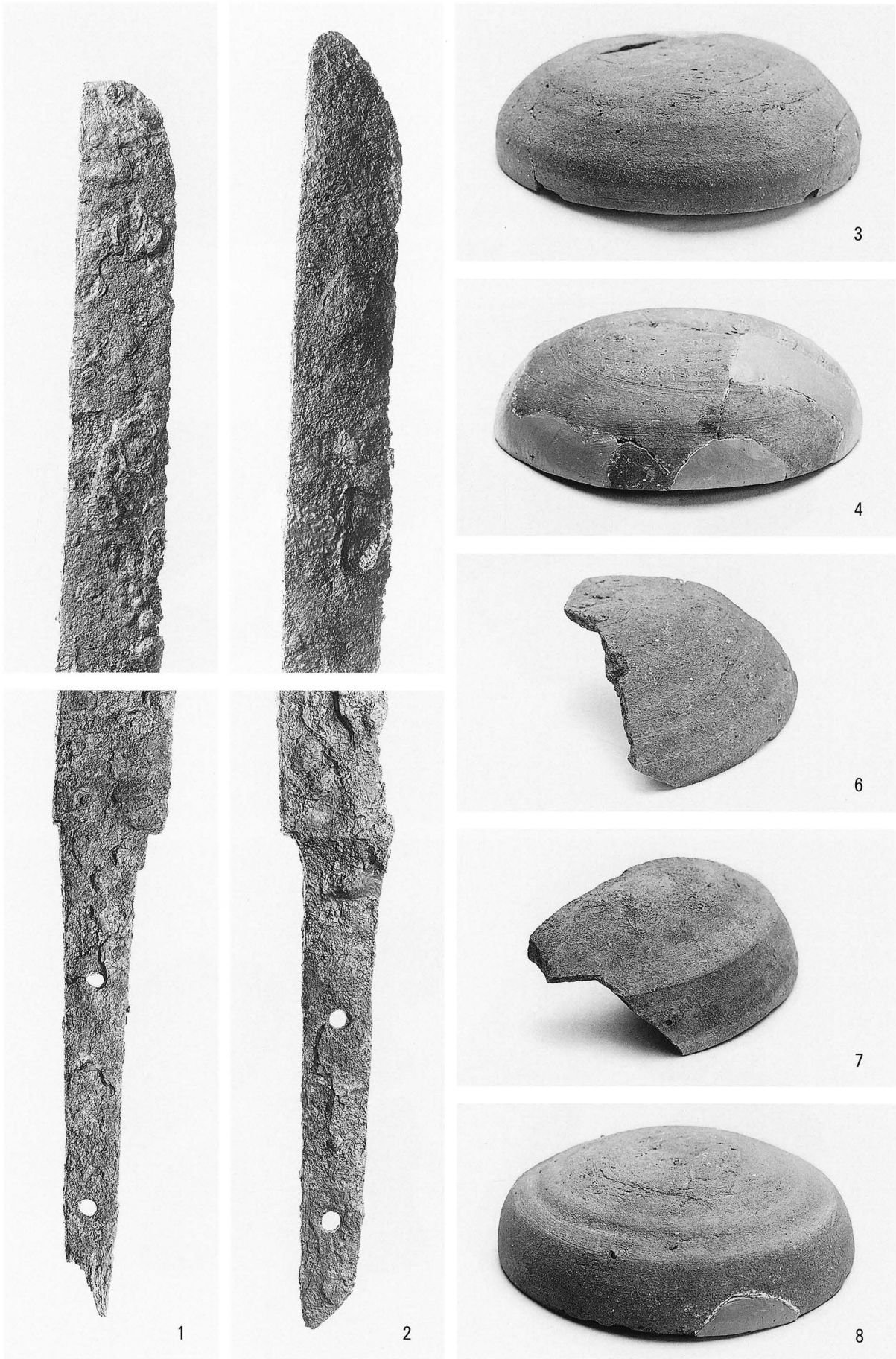


Fig.118 SD39上面 遺物写真②（大刀・須恵器坏蓋）

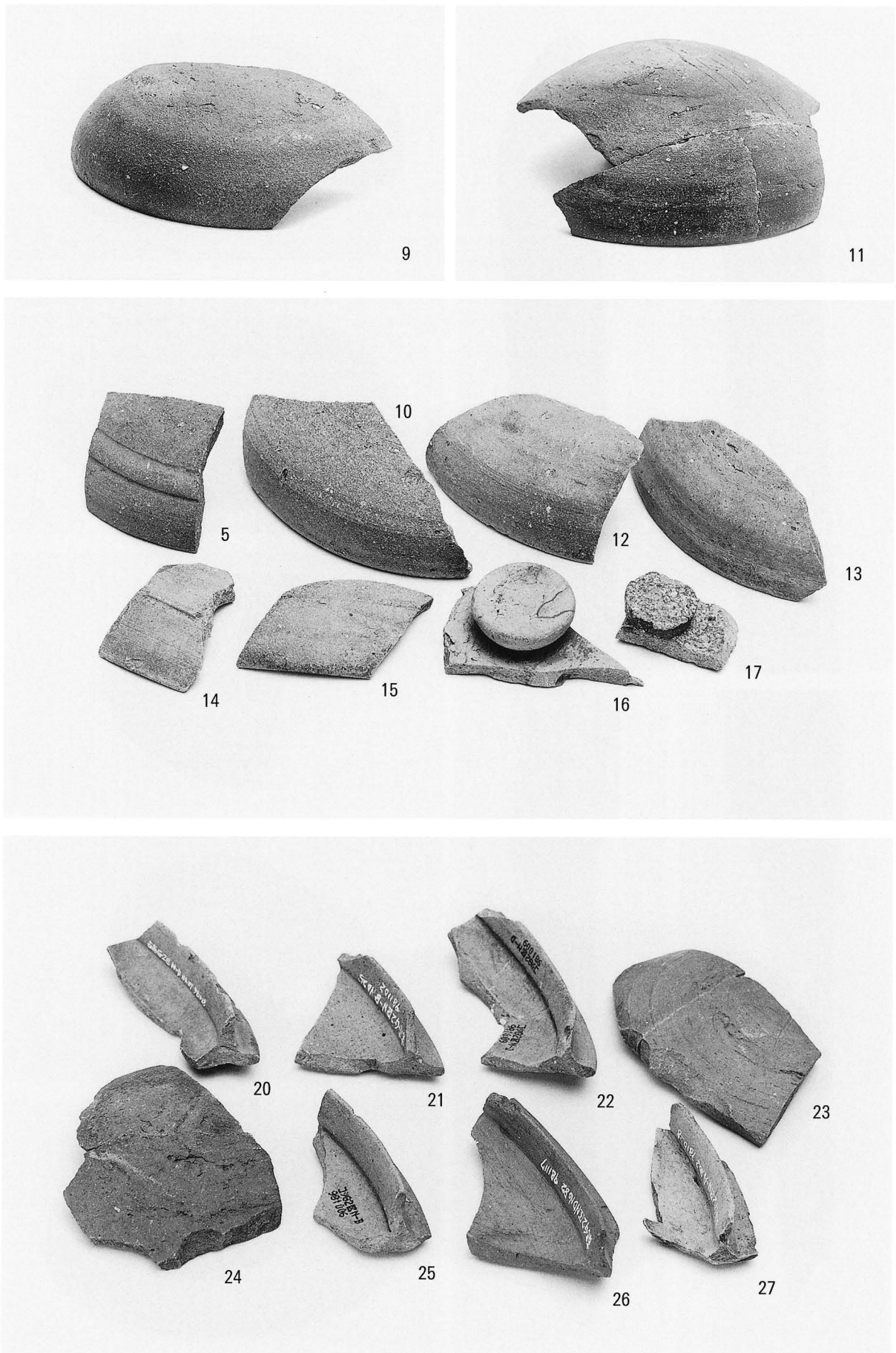


Fig.119 SD39上面 遺物写真③ (須恵器坏)

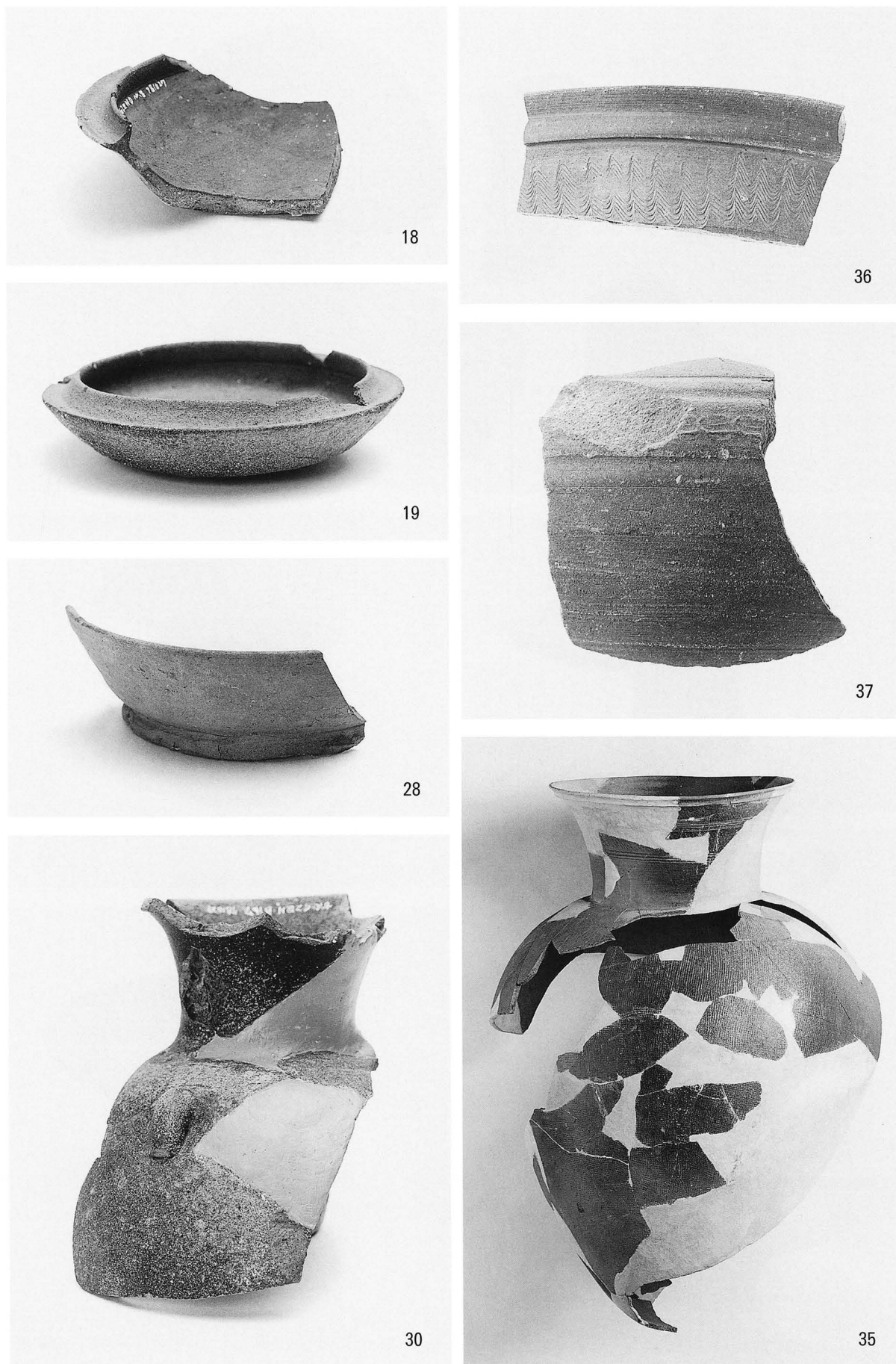


Fig.120 SD39上面 遺物写真④（須恵器坏・提瓶・甕）

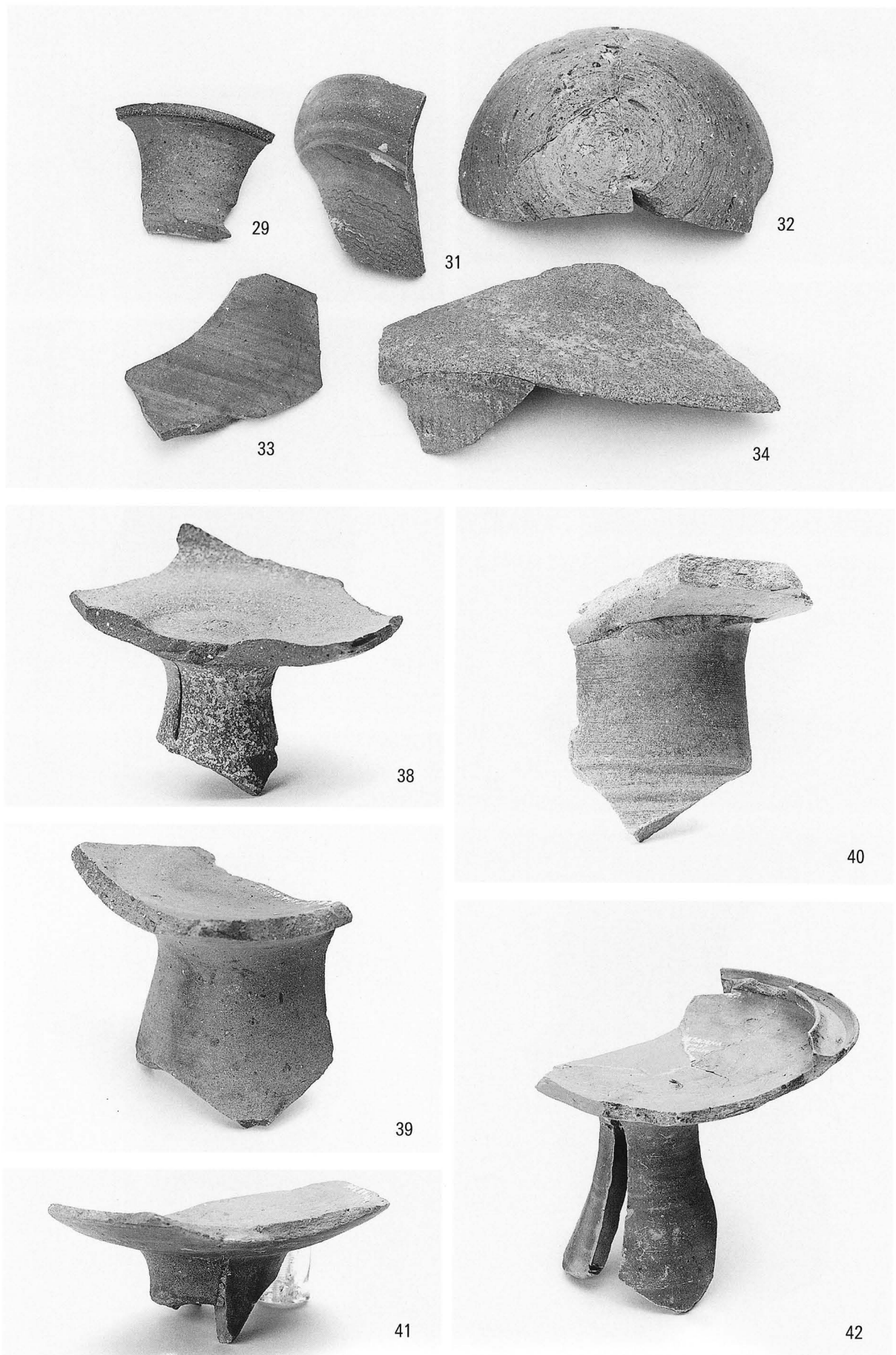


Fig.121 SD39上面 遺物写真⑤ (須恵器隼・壺類・高坏)

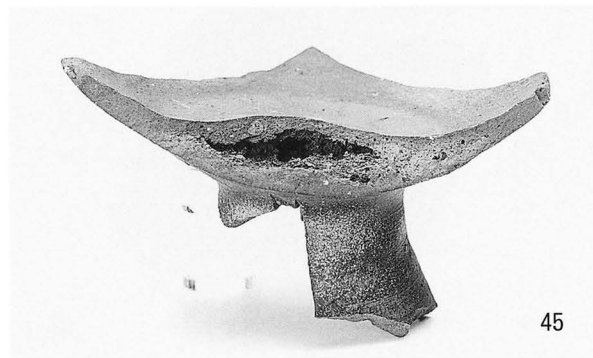


Fig.122 SD39上面 遺物写真©（須恵器高坏・土師器高坏）

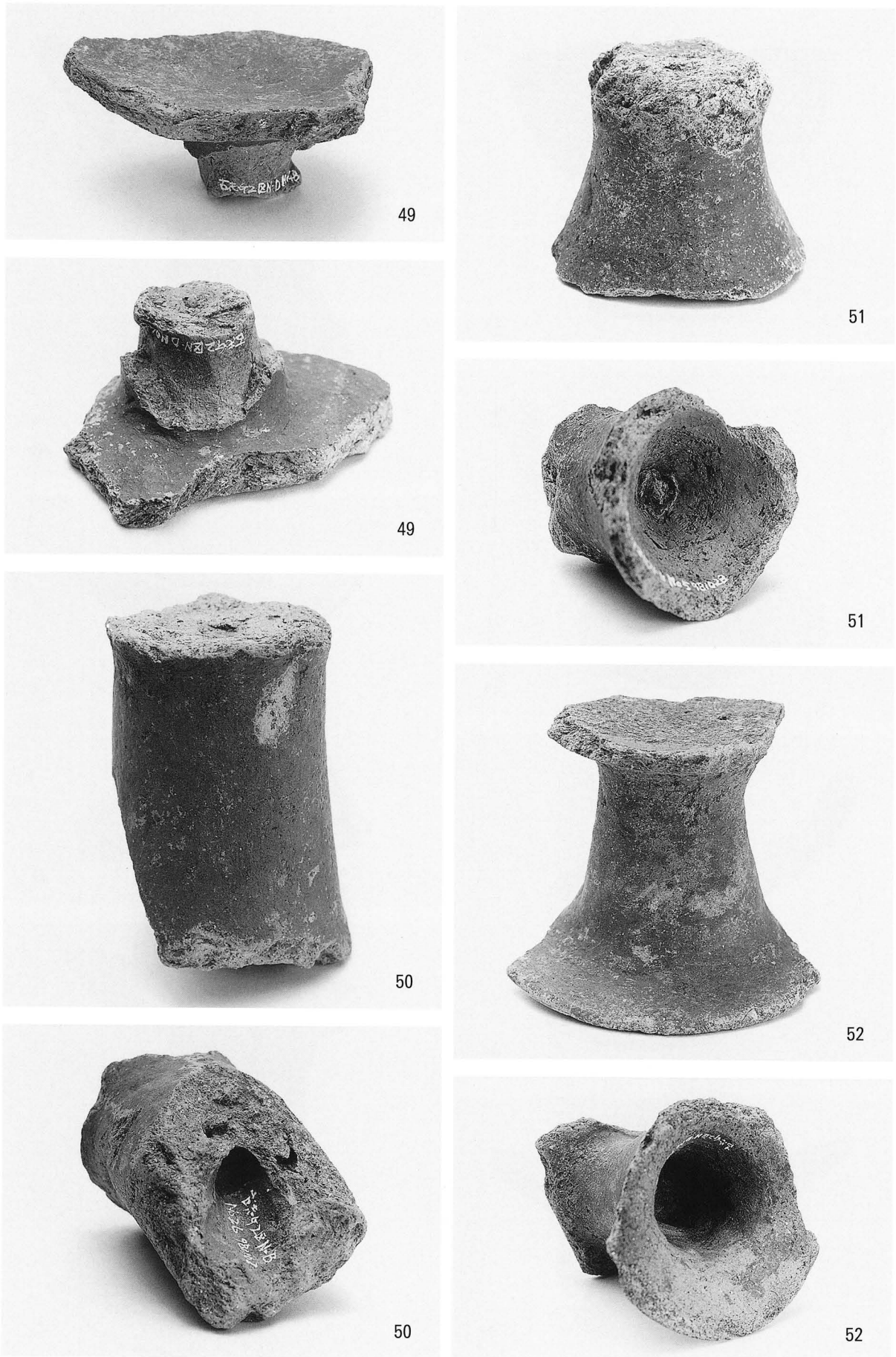


Fig.123 SD39上面 遺物写真⑦ (土師器高坏)

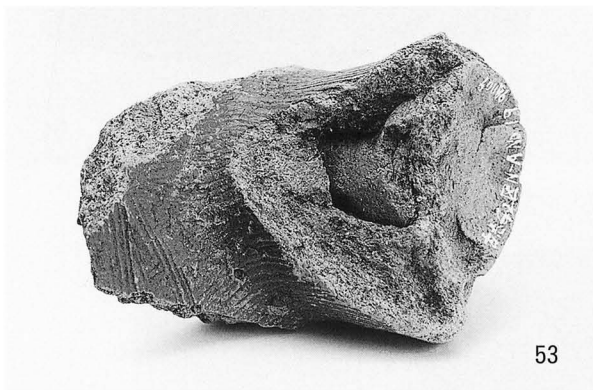
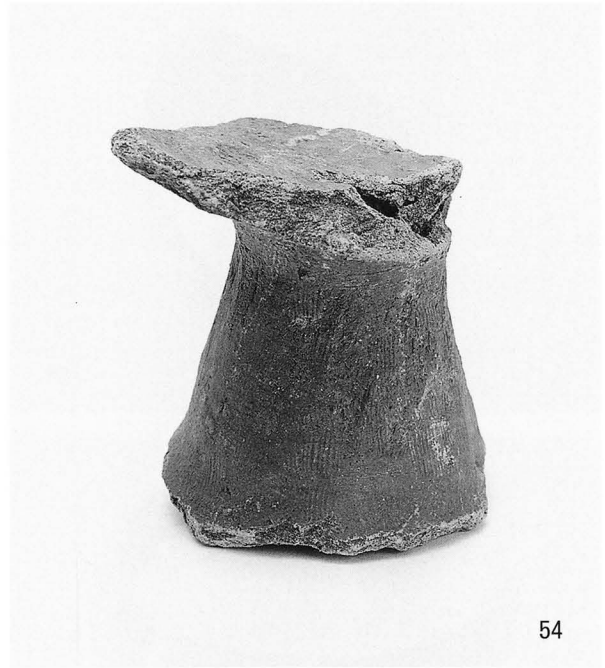


Fig.124 SD39上面 遺物写真⑧（土師器高坏）

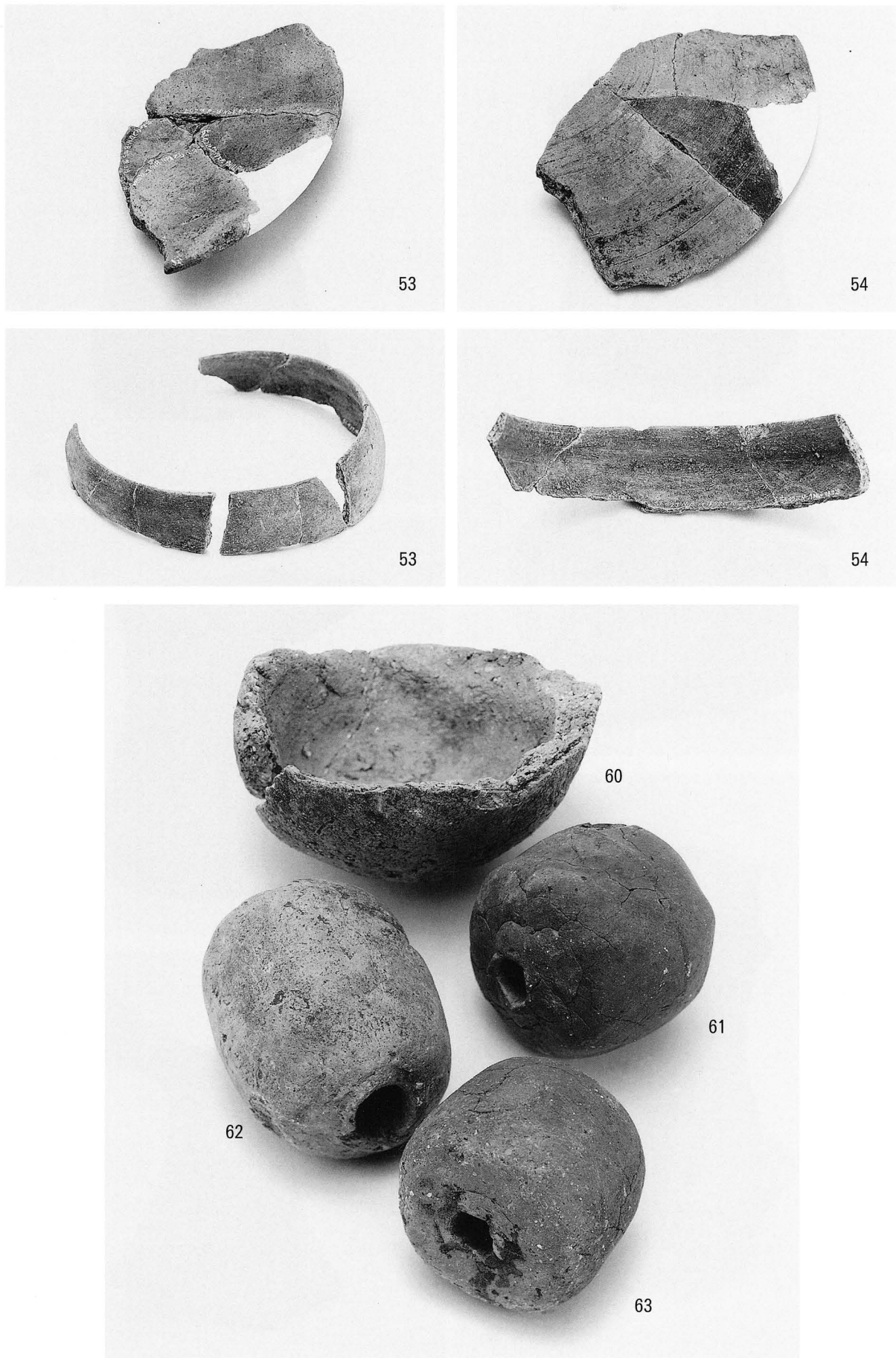


Fig.125 SD39上面 遺物写真⑨ (土師器高坏・手捏ね土器・土玉)

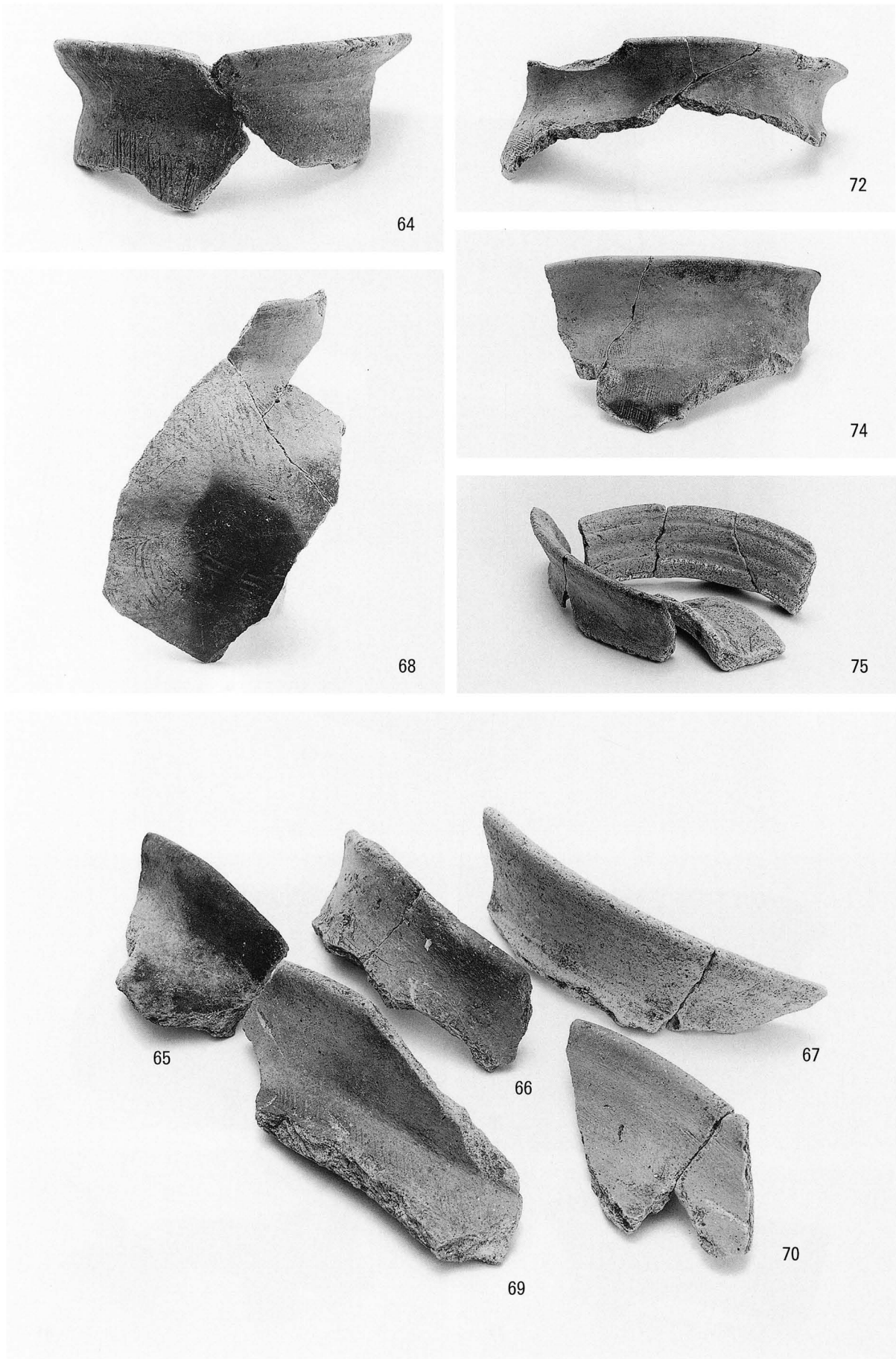


Fig.126 SD39上面 遺物写真⑩（土師器甕）

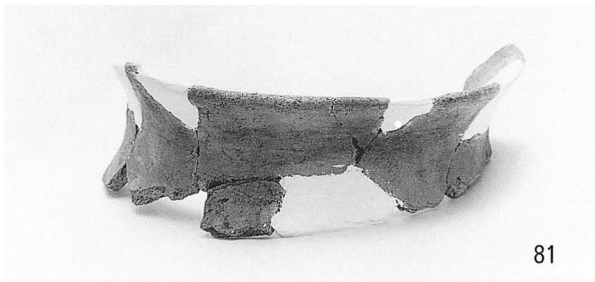


Fig.127 SD39上面 遺物写真⑪ (土師器甕)

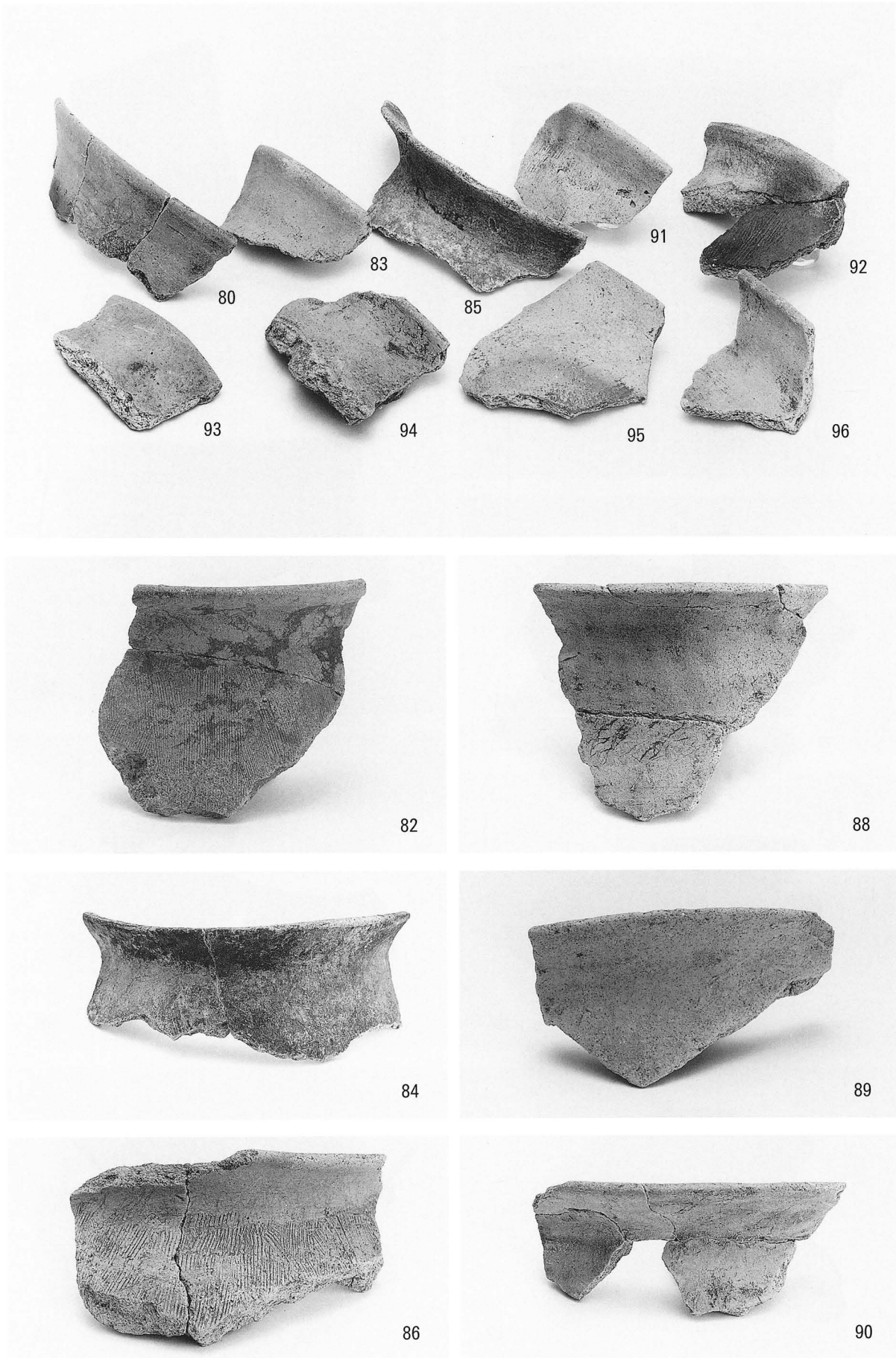


Fig.128 SD39上面 遺物写真⑫（土師器甕）

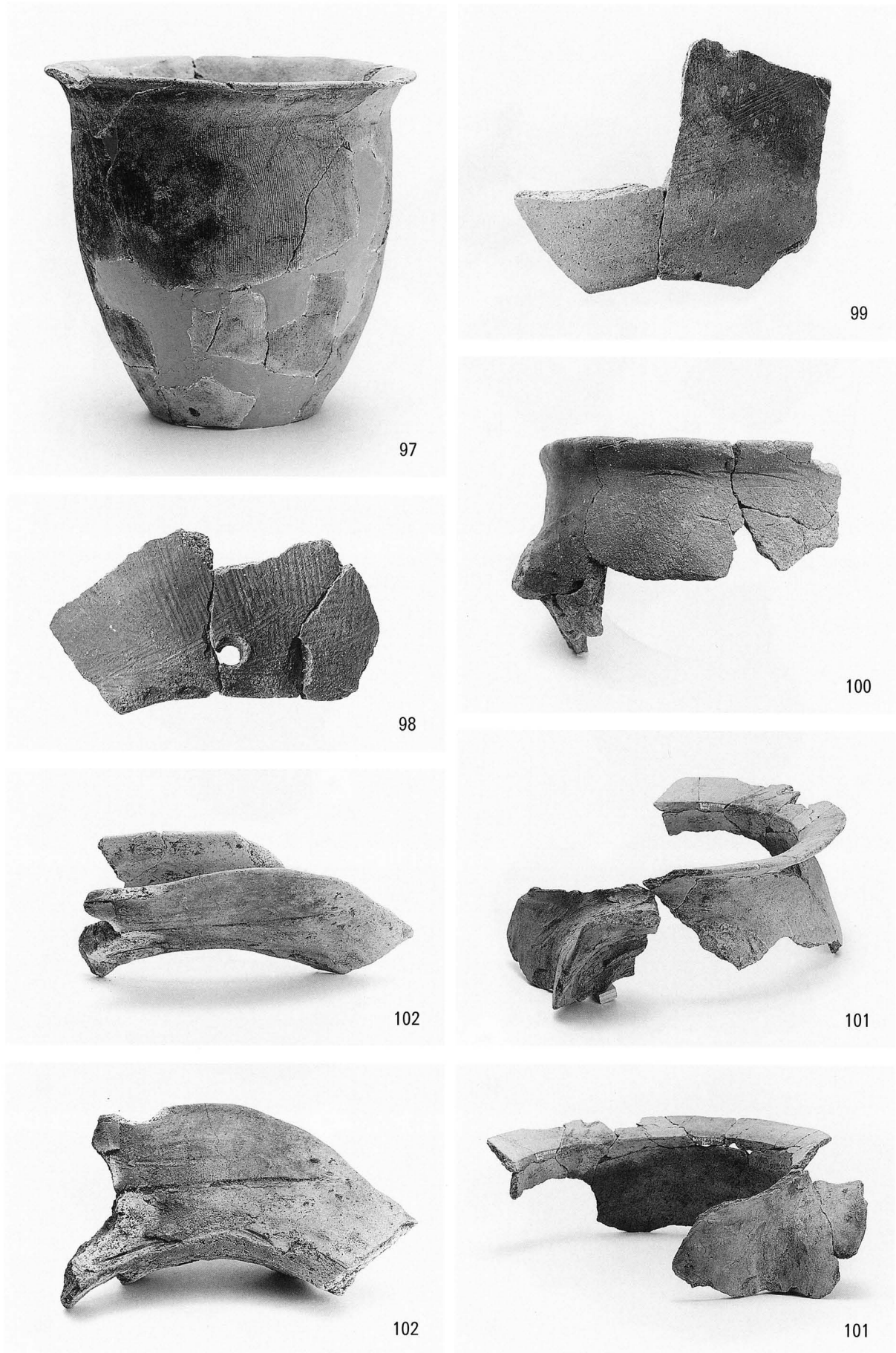


Fig.129 SD39上面 遺物写真⑬ (土師器甌・移動式竈)

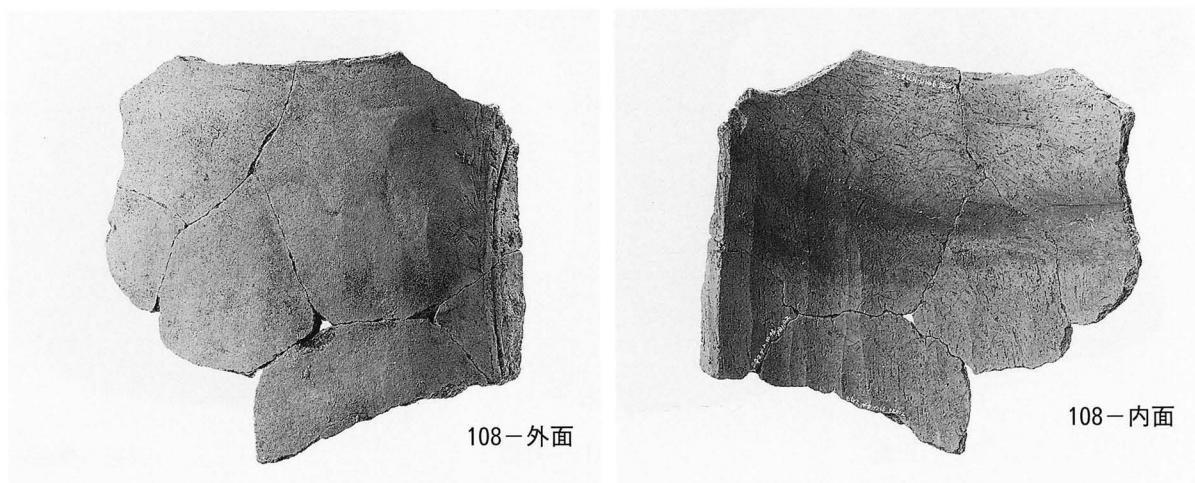
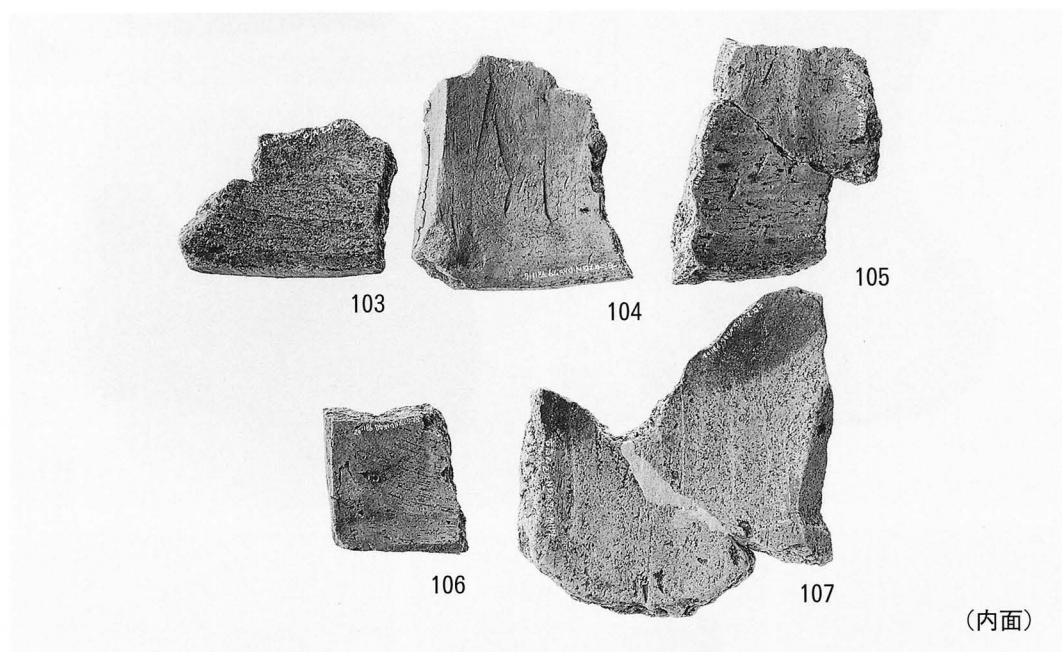
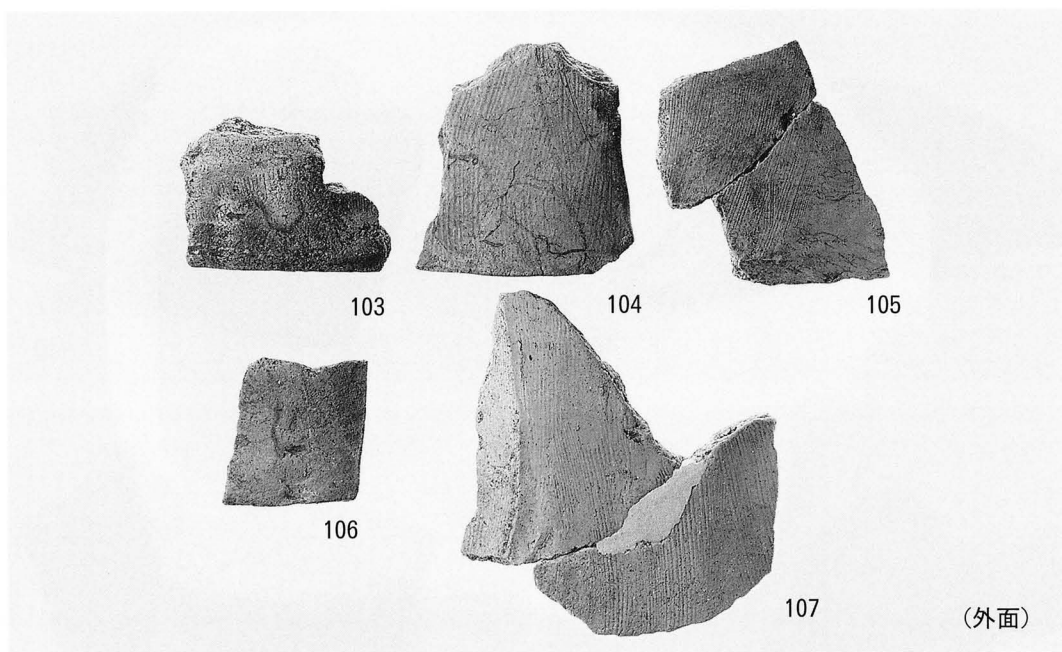


Fig.130 SD39上面 遺物写真⑭（移動式竈）



Fig.131 SD39上面 遺物写真⑮ (移動式竈・土製支脚)



112-正面



112-側面



116-背面



112-下面



116-下面



112



116-正面

Fig.132 SD39上面 遺物写真⑩（土製支脚）

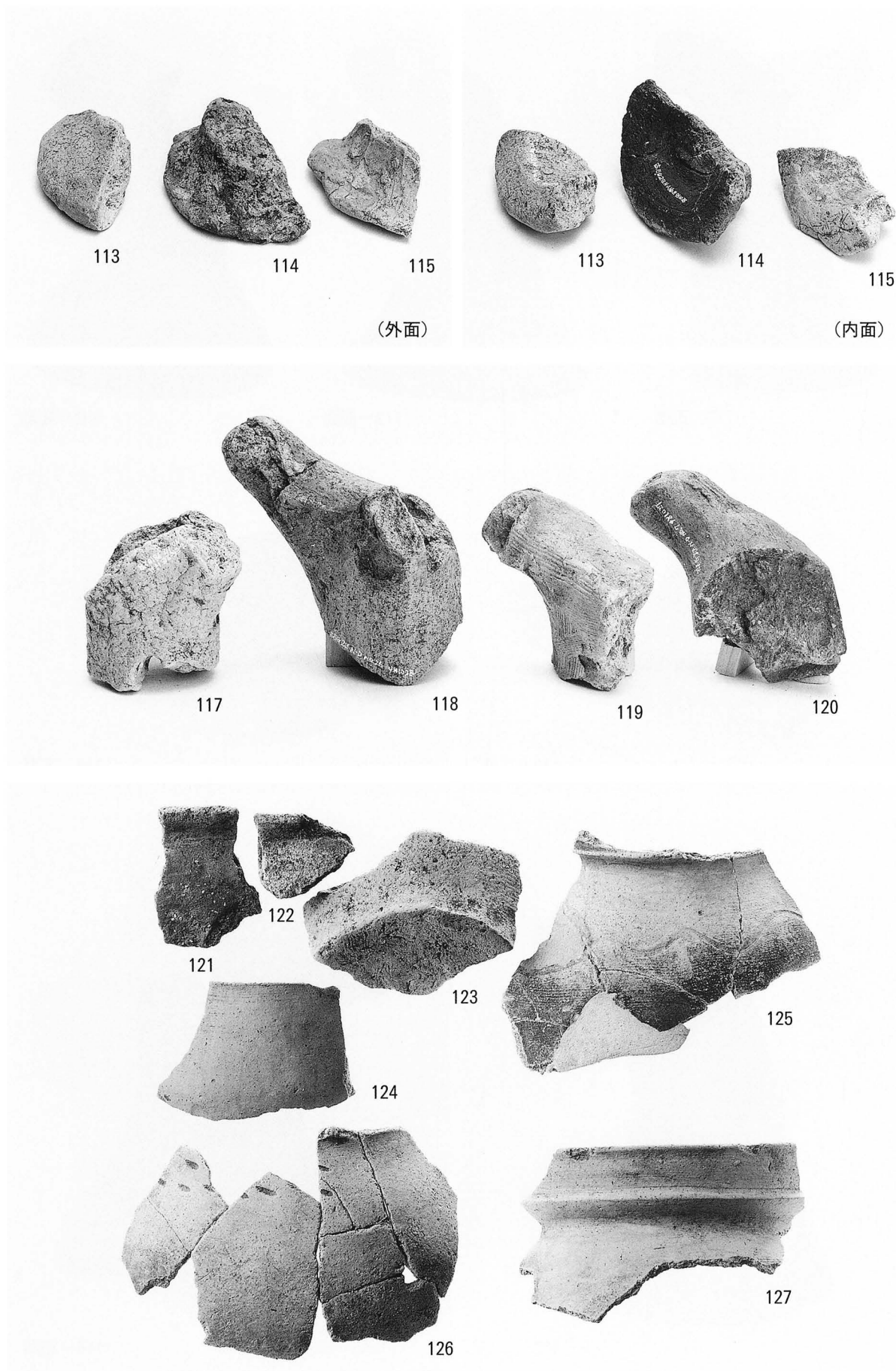


Fig.133 SD39上面 遺物写真⑰ (土製支脚・混入遺物)

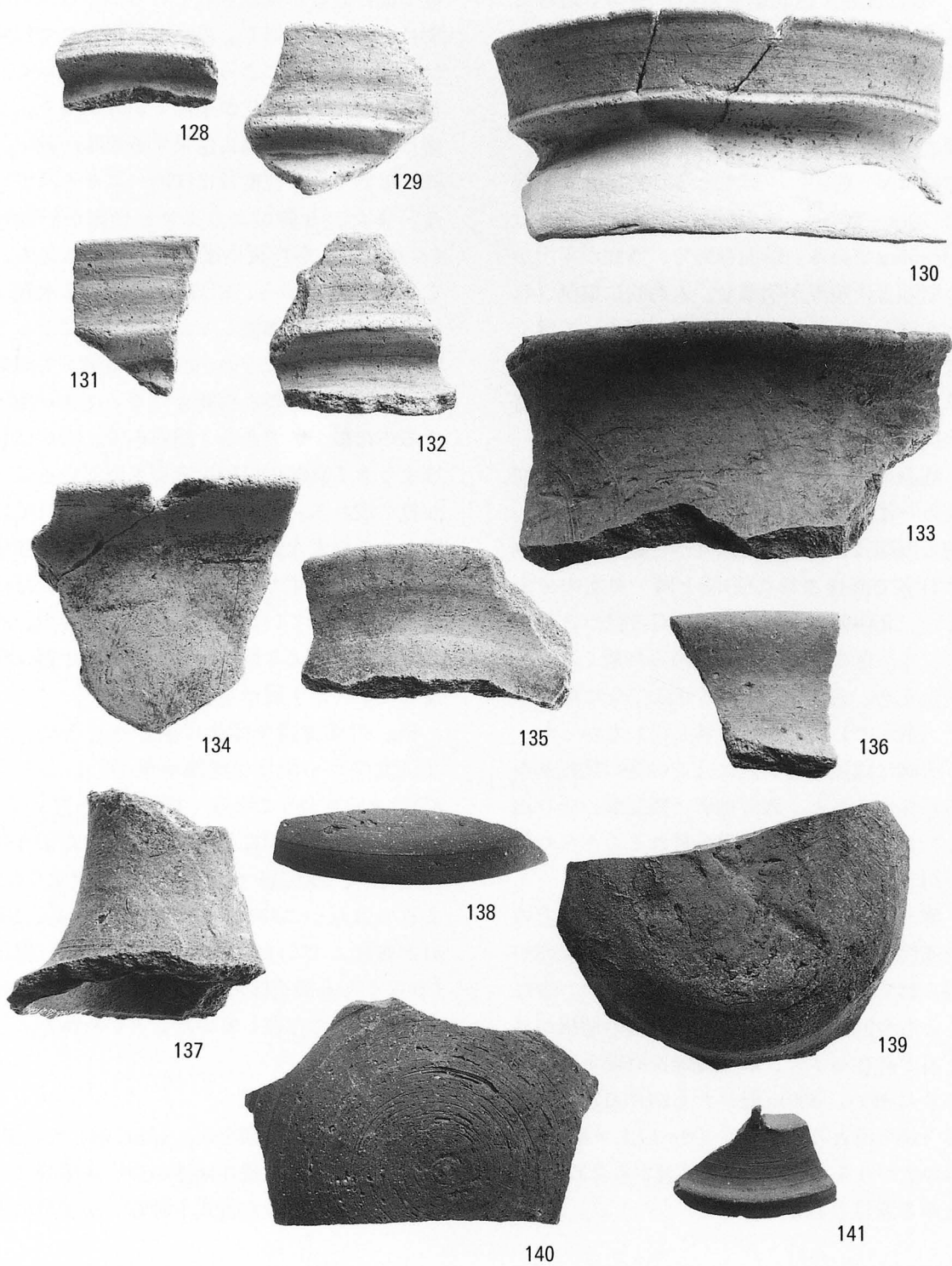


Fig.134 SD39下層出土 遺物写真

第4節 SD41の詳細

(古墳時代前期前葉の溝)

1. SD41の概要

SD41はG2区北側を斜めに横切る溝跡である。位置はFig. 95のG区全体図およびFig. 97の溝遺構全体図に示した。

G2区のなかでは総延長35m分検出し、ほぼ直線状に走り調査区の外へと続いている。方位はN-約50°-Wをとる。検出面での幅は120cm~200cm、検出面から底までの深さは40~55cmである。断面台形で、溝底が平坦かつ壁面との境界が明確な、人為的に掘削された水路とみられる。溝の大半が埋まって浅くなった段階で、古墳時代前期前葉(小谷2式、草田編年7期:布留1式併行)の多量の土器が廃棄されていた。

底面の標高差からみると、流路は掘削当初南東→北西の方向に流れていたと考えられる。溝の両端はG2区調査区外へと続き、南東側はH区で調査されたSD58と同一のものである⁽¹⁾。北西側は今回調査したG3区へと続くが、G3区の遺構面は深く削られ低くなっているため、SD41の延長部分は完全に削られて(飛んで)いて痕跡を残していなかった。下流側に隣接するF区にはこの溝の延長がみられないことと、周辺地形(微高地の張り出し)からみると、溝は南へ折れることなく神戸川本流に合流していた可能性が高い。

溝の機能は灌漑や排水路、境界設定などの可能性が考えられるが、現状では調査範囲が限られており断定することはできない。少なくとも今回の調査区内には同時期の遺構がほとんど存在せず⁽²⁾、溝の機能を直接示す手がかりは無い。200m離れたC区SD17・SD18を一連の溝とみて、長さ400m以上×幅約150mの広がりをもつ集落域を区画するための溝、とみる意見もある⁽³⁾。

2. 埋土の堆積状況

SD41の埋土堆積状況はFig. 98(P.101)土層断面図のCラインに示した。H区では数度の掘り直しが確認されているが、G区の中ではその形跡は無く、最初に掘削されて以降は順次水平堆積によって溝は埋まっていく。初期の埋土は土壌化が進んで黒味が薄く、上層ほど未分解有機物に由来する黒味が強い。総じて各土層の粒度はほぼ均一にそろっている。また、3層のようにきめの細かい砂粒(シルト質)が均質に堆積する部分もある。こうした特徴から、SD41は安定した水量がある水路として機能しており、水流によって粒度淘汰を受けた土砂が次第に堆積して溝を埋めていったものと判断される。遺物が出土するのは最上層である1層のみで、溝がほぼ埋まりきる直前の段階に廃棄されていることが見て取れる。厳密には、遺物が置かれて以降もある程度水量のある溝として一定期間機能していたはずで、この間土器は露出した状態で放置されていたことになる。その後、溝の水流作用による堆積物で、次第に土器は埋没したことが土層から判断される。

Fig. 97溝遺構全体図に示したように、G2区北側の一面には溝跡が集中し、しかもSD41と切り合うことなく平行に走っている。一見すると人為的に平行に配置されたように見えるが、Tab. 14(P.98)に示したように、これらは互いに時期の異なる溝である。SD41が機能していた古墳時代前期には、周辺(少なくとも調査区内)にはこの溝1条だけが流路として存在していたことがわかる。

3. 遺物の出土状況

出土状況の全体図をFig. 135に示した。SD41の埋土からは、残存状態の良い古墳時代前期の土器(いわゆる古式土師器)が多量に出

(1) 島根県教育委員会2001『古志本郷遺跡Ⅱ』p.127~ H区SD58でも同様に、溝埋土最上層から古式土師器が多数出土している。

(2) 井戸跡SE01(p.177)、掘立柱建物SB23(p.224)と、隣接するHⅡ区で竪穴建物SI01があるのみである。(SI01については註(1)文献)

(3) 島根県教育委員会2002『古志本郷遺跡Ⅳ・放れ山横穴墓群・只谷間府・上沢Ⅲ遺跡(分析編)』

土した。その総量は重量にして23,540gあり、検出範囲がわずか35mであることを勘案すると極めて出土密度が高い。実測図が作図できる程度に接合復元されたものはこのうちで48個体あり、その重量は19,760gである。残りの非掲載資料3,780gについては、乱暴な方法ながら参考までに完形品の甕（写真Fig. 152-18）1個分の重量840gで割ると4.5個分の重量となる。したがって、あくまで目安であるが、35mの長さの溝の中に50個以上の土器が出土した計算となる。なお出土してから取り上げをおこなう間に、完形品の鼓形器台1点と手捏ね土器1点が盗難に遭い紛失してしまった。

前項で述べたように、土器が出土したのは埋土最上層に限られ、それより下層には一切遺物が含まれない。水平分布についてはFig. 135の遺構全体図から見て取れるように、検出した溝全体にわたって分布しているが、完形品に近い残存状態のよい破片が一定の間隔をとるようにまとまりを持つ点が注意される。最も集中するのはFig. 137に図示した範囲で、甕・器台・高坏が近接して出土した。それ以外の地点については、1列に土器を並べたように溝幅の中心ラインに沿って出土している。

Fig. 136～139には出土状況の拡大図を掲載した。残りの良い甕の出土状況についてその傾きをみると、口縁を横に向けた横倒しの状態のものが多い（15/23/24/25/38/45/48）。口縁の向き（倒れた方向）に規則性は無い。一方、口縁を上に向け正立した状態のもの（39/41）も含まれている。正立したものが本来置かれたまま状態を保っているとみれば、間隔をとって並べられたように出土した甕は破損品の廃棄というより、意図をもって置き並べられたものとみられる。甕などは本来正

立する向きに立てられていた可能性がある。前項で述べたように、これらの土器は現地に廃棄されてから溝が完全に埋没するまでの一定期間は露出した状態であったため、この間に転倒したのであろう。

4. 遺物内容の概要

SD41から出土した土器は図示できたもので甕31個体、壺3個体、鼓形器台6個体、高坏7個体、低脚坏1個体である。甕はすべて複合口縁の山陰系のもので、布留甕など他地域からの搬入あるいは直接の影響を受けた模倣品などは含まれない。非掲載としたものの内訳は、弥生後期の甕1点が含まれる他すべて甕の破片である。なおこれ以外に鼓形器台の完形品1個体と手捏ね土器1個体を紛失している。

5. 遺物の時期

SD41から出土した土器の時期的位置づけを検討する。結果として、これらの土器は時期的にばらつきがなくほぼ一型式にまとまり、古墳時代前期前葉に位置づけられる。草田編年⁽¹⁾の草田7期、小谷2式（布留1式併行）⁽²⁾と結論づけている。

この前後の時期の土器編年については、壺・甕を中心に型式変化が把握されている。その際に変化を示す主要な指標とされている要素は、底部の丸底化と、口縁端部の形状、胴部のプロポーシオンなどである。以下ではこの点についてSD41出土の甕・壺をみってみる。

まず底部の丸底化について検討する。底部まで残存している個体はFig. 141以降に示した小型・中型甕⁽³⁾ 15・18・23・25・39・41、大型甕45、大型壺48の計8個体であった。このうち小型・中型甕6点の底はすべて丸く、

(1) 赤澤秀則編1992『南講武草田遺跡』講武地区県営圃場整備事業発掘調査報告書5 鹿島町教育委員会

(2) 小谷式の型式設定、併行関係の認識については松山智弘氏による下記の研究成果に依拠している。
松山智弘2000「小谷式再検討－出雲平野における新資料から－」『島根考古学会誌 第17集』島根考古学会

松山智弘2002「神原神社古墳埋納坑出土の土器について」『神原神社古墳』加茂町教育委員会

(3) 甕の大中小は口縁径・器高の相対的区分で、本書の記述のための便宜上のものである。

丸底化した後、すなわち松山氏の設定する小谷式の範疇である。大型の甕45と壺48は底部に直径5cmほどのごくわずかな平坦面をもつが、これは法量が大きいため⁽¹⁾、小谷式に先行するいわゆる大木式(草田6期古相)の「痕跡的平底」とは異なる。

次に胴部のプロポーションについて。胴部の最大径位置は大型甕45がやや高い他は、すべて中位にある。したがって肩を張らず、整った楕円形か球形の胴部をもつ。また、甕の頸部は比較的長くしっかりとした括れをもち、一次口縁の退化はみられない。

上記の各要素を箇条書きすると、①底部は完全に丸底化し、かつ口縁端部は肥圧させ平坦面を持つ。したがって小谷1式以降である。②胴部のプロポーションは肩を張らない球胴化したものである。したがって小谷2式以降である。③頸部の括れはしっかりしており、内面のケズリも高い位置まで施される。したがって、小谷3式まで下らない。

上記の点を総合し、SD41の土器群は小谷2式に位置づけられるものであると結論づけた。

6. 遺物の詳細

SD41から出土した土器のうち、遺存状態が良く図化が可能であった48個体について掲載している。実測図をFig. 140~146に、写真を149~157に掲載した。

以下では、掲載した遺物の詳細について述べる。法量や調整などの基本的な項目については観察表Tab. 21・22 (p. 165、166)にまとめ、本項では特記すべき事項のみを述べる。

甕・壺では、肩部に施文されたものの割合が比較的高い。このうち波状文は22/23/27/32/37/39/41の7個体に認められる。小型の甕にはみられない。総じて波頂間隔が広くゆるやかな波を描くが、間隔の狭い急なもの

(32/41) も含まれる。振幅についてはそれほど差異がないが、狭いもの(23/36)が一部に存在する。施文原体は4~6条の密なもの以外に、1条の線描きのもの(22/39)がある。

波状文以外の肩部施文としては、列点文(40)、2段の米粒列点文(19/42)がある⁽²⁾。これらはいずれも全周まわらず、土器の正面観を示すものである。肩部に特別な施文がないものについては基本的にヨコハケを最終調整としている。

壺については高さをもった頸部に羽状文が施される(47/48)。両者とも中軸線で上下段を区画した有軸羽状文である。上下段のバランスは、47については上段が狭く不均等、48は上下段均等である。小谷式「後半」に、上段幅が狭くなり不均等になる傾向が指摘されている⁽³⁾ものの、本例の47については中軸線と上下段の中軸がずれており、時期が下るものと一概に判断することはできない。

46は肩部に突起がつく壺である。実測図では対になるように示したが、実際には突起は1箇所しかなく、反対側は破損して突起の有無が不明である。写真(Fig. 157)で分かるとおり突起は非常に小さく、把手として実用に耐えるようなものではない。

(1) 小型甕15の重量が780gであるのに対し、大型甕45は2,540gある。

(2) 42は破損状態に制約されて2段に図示できていないが、実際にはわずかにその痕跡が残る。

(3) 松山智弘2002「神原神社古墳埋納坑出土の土器について」『神原神社古墳』加茂町教育委員会

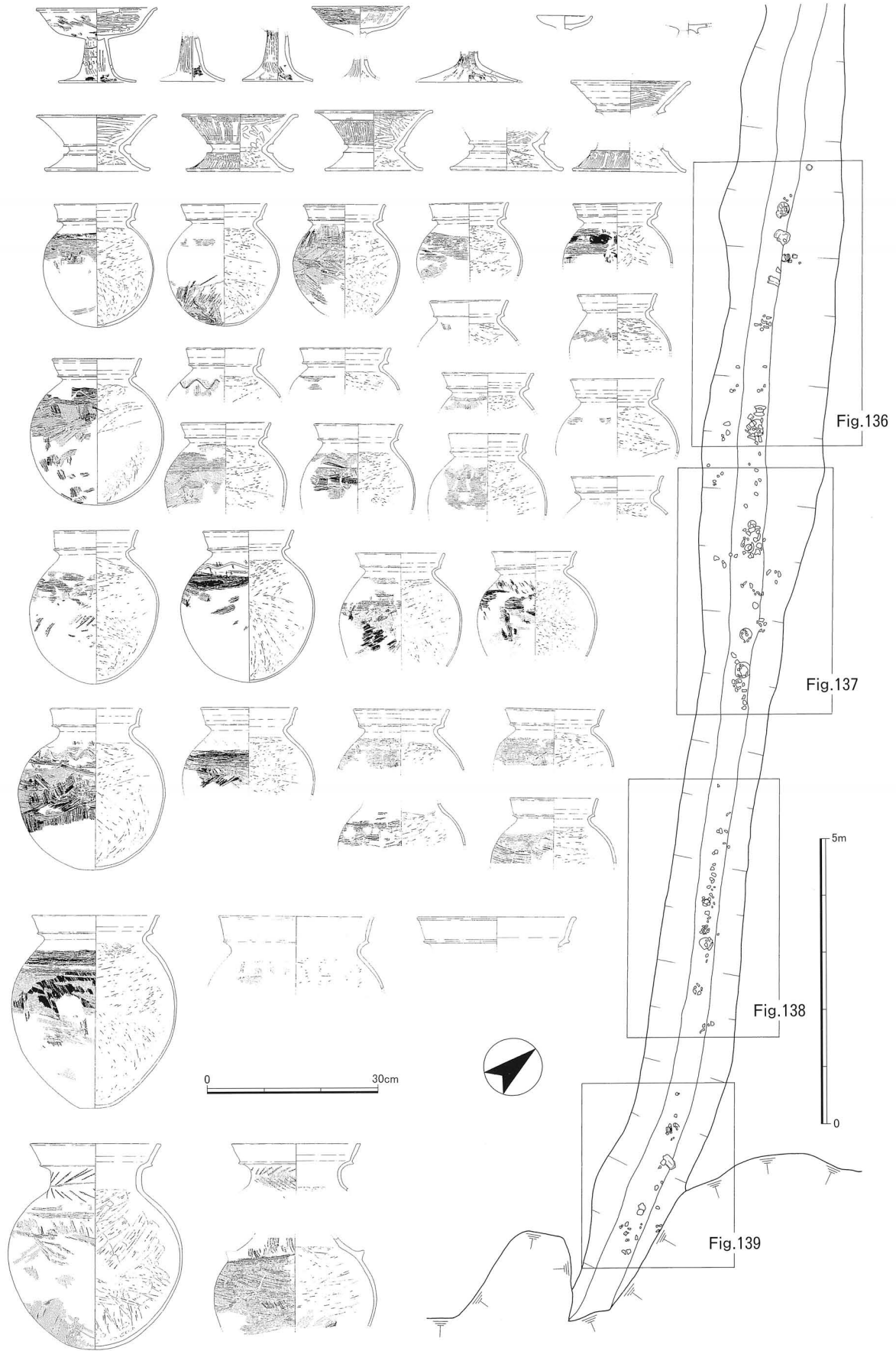


Fig.135 SD41 全体図 (S=1/100、遺物はS=1/10)



Fig.136 SD41
遺物出土状況図①
(S = 1/20)



Fig.138 SD41 遺物出土状況図③ (S=1/20)



Fig.139 SD41 遺物出土状況図④ (S = 1/20)

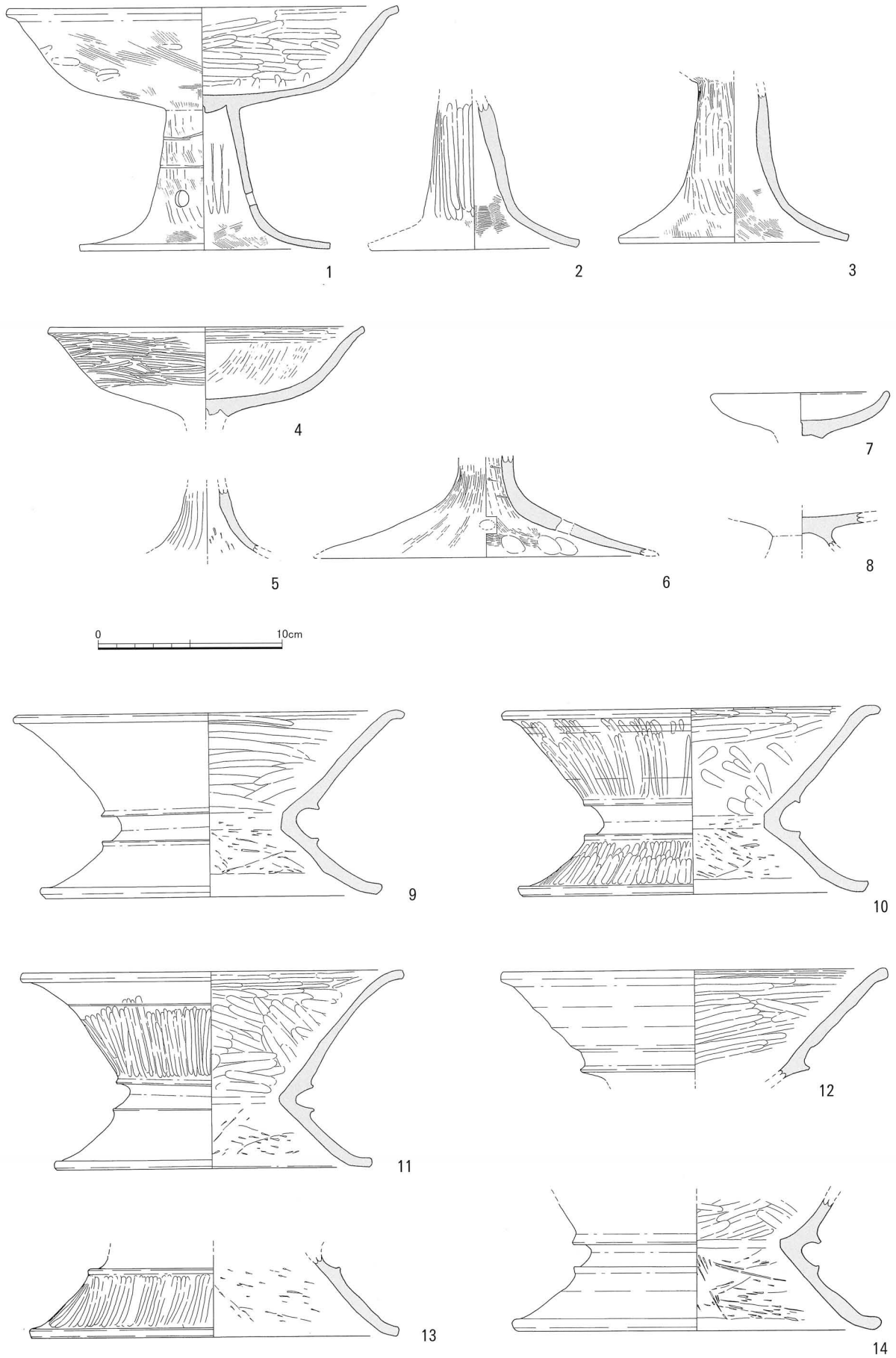


Fig.140 SD41 遺物実測図① (S=1/3)

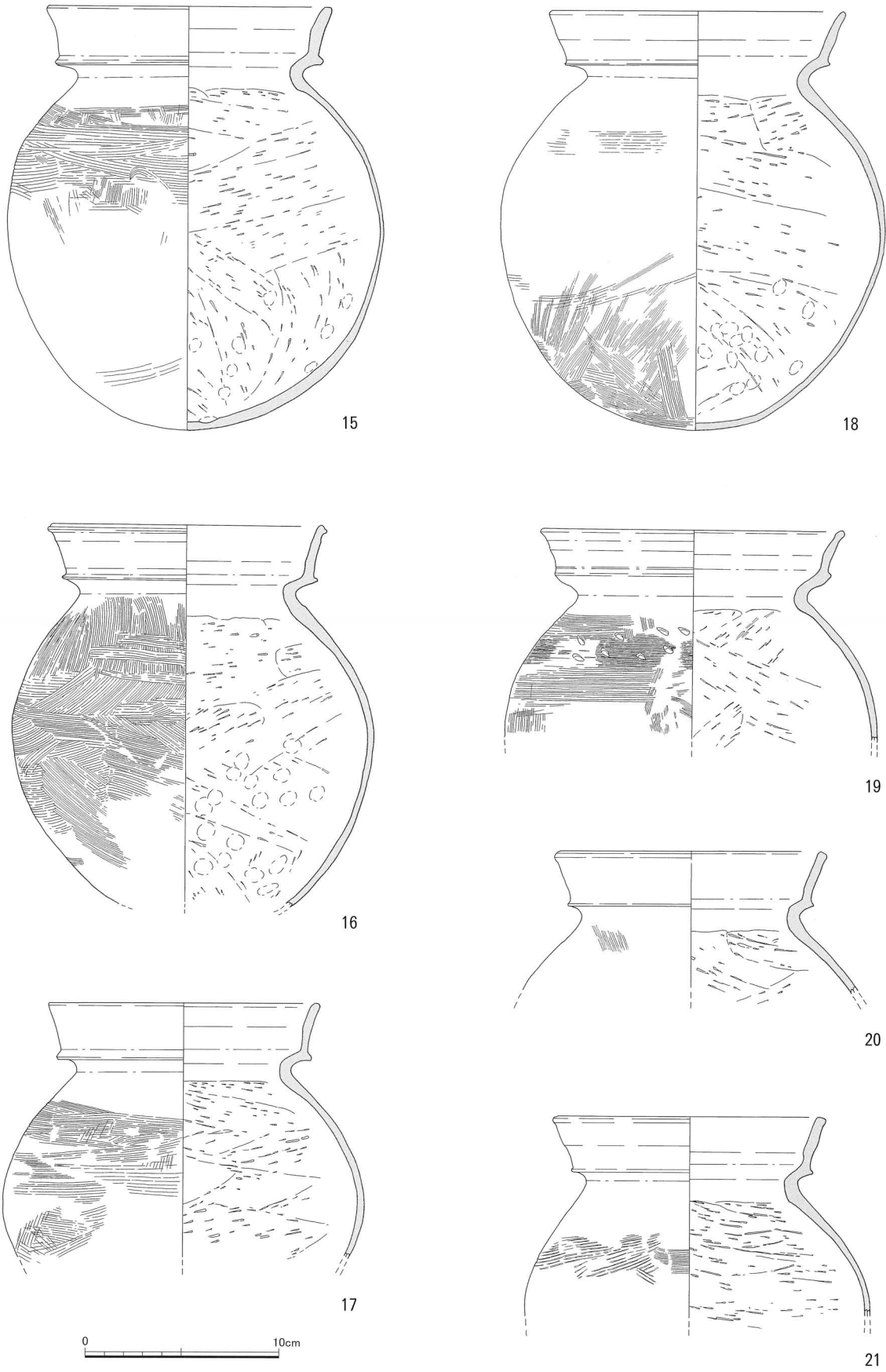


Fig.141 SD41 遺物実測図② (S=1/3)

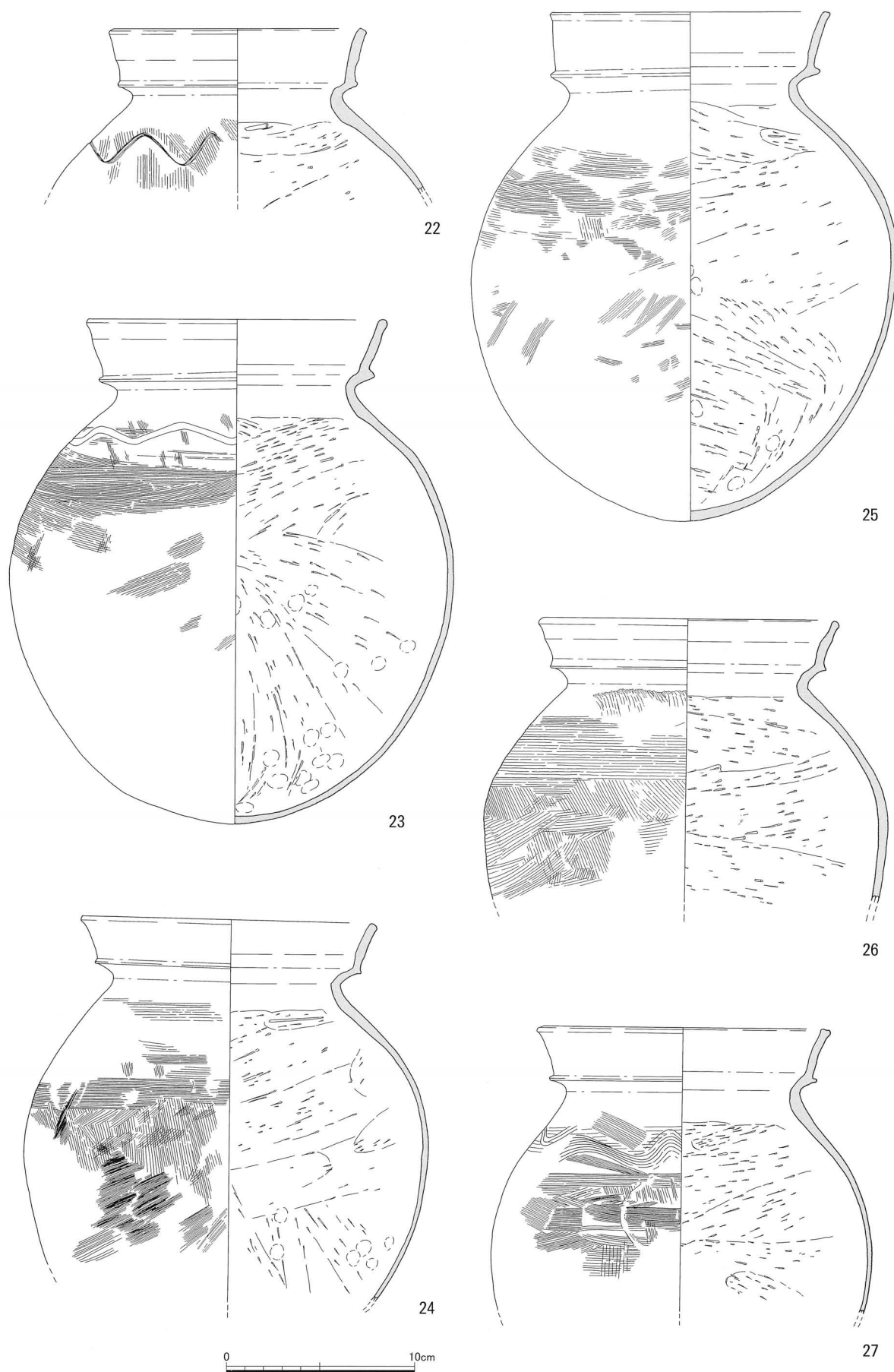


Fig.142 SD41 遺物実測図③ (S=1/3)

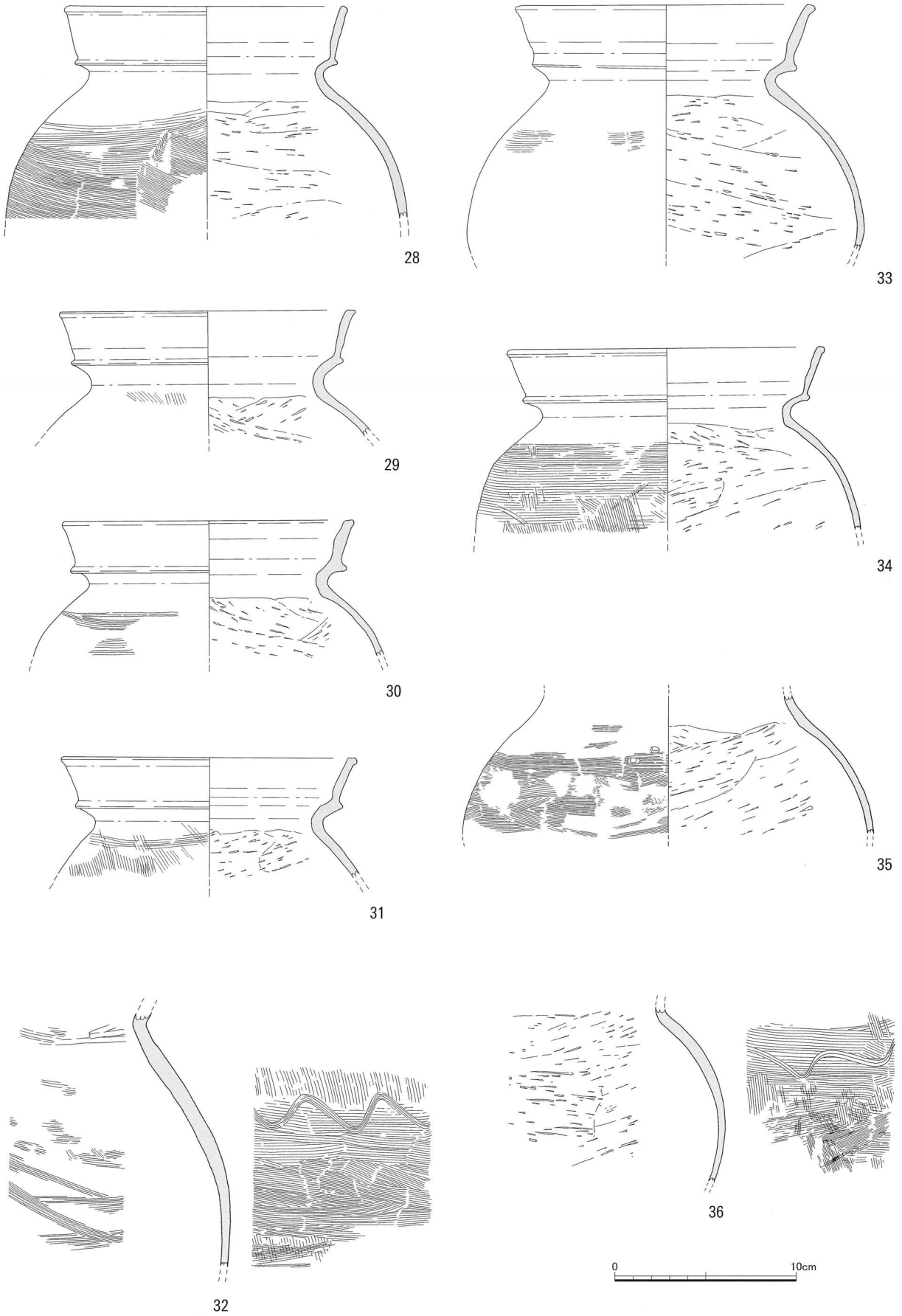


Fig.143 SD41 遺物実測図④ (S=1/3)

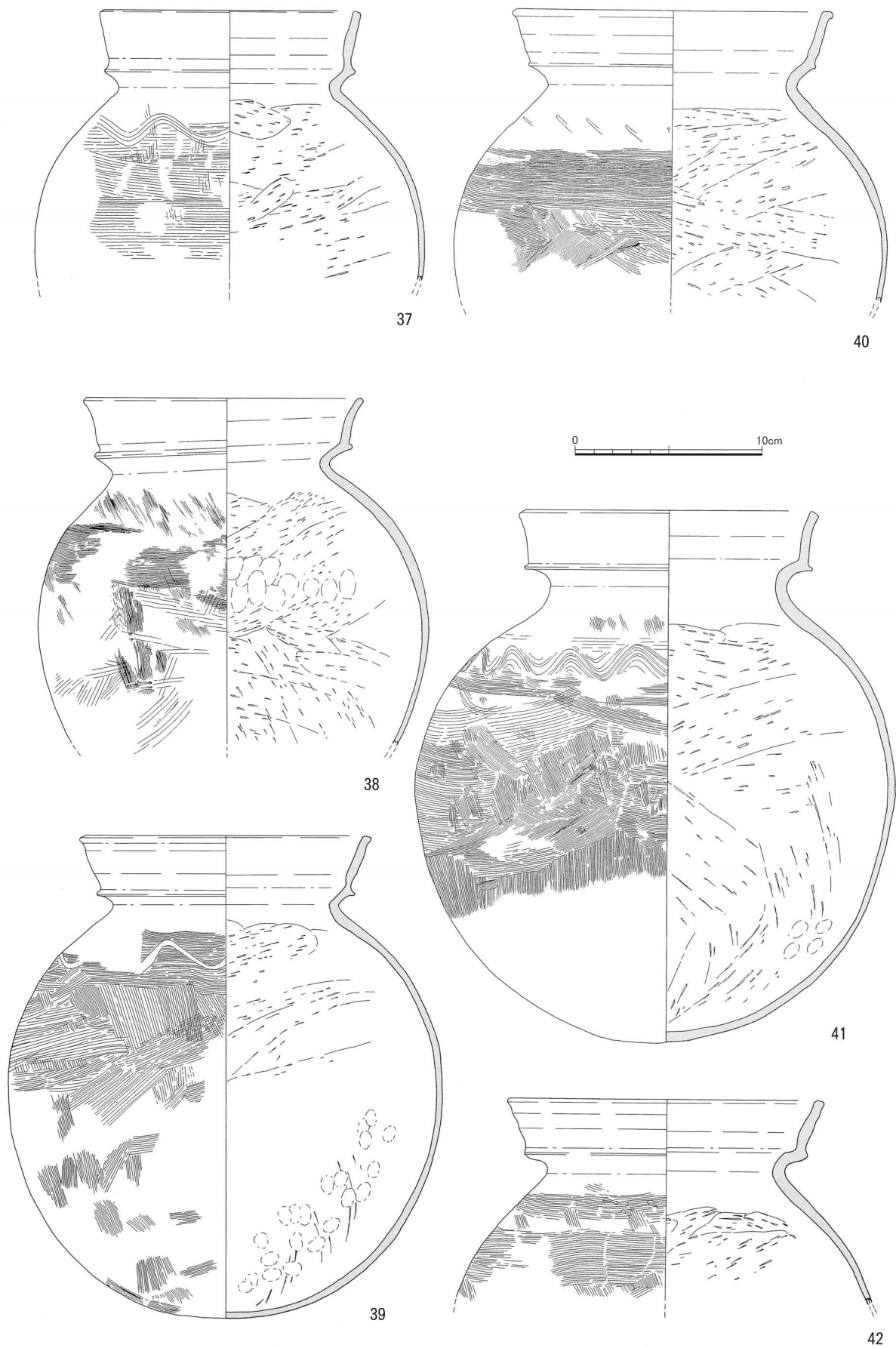


Fig.144 SD41 遺物実測図⑤ (S=1/3)

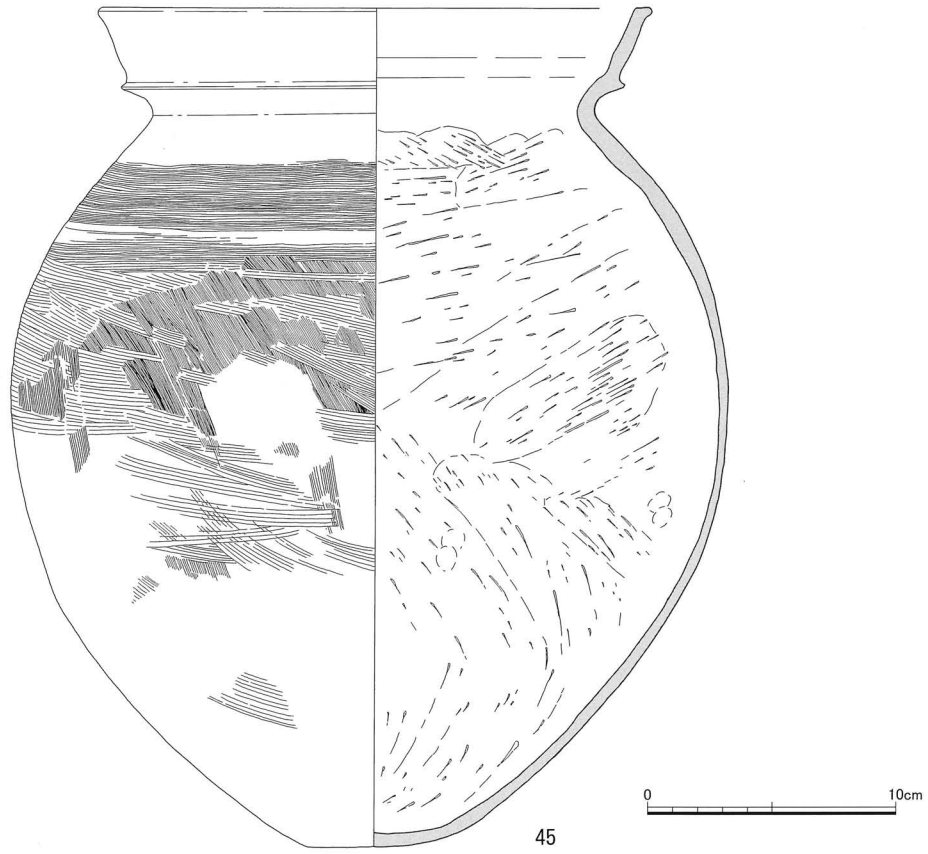
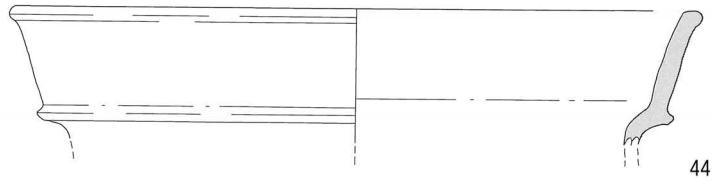
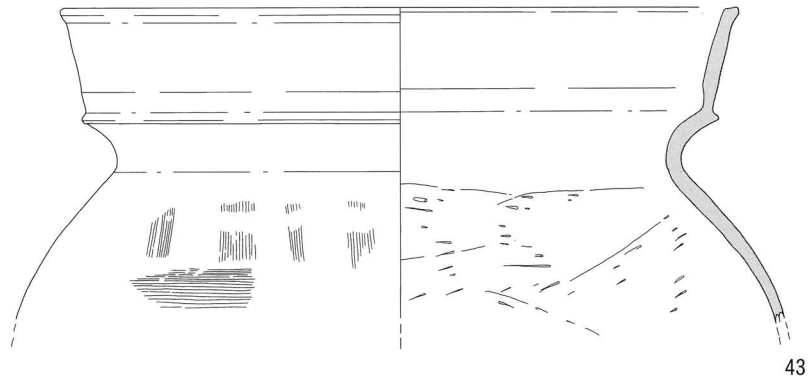
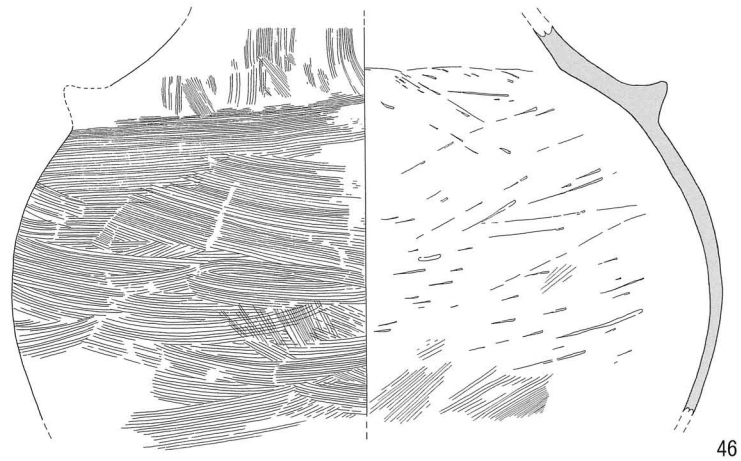
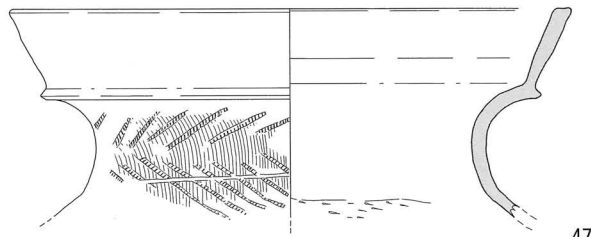


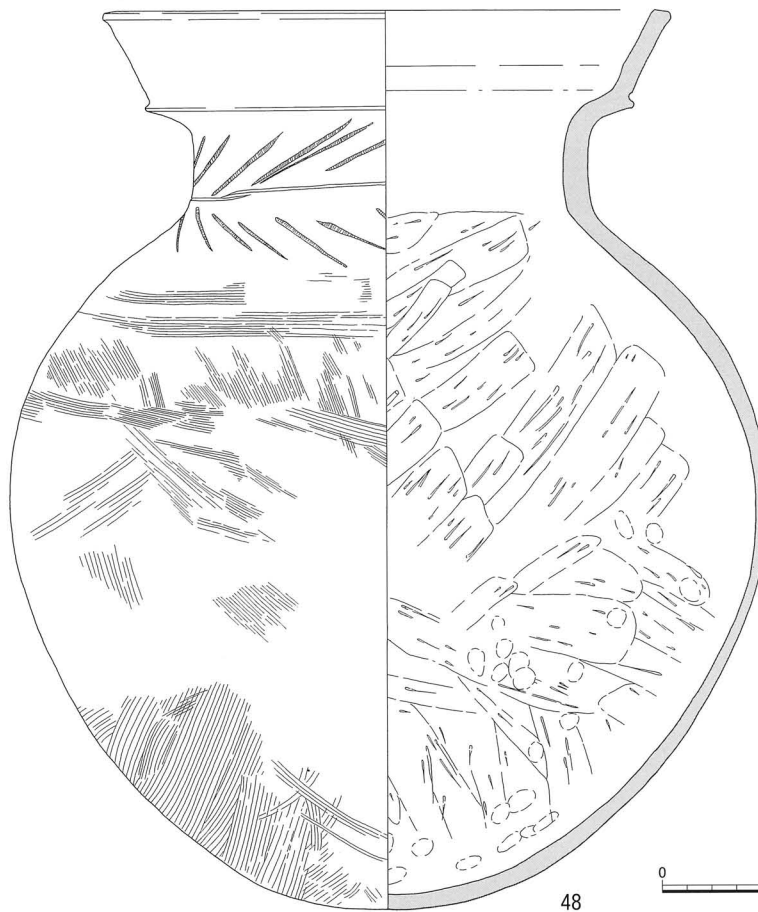
Fig.145 SD41 遺物実測図⑥ (S = 1/3)



46



47



48

0 10cm

Fig.146 SD41 遺物実測図⑦ (S=1/3)

Tab. 21 SD41出土遺物観察表①

番号	種別	器種	法量(cm)			色調	調整(内面/外面/特記事項)	残存度
			口径	器高	底径			
1	古式土師器	高坏	21.2	13.0	13.4	内外面: 橙褐色	坏部内面: 横方向のヘラミガキ/坏部外面: ハケ後ヨコナデ 脚部内面: 端部にヨコハケ/脚部外面: タテハケ、端部は ヨコハケ/3方向の円形透孔/脚部外面に3本の浅い沈線	坏部: 20% 脚部: 50%
2	古式土師器	高坏 (脚部)	-	-	11.4	内外面: 灰白色	内面: 端部ハケ/外面: 縦方向のヘラミガキ	脚部の20%
3	古式土師器	高坏 (脚部)	-	-	12.4	内外面: 浅黄褐色	内面: ナデ、端部不定方向のハケメ/外面: ハケメの後縦方 向のヘラミガキ	脚部の90%
4	古式土師器	高坏 (坏部)	17.2	-	-	内面: 灰黄褐色 外面: 黄褐色	内面: 口縁付近は横方向のヘラミガキ、下半は放射状のヘラ ミガキ/外面: 横方向のヘラミガキ	坏部の70%
5	古式土師器	高坏 (脚部)	-	-	-	内外面: 灰白色	内面: ヘラケズリ/外面: 縦方向のヘラミガキ	筒部の50%
6	古式土師器	高坏	-	-	18.8	内外面: 浅黄褐色、 外面に暗赤色の顔 料塗彩	内面: 上半横方向のケズリ、下半斜め方向のハケメ後端部指 押さえ/外面: 11本/cmのタテハケ	
7	古式土師器	高坏 (坏部)	9.8	-	-	内外面: にぶい橙 褐色	内外面: ナデ	坏部は完形
8	古式土師器	低脚坏 (脚部)	-	-	-	内外面: 橙褐色	内外面: ナデ	脚部の70%
9	古式土師器	器台	21.2	9.9	17.8	内外面: 浅黄褐色	受部内面: 縦方向のヘラミガキ/受部外面: ヨコナデ/脚部 内面: ヘラケズリ、端部ヨコナデ/脚部外面: ヨコナデ	全体の70%
10	古式土師器	器台	20.6	10.0	10.4	内外面: 明橙褐色	受部内面: 口縁付近は横方向のヘラミガキ、下半は縦方向の ヘラミガキ/筒部内面: ヘラケズリ/筒部外面: ヨコナデ/ 脚部内面: ヘラケズリ/脚部外面: 縦方向のヘラミガキ	全体の40%
11	古式土師器	器台	20.8	10.6	16.8	内外面: 黄褐色	受部内面: 斜め方向のヘラミガキ/受部外面: ヨコナデの後 ヘラミガキ/脚部内面: ヘラケズリ、端部ヨコナデ/脚部外 面: ヨコナデ	全体の80%
12	古式土師器	器台 (受部)	21.0	-	-	内外面: 橙褐色	内面: 横方向のヘラミガキ/外面: ヨコナデ	受部: 50%
13	古式土師器	器台 (台部)	-	-	20.0	内面: にぶい橙 褐色 外面: 浅黄褐色	内面: ヘラケズリ、端部ヨコナデ/外面: 縦方向のヘラミガ キ	脚部の20%
14	古式土師器	器台 (台部)	-	-	20.0	内外面: 浅黄褐色	受部内面: 斜め方向のヘラミガキ/受部外面: ヨコナデ、端 部ヨコナデ/脚部内面: ヘラケズリ/脚部外面: ヨコナデ	脚部の20%
15	古式土師器	甕	14.6	21.7	-	内外面: 浅黄褐色	内面: 口縁部~頸部ヨコナデ、以下横・縦方向のヘラケズリ /外面: 口縁部~頸部ヨコナデ、以下タテ・ヨコハケの後ナ デ/外面胴部に煤	全体の90%
16	古式土師器	甕	14.4	-	-	内面: 黄褐色、 外面: にぶい橙 褐色	内面: 口縁部~頸部ヨコナデ、以下不定方向のハケ/外面: 口縁部~頸部ヨコナデ、以下ヘラケズリ、胴部以下指頭圧痕 が多数あり	
17	古式土師器	甕	14.0	-	-	内外面: 灰白色	内面: 口縁部~頸部ヨコナデ、以下横方向のヘラケズリ/外 面: 口縁部~頸部ヨコナデ、以下不定方向のハケ	上半部の30%
18	古式土師器	甕	15.2	21.5	-	内外面: 灰黄褐色	内面: 口縁部~頸部ヨコナデ、以下ヘラケズリの後底部指押 さえ/外面: 口縁部~頸部ヨコナデ、以下不定方向のハケ	上半部の80%
19	古式土師器	甕	15.6	-	-	内外面: 浅黄褐色	内面: 口縁部~頸部ヨコナデ、以下斜め方向のヘラケズリ/ 外面: 口縁部~頸部ヨコナデ、以下タテ・ヨコハケ/肩部刺 突文	上半部の30%
20	古式土師器	甕	14.0	-	-	内外面: 浅黄褐色	内面: 口縁部~頸部ヨコナデ、以下斜め方向のヘラケズリ/ 外面: 口縁部~頸部ヨコナデ	口縁部のみ25%
21	古式土師器	甕	14.0	-	-	内外面: 浅黄褐色	内面: 口縁部~頸部ヨコナデ、以下横方向のヘラケズリ/外 面: 口縁部~頸部ヨコナデ、以下ヨコハケ	口縁部のみ100%
22	古式土師器	甕	13.8	-	-	内外面: 浅黄褐色	内面: 口縁部~頸部ヨコナデ、以下斜め方向のヘラケズリ/ 外面: 口縁部~頸部ヨコナデ、以下縦・斜め方向のハケの後 ナデ	口縁部のみ20%
23	古式土師器	甕	16.0	26.6	-	内外面: 灰白色	内面: 口縁部~頸部ヨコナデ、以下斜方向のヘラケズリ/外 面: 下半部に煤、口縁部~頸部ヨコナデ、肩部にタテ・ヨコ ハケ、以下ナデ/肩部2条波状文	全体の80%
24	古式土師器	甕	15.8	-	-	内外面: 灰白色	内面: 口縁部~頸部ヨコナデ、以下斜め方向のヘラケズリ/ 外面: 口縁部~肩部ヨコナデ、以下不定方向のハケ、胴部以 下ハケの後ナデ/器壁特に薄い	上半部の90%
25	古式土師器	甕	14.8	27.0	-	内外面: 灰黄褐色	内面: 口縁部~頸部ヨコナデ、以下横・縦方向のヘラケズリ、 胴部以下指押さえ/外面: 口縁部~頸部ヨコナデ、肩部~胴 部不定方向のハケ、以下ナデ	全体の80%
26	古式土師器	甕	16.0	-	-	内外面: 黄褐色	内面: 口縁部~頸部ヨコナデ、以下横方向のヘラケズリ/外 面: 口縁部~頸部ヨコナデ、不定方向のハケ	上半部の30%
27	古式土師器	甕	15.6	-	-	内面: 黄褐色 外面: 浅黄褐色	内面: 口縁部~頸部ヨコナデ、以下横方向のヘラケズリ/外 面: 胴部に煤、口縁部~頸部ヨコナデ、以下不定方向のハケ	上半部の90%
28	古式土師器	甕	15.6	-	-	内外面: 浅黄褐色	内面: 口縁部~頸部ヨコナデ、以下横方向のヘラケズリ/外 面: 口縁部~頸部ヨコナデ、ヨコハケ	上半部の60%
29	古式土師器	甕	16.2	-	-	内外面: 灰黄褐色	内面: 口縁部~頸部ヨコナデ、以下ヘラケズリ/外面: 全体 に煤、口縁部~頸部ヨコナデ、以下タテハケ	口縁部のみ25%
30	古式土師器	甕	16.0	-	-	内外面: 灰白色	内面: 口縁部~頸部ヨコナデ、以下斜め方向のヘラケズリ/ 外面: 口縁部~頸部ヨコナデ、以下薄いヨコハケ	口縁部のみ30%
31	古式土師器	甕	16.2	-	-	内外面: 橙褐色	内面: 口縁部~頸部ヨコナデ、以下横・斜方向のハケ/外面: 口縁部~頸部ヨコナデ、以下横方向のヘラケズリ	口縁部のみ30%
32	古式土師器	甕 (胴部)	-	-	-	内外面: にぶい橙 褐色	内面: 頸部横方向のヘラミガキ、以下部分的にヨコハケ/外 面: 煤付着、頸部ヨコナデ、以下縦・よこ方向のハケ	胴部のみ20%
33	古式土師器	甕	16.4	-	-	内外面: 浅黄褐色	内面: 口縁部~頸部ヨコナデ、以下横方向のヘラミガキ/外 面: 口縁部~頸部ヨコナデ、以下ヨコハケ	上半部の80%
34	古式土師器	甕	17.4	-	-	内外面: 浅黄褐色	内面: 口縁部~頸部ヨコナデ、以下横方向のヘラケズリ/外 面: 口縁部~頸部ヨコナデ、以下不定方向のハケの後ナデ	上半部の15%
35	古式土師器	甕 (胴部)	-	-	-	内面: 黄褐色 外面: 灰黄褐色	内面: 横方向のヘラケズリ/外面: 煤付着、ヨコハケ	胴部のみ20%
36	古式土師器	甕 (胴部)	-	-	-	内面: 浅黄褐色 外面: 黄褐色	内面: 横方向のヘラケズリ/外面: 不定方向のハケ	胴部のみ15%
37	古式土師器	甕	14.0	-	-	内外面: 灰白色	内面: 口縁部~頸部ヨコナデ、以下斜め方 向のヘラケズリ/外面: 口縁部~頸部ヨコナデ、以下タテ・ヨコハケ	上半部の30%
38	古式土師器	甕	14.6	-	-	内外面: 灰黄褐色	内面: 口縁部~頸部ヨコナデ、以下不定方向のハケ/外面: 口縁部~頸部ヨコナデ、以下斜め方向のヘラケズリ、胴部に 指押さえ	上半部の80%

Tab. 22 SD41出土遺物観察表②

番号	種別	器種	法量 (cm)			色調	調整 (内面/外面/特記事項)	残存度
			口径	器高	底径			
39	古式土師器	甕	15.6	25.7	—	内外面：浅黄褐色	内面：口縁部～頸部ヨコナデ、以下横方向のヘラケズリ、下半部にナデ・指頭圧痕あり/外面：全体に煤付着、口縁部～頸部ヨコナデ、肩部ヨコハケ、以下不定方向のハケの後ナデ	全体の30%
40	古式土師器	甕	17.2	—	—	内外面：黄橙色	内面：口縁部～頸部ヨコナデ、以下横方向のヘラケズリ/外面：口縁部～頸部ヨコナデ、肩部以下不定方向のハケ	上半部の60%
41	古式土師器	甕	16.0	28.4	—	内面：浅黄褐色 外面：灰黄褐色	内面：口縁部～頸部ヨコナデ、以下不定方向のヘラケズリ/外面：底部煤付着、口縁部～頸部ヨコナデ、肩部～胴部不定方向のハケ、以下ナデ	全体の80%
42	古式土師器	甕	17.0	—	—	内外面：にぶい橙色	内面：口縁部～頸部ヨコナデ、以下横方向のヘラケズリ/外面：口縁部～頸部ヨコナデ、以下タテ・ヨコハケ	上半部の40%
43	古式土師器	甕	34.8	—	—	内外面：灰白色	内面：口縁部～頸部ヨコナデ、以下横方向のヘラケズリ/外面：口縁部～頸部ヨコナデ、以下タテ・ヨコハケの後ナデ	口縁部のみ25%
44	古式土師器	甕	28.0	—	—	内外面：にぶい橙色	内外面：ヨコナデ/外面煤付着	口縁部のみ15%
45	古式土師器	甕	22.4	33.8	—	内外面：黄褐色	内面：口縁部～頸部ヨコナデ、以下斜方向のヘラケズリの後とところ指頭圧痕あり/外面：胴部煤、肩部ヨコハケ、以下不定方向のハケの後下半部ナデ	全体の90%
46	古式土師器	壺 (胴部)	—	—	—	内外面：黄褐色	内面：横方向のヘラケズリ、下半部斜めハケ/外面：不定方向のハケ、つまみ状突起1ヶ所残存、図上で2ヶ所に図示	胴部のみ80%
47	古式土師器	壺	22.6	—	—	内面：にぶい橙色 外面：黄褐色	内面：口縁部～頸部ヨコナデ、以下ヘラケズリ/外面：口縁部ヨコナデ、頸部タテハケ	口縁部のみ20%
48	古式土師器	壺	23.0	36.2	—	内外面：浅黄褐色	内面：口縁部～頸部ヨコナデ、以下斜め方向のヘラケズリ、底部指押さえ/外面：口縁部～頸部ヨコナデ、以下不定方向のハケ	全体の40%

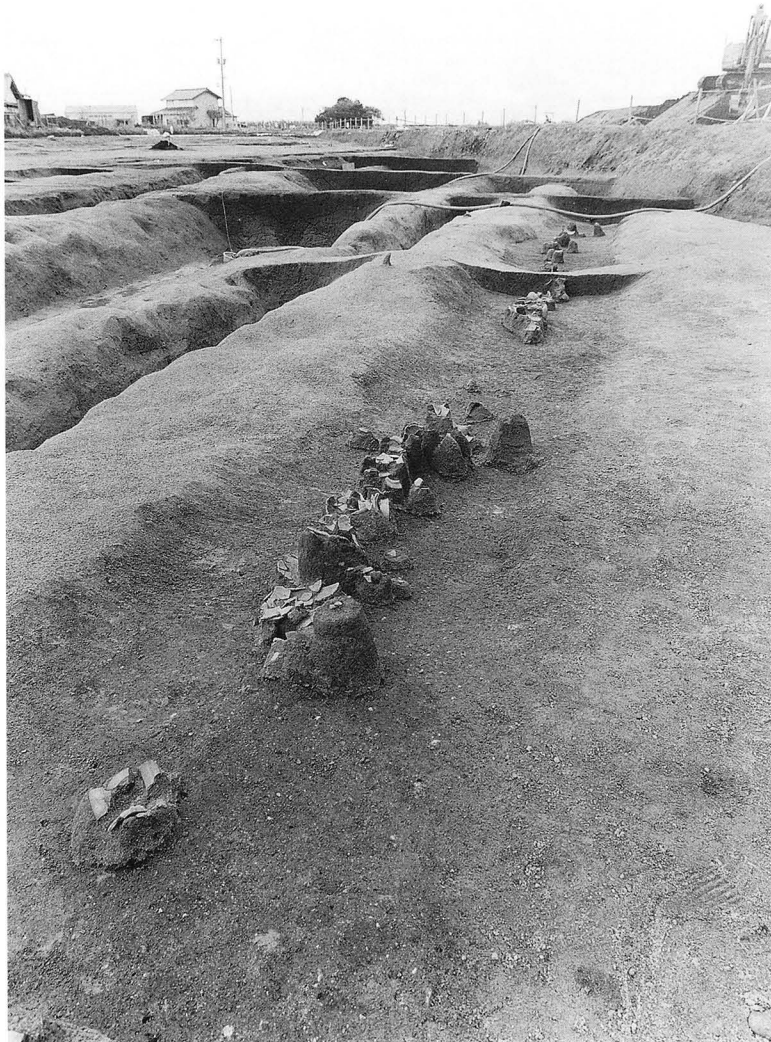


Fig.147 SD41 全景写真 (土器出土状況、南東から)

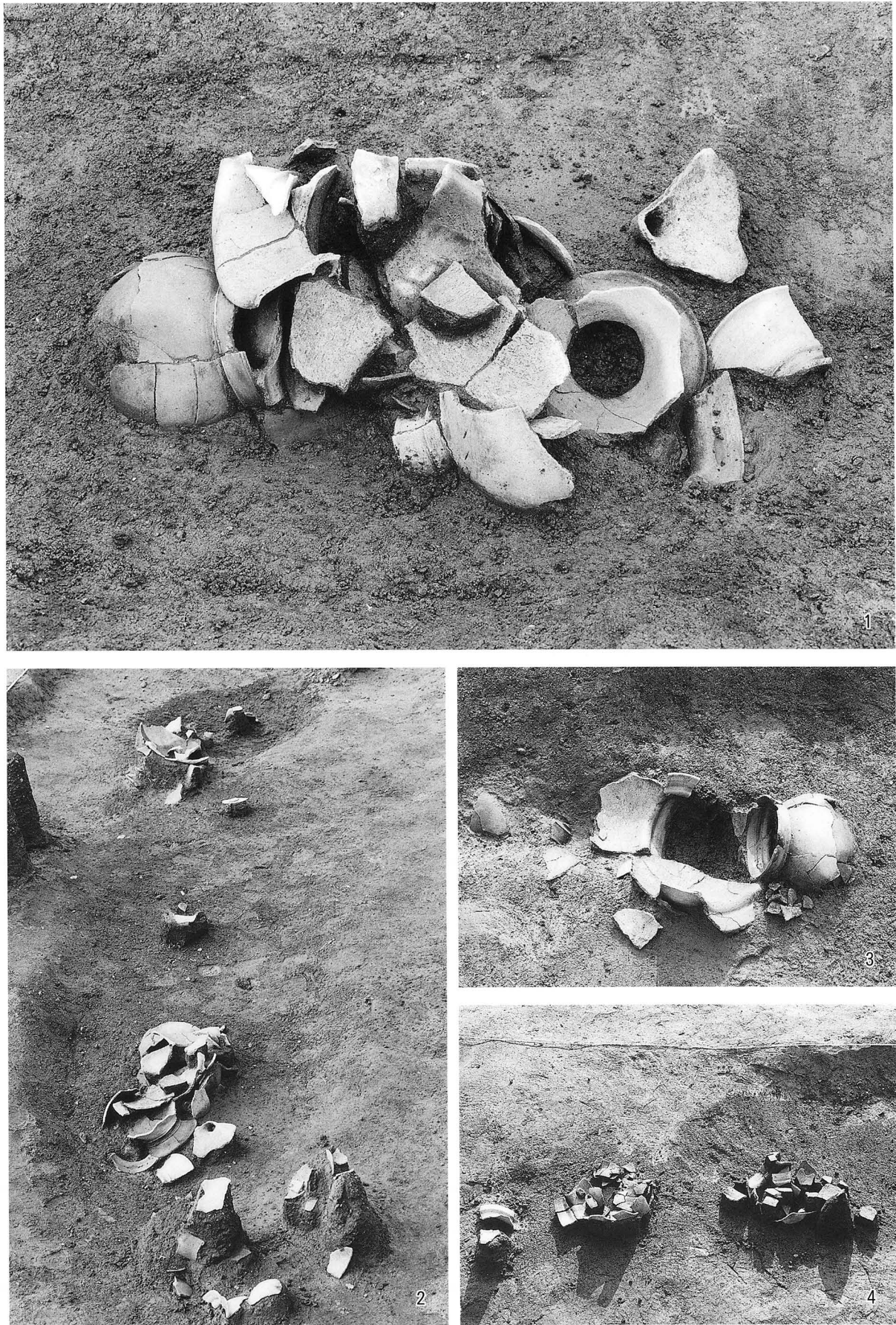


Fig.148 SD41 土器出土状況写真

(1 : Fig.137の一部、南西から 2 : 同、南東から 3 : 同、取り上げ中、北東から 4 : Fig.136の一部)

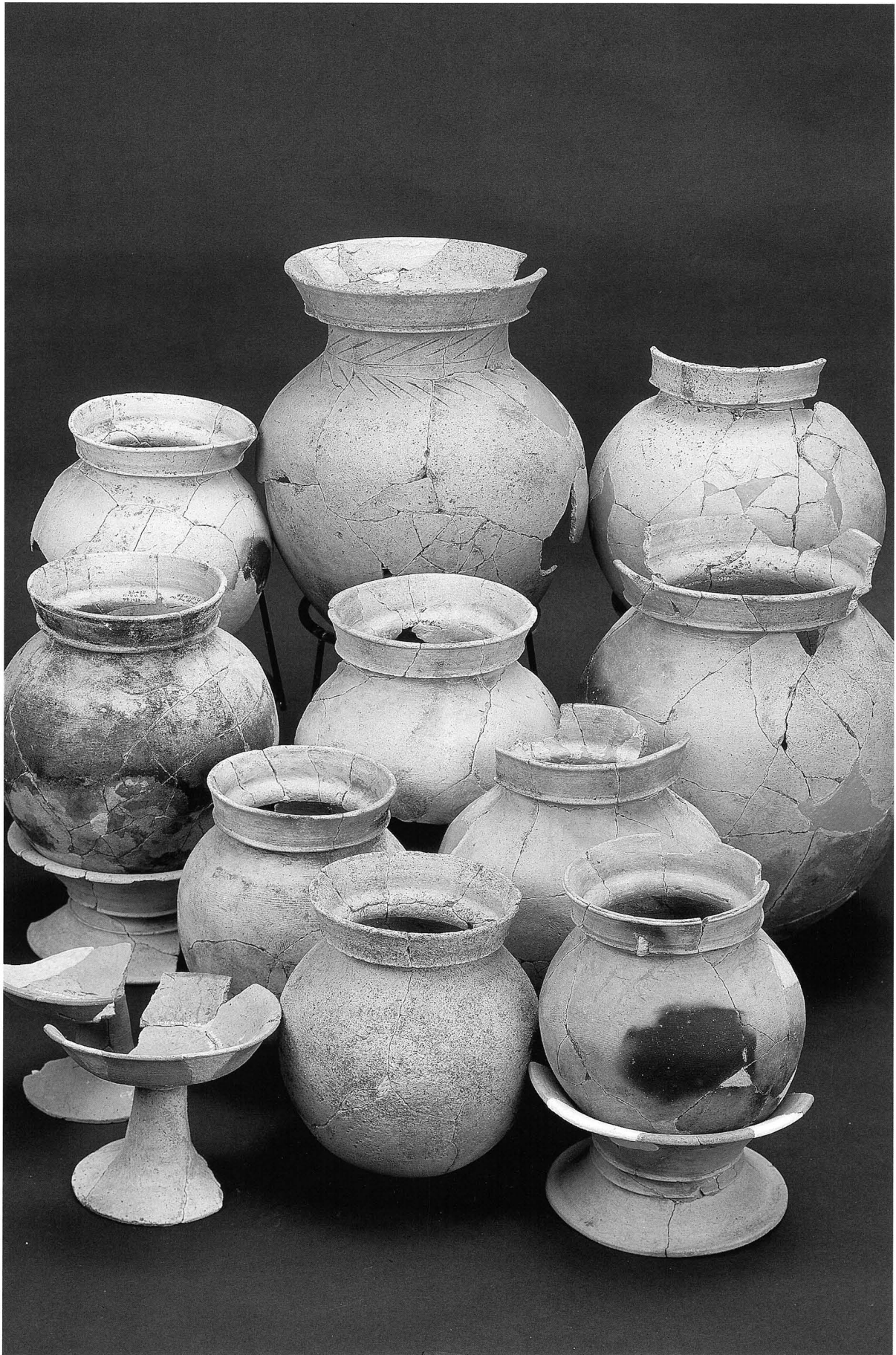


Fig.149 SD41 遺物集合写真（全体の一部）

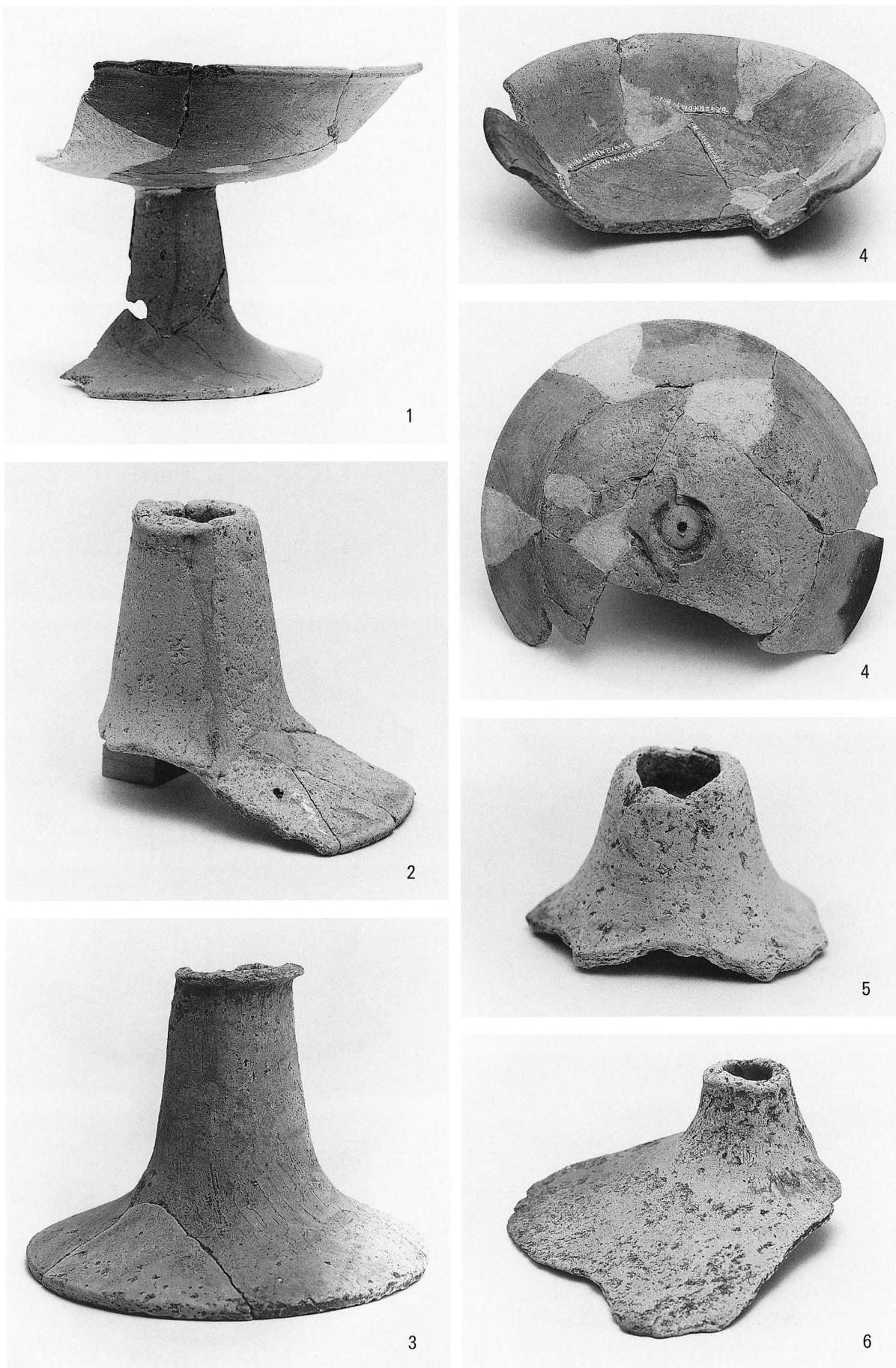


Fig.150 SD41 遺物写真①(高坏)

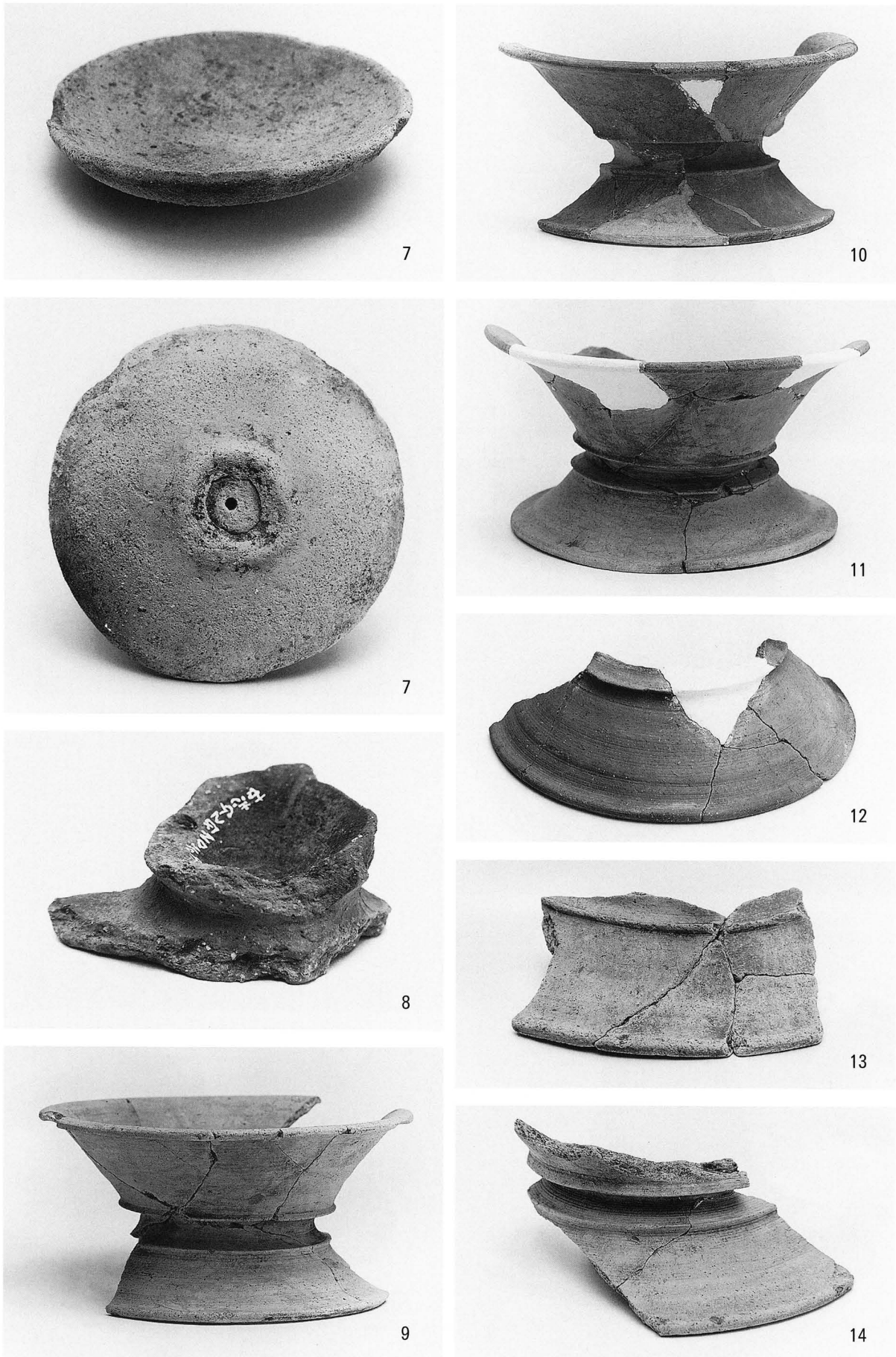


Fig.151 SD41 遺物写真② (高坏・低脚坏・鼓形器台)

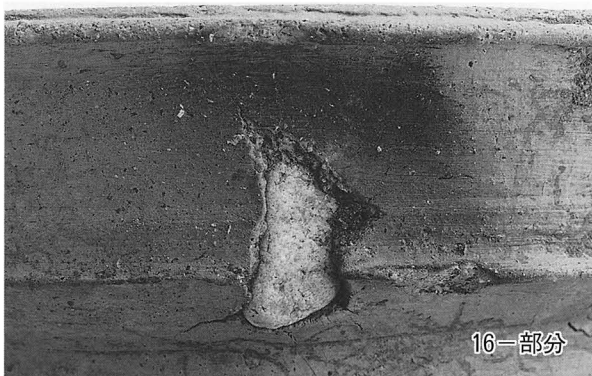
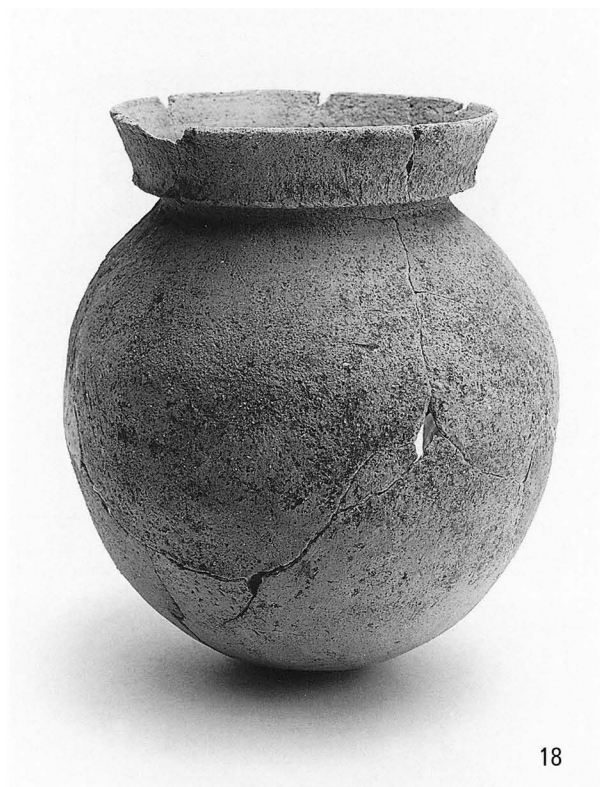


Fig.152 SD41 遺物写真③(甕)

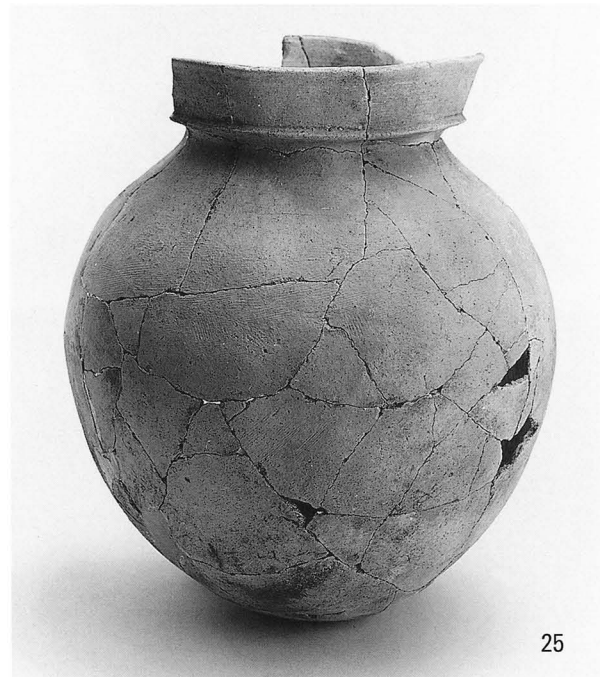
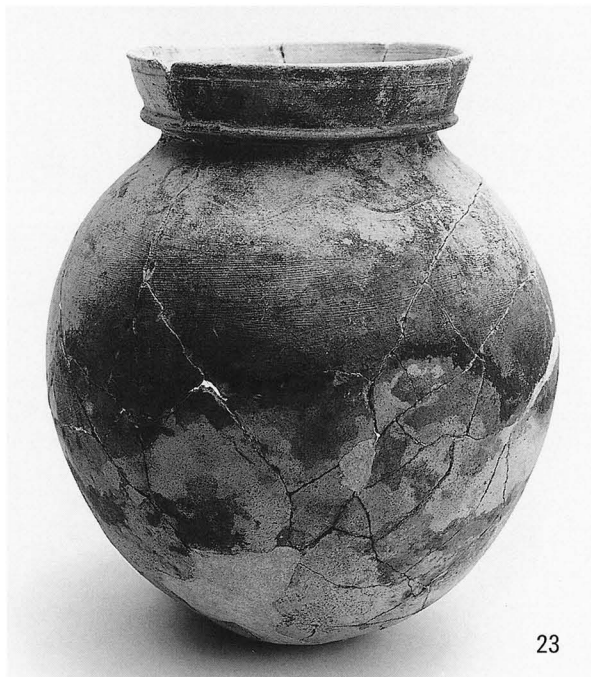


Fig.153 SD41 遺物写真④ (甕)



Fig.154 SD41 遺物写真⑤(甕)

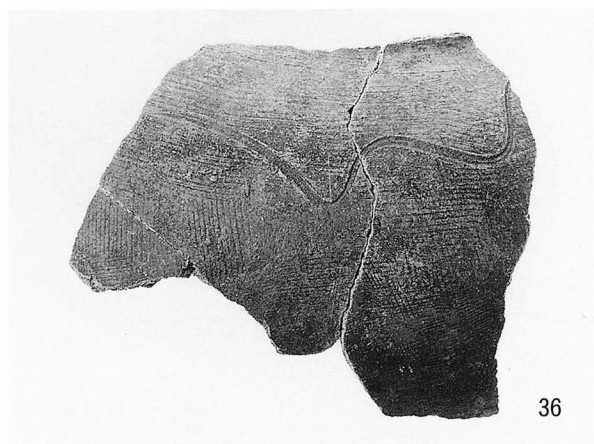
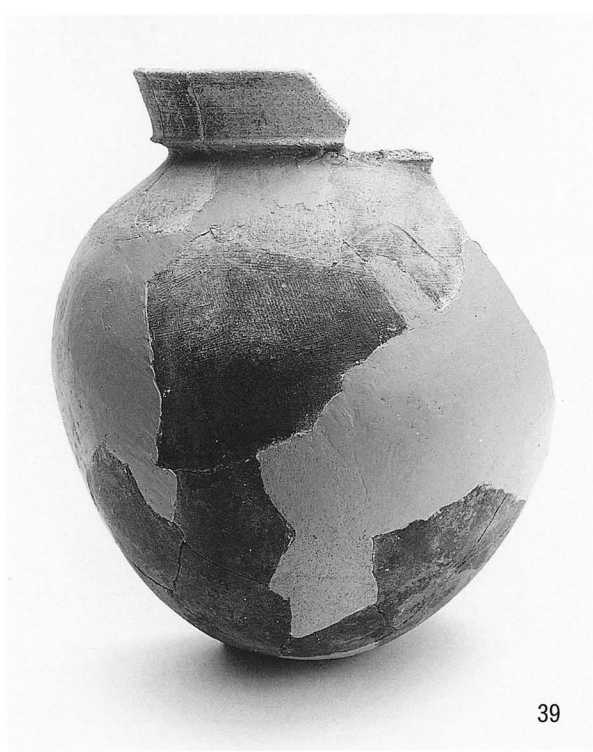
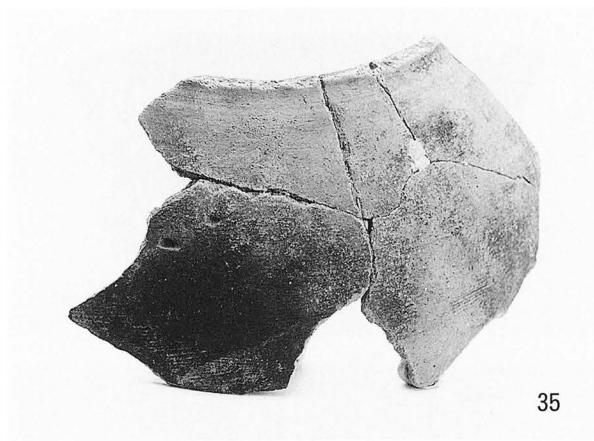


Fig.155 SD41 遺物写真⑥ (甕)